

インターフェース授業科目シラバス (目次)

コース	番号	プログラム	ページ	備考
環境	1	機械工学と環境	2～7	
	2	電気電子工学と環境	8～11	
	3	有明海学	12～15	
	4	地域環境の保全と市民社会	16～17	
	5	環境教育		特定の教育プログラム
文化と共生	6	アジアの理解	18～21	
	7	芸術創造	22～27	
	8	異文化交流	28～44	
	9	男女共同参画とジェンダー		
	10	Intercultural Communication		特定の教育プログラム
	11	映像・デジタル表現		特定の教育プログラム
生活と科学	12	現代社会における消費	45～48	
	13	アントレプレナーシップ	49～53	
	14	リサーチ・リテラシー	54～55	
	15	食料と生活	56～59	
	16	未来を拓く材料の科学		
	17	エレクトロニクスと生活	60～65	
	18	情報技術者キャリアデザイン	66～71	
医療福祉と社会	19	現代社会と医療	72～75	鍋島地区開講
	20	食と健康	76～83	鍋島地区開講
	21	子どもの発達支援	84～89	特定の教育プログラム 同期型授業
	22	障がい者就労支援	90～95	特定の教育プログラム 同期型授業
地域・佐賀学	23	佐賀の歴史文化	96～99	
	24	地域経済と社会	100～103	
	25	地域創成学	104～107	

注意

- 1 年次の最初に「特定の教育プログラム」の履修を許可された人は、既にそれぞれのプログラムに登録されていますので、履修希望を提出する必要はありません。
- 「特定の教育プログラム」で、定員の設定がないプログラムに対しては、履修希望を提出することができません。ただし、「子どもの発達支援」及び「障がい者就労支援」のプログラムについては、特定の教育プログラムの履修登録者以外の履修が認められますので、履修希望を提出することができます。
- 同期型授業は、本庄地区と鍋島地区とで、同時に授業が開講されます。

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	機械工学と環境 I (エネルギーと環境問題)	
担当教員 (所属)	永田修一(海エネ), 池上康之(海エネ), 今井康貴(海エネ)	
講義形式	講義・調査およびプレゼンテーション	
講義概要	<p>21 世紀の国際的な緊急課題の一つであるエネルギーと環境問題を取り上げ、最新の現状と展望とともに、その本質および考え方について教授する。また、佐賀大学で行われているエネルギーと環境に関する最先端の研究内容について詳細に概説する。特に、エネルギーの歴史と 21 世紀の課題、自然エネルギーの開発の現状、資源リサイクルと社会問題などについて行う。</p> <p>講義においては、エネルギーとは何か、人間はなぜエネルギーが必要か、人間はエネルギーを利用することによって何を得たのかを明らかにするとともに、エネルギーの利用の歴史を学問の発達との歴史とともに説明する。次に将来のエネルギーの需要量を推定し、それに必要なエネルギーの形態を具体的にみる。さらに人間と環境問題、特に炭酸ガス、フロンの問題について考える。さらに、環境問題とエネルギーの関連について概説し、解決策として有望な様々な自然エネルギー (太陽エネルギー、風力エネルギー、海洋エネルギー、地熱エネルギー) の利用技術の現状と将来展望について解説する。一部ディベートを行うことによって、能動的に理解を深める。</p>	
開講の意図	開講意図は講義概要と切り離せないので、講義概要に含めて示す。	
到達目標	21 世紀の国際的な緊急課題の一つであるエネルギーと環境問題の最新の現状と展望とともに、その本質および考え方を理解する。	
履修上の注意	特記事項なし	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第 1 回～第 5 回 エネルギー問題の現状と将来</p> <p>第 6 回～第 10 回 環境問題とエネルギー問題について</p> <p>第 11 回～15 回 自然エネルギーの利用技術の現状と将来展望</p> <p>第 16 回 定期試験またはレポート提出</p>	<p>第 1 回～第 5 回 エネルギー問題の現状と将来について理解する。</p> <p>第 6 回～第 10 回 環境問題について理解する。</p> <p>第 11 回～15 回 自然エネルギーの利用技術について理解する。</p>
成績評価の方法と基準	本講義は、担当者 3 名からなるオムニバス形式の授業となる。それぞれの教員が課題を与え、成績評価を実施する。総合成績は、合計得点を合算し 60 点以上を合格とする。	
開示する試験問題等	レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	機械工学と環境Ⅱ（設計・加工技術と環境）	
担当教員（所属）	張 波(工), 長谷川裕之(工), 大島史洋(工)	
講義形式	講義・調査およびプレゼンテーション, グループ作業	
講義概要	機械設計および機械加工は, 自動車を代表とするいわゆる“機械”を生み出す基盤技術となる。本科目では, 機械設計・機械加工の基本理論と緒現象について詳述するとともに, 近年の環境問題への取組み, 技術動向についても説明する。本講義を通じて, 機械設計・加工にかかわる技術や機器について知識を深め, 設計生産技術と環境の関わりについて理解する。	
開講の意図	開講意図は講義概要と切り離せないので, 講義概要に含めて示す。	
到達目標	設計と加工の基礎について学び, その関連技術等を知ることを通じて, 設計生産技術と環境に対する理解を深める。	
履修上の注意	特記事項なし	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	第1回～第4回 機械設計の基礎(張)	第1回～第4回 機械設計の基礎理論について, 内容を整理すること。
	第5回 環境と機械設計の関わり(張)	第5回 環境と機械設計の関わりについて 内容を整理すること。
	第6回～第9回 歯車設計・歯切り加工の基礎(大島)	第6回～第9回 歯車の寸法・強度設計について 内容を整理すること
	第10回 環境を考慮した歯車設計(大島)	第10回 動力伝達効率を高める歯車の応 用例について内容を整理するこ と。
	第11回～14回 機構学の基礎(長谷川)	第11回～14回 機械のしくみに関する基礎式を 整理すること。
	第15回 環境と機械のしくみについて(長谷川)	第15回 環境と機械の関わりについて内 容を整理すること。
	第16回 定期試験またはレポート提出	
成績評価の方法 と基準	本講義は, 担当者 3 名からなるオムニバス形式の授業となる。それぞれの教員が課題を与え, 成績評価を実施する。総合成績は, 合計得点を合算し 60 点以上を合格とする。	
開示する試験問題等	レポートの出題意図と評価基準, プレゼンテーションの評価基準, 定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は, 定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	機械工学と環境Ⅲ (流れと環境)	
担当教員 (所属)	松尾 繁 (工), 瀬戸口俊明 (海エネ), 橋本時忠 (工)	
講義形式	講義	
講義概要	流体の基礎と流体エネルギー分野における関連技術や機器について学ぶことを通して, 流体と環境に対する理解を深める.	
開講の意図	開講意図は講義概要と切り離せないので, 講義概要に含めて示す.	
到達目標	流体エネルギーの基礎について学び, その関連技術や機器を知ることを通じて, 流体エネルギーと環境に対する理解を深めることを目標とする. 具体的には, (1) 医工学に関連した流体の基礎を理解し, 流体機器への応用例を説明できる. (2) 流体機械の基礎を理解し, 自然エネルギーを利用した機器について説明できる. (3) 圧縮性流体の基本を理解し, 関連した流体现象について説明できる.	
履修上の注意	受講者は, 次の基礎知識を必要とする. (1) 力学の基礎(力のつりあい, ニュートンの運動法則等)を理解していること. (2) 微分と積分の基礎を理解していること.	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第 1~4 回 医工学における流体機器の基礎と応用 (橋本) 小テストまたはミニレポート実施</p> <p>第 5 回 中間試験 1</p> <p>第 6~9 回 自然エネルギーを利用した流体機械の基礎と応用 (瀬戸口) 小テストまたはミニレポート実施</p> <p>第 10 回 中間試験 2</p> <p>第 11~14 回 圧縮性を伴う流体の基礎と応用 (松尾) 小テストまたはミニレポート実施</p> <p>第 15 回 中間試験 3</p> <p>第 16 回 定期試験</p>	<p>第 1~4 回 次回までに前回の講義内容を整理し, 復習しておくこと.</p> <p>第 6~9 回 次回までに前回の講義内容を整理し, 復習しておくこと.</p> <p>第 11~14 回 次回までに前回の講義内容を整理し, 復習しておくこと.</p>
成績評価の方法と基準	<p>1. 3 回を超える欠席を認めない.</p> <p>2. 総合成績は, 小テストまたはミニレポート (30%), 中間試験 (30%), 定期試験 (40%)として算出し, 60 点以上を合格とする.</p>	
開示する試験問題等	小テスト, 中間試験, 定期試験の解答例, レポートの出題意図と評価基準を希望者に開示する.	
開示方法	開示を希望する場合は, 定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること.	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	機械工学と環境Ⅲ（材料と環境）	
担当教員（所属）	只野裕一（工），森田繁樹（工），武富紳也（工）	
講義形式	講義，調査およびプレゼンテーション，グループ作業	
講義概要	金属を中心とした機械材料の基礎について概説するとともに，その関連技術および環境問題との関連について，講義およびグループ調査を通じて学習する．これを通じて，機械材料と環境および人間の生活とのかかわりについて理解を深める．	
開講の意図	開講意図は講義概要と切り離せないので，講義概要に含めて示す．	
到達目標	機械材料の基礎について学び，その関連技術や環境との関わりを知ることを通じて，機械材料と環境に対する理解を深めることを目標とする．	
履修上の注意		
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1～3回 機械材料の基礎</p> <p>第4,5回 機械材料と環境の関わり</p> <p>第6回 機械材料と環境に関する問題の調査1（グループ毎）</p> <p>第7,8回 調査結果のプレゼンテーション1（グループ毎）</p> <p>第9～12回 機械材料分野からの対策技術の紹介</p> <p>第13回 機械材料と環境に関する問題の調査2（グループ毎）</p> <p>第14,15回 調査結果のプレゼンテーション2（グループ毎）</p> <p>第16回 定期試験</p>	<p>第1～5回 次回までに前回の講義内容を整理する．</p> <p>第6回 グループ毎に情報を整理し，プレゼンテーションの準備を進める．</p> <p>第7,8回 プレゼンテーションの内容に関する反省点，検討課題についてまとめる．</p> <p>第9～12回 次回までに前回の講義内容を整理する．</p> <p>第13回 グループ毎に情報を整理し，プレゼンテーションの準備を進める．</p> <p>第14,15回 プレゼンテーションの内容に関する反省点，検討課題についてまとめ，授業全体について整理，復習する．</p>
成績評価の方法と基準	総合成績は，調査レポート(30%)，プレゼンテーション(30%)，定期試験(40%)として算出し，60点以上を合格とする．	
開示する試験問題等	レポートの出題意図と評価基準，プレゼンテーションの評価基準，定期試験の解答例を希望者に開示する．	
開示方法	開示を希望する場合は，定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること．	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	機械工学と環境Ⅳ（熱エネルギーと環境）	
担当教員（所属）	石田賢治（工），有馬博史（海エネ）	
講義形式	講義，調査およびプレゼンテーション，グループ活動	
講義概要	エネルギー・環境問題の背景とその対策技術の最近の動向，特に熱エネルギー分野における関連技術や機器について学ぶことを通して，エネルギーと環境に対する理解を深める。	
開講の意図	開講意図は講義概要と切り離せないので，講義概要に含めて示す。	
到達目標	熱エネルギーの基礎について学び，その関連技術や機器を知ることを通じて，エネルギーと環境に対する理解を深めることを目標とする。	
履修上の注意		
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1～8回 熱工学の基礎</p> <p>第9,10回 エネルギー・環境問題の背景</p> <p>第11回 エネルギー・環境問題への熱工学分野からの対策技術の紹介 エネルギー・環境問題とその対策技術の調査準備(グループ毎)</p> <p>第12回 調査のまとめとプレゼンテーションの準備(グループ毎)</p> <p>第13～15回 調査結果のプレゼンテーション(グループ毎)</p> <p>第16回 定期試験</p>	<p>第1～10回 次回までに前回の講義内容を整理する。</p> <p>第11回 次回までに前回の講義内容を整理する。グループでの議論に基づいて各自調査を開始する。</p> <p>第12回 グループ毎に情報を整理し，プレゼンテーションの準備を進める。</p> <p>第13～15回 プレゼンテーションに関する反省点や課題等についてまとめ，授業全体について整理，復習する。</p>
成績評価の方法と基準	総合成績は，調査レポート，プレゼンテーション，定期試験により総合的に評価し，60点以上を合格とする。	
開示する試験問題等	レポートの出題意図と評価基準，プレゼンテーションの評価基準，定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は，定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	機械工学と環境 IV (環境計測と制御)	
担当教員 (所属)	寺本 顕武 (工), 辻村 健 (工), イスラム カーン (工)	
講義形式	講義と発見的学習を組み合わせたハイブリッド型ラーニング	
講義概要	Arduino に代表されるマイクロコントローラを用いて, 我々をとりまく環境情報の一部を自動的に取得し, PC と通信し, 判断し, 動作をする簡単なシステムを構築する. 「何をつくるかを考える」のではなく, 「作りながら考えてものを作る」プロセスを体験することを考えている.	
開講の意図	開講意図は講義概要と切り離せないので, 講義概要に含めて示す.	
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 環境情報の変化に応答するシステムを具体的にイメージできる. 2. イメージした仕組みを具体的に記述できる. 3. 記述に従って仕組みを実現できる. 4. 実現されたものを客観的に評価できる. 	
履修上の注意	USB 端子のついたノート PC が必要である.	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. マイクロコントローラを用いたプロトタイプング 2. 開発環境の構築 3. 電子回路の基礎 4. Arduino と PC の通信 5. センサ入力 6. アクチュエータへの出力 7. 信号処理の基礎 	受講者一人一人の PC 上に Arduino の開発環境を構築し, その上でシステムを設計する. 講義時間中では, ほんの数例を説明することしかできないので, 各自が時間外に自分で確認することが大切である.
成績評価の方法と基準	<ol style="list-style-type: none"> 1. 想定通りに動作するか否か 2. レポートに上記の到達目標の各項目に対応した内容が具体的かつ合理的に記述されているか否か <p>以上を基準に, 製作物 30%レポート 70%で評価する.</p>	
開示する試験問題等	レポート課題を開示する.	
開示方法	ライブキャンパスを通じて開示する.	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	電気電子工学と環境 I (環境と電気工学)	
担当教員 (所属)	猪原 哲 (工)	
講義形式	講義, 調査およびプレゼンテーション, グループ作業	
講義概要	世界のエネルギー事情が抱える問題、環境汚染問題などが電気電子工学の技術とどのように関わっているか、あるいはそれらの問題の解決にどのようにアプローチできるか、などについて講義, 演習, グループ調査を通じて学習する。また, これらの学習結果についてプレゼンテーションを行う。	
開講の意図	環境・資源・エネルギー問題の解決に資する電気電子工学の歴史と最近の技術動向について理解を深める。	
到達目標	<p>■最近のわが国、世界の電力・エネルギー、エネルギー資源の現状、環境問題について基礎的な知識をもつ。</p> <p>■上記のような事柄と電気電子工学の技術との係わり合いについて、認識をもつことができる。</p>	
履修上の注意		
授業計画	<p>内容</p> <p>(1) ガイダンス (2) 世界のエネルギー・電力事情 (3) エネルギー資源問題について (DVD) (4) 地球環境の変動と極域環境 (5) 高電圧と環境 (6) 落雷は「落ちる」? (7) 英語論文に挑戦 (1) (8) 英語論文に挑戦 (2) (9) 英語論文に挑戦 (3) (10) 英語論文に挑戦 (4) (11) ~ (13) 電気電子工学と環境との関わりに関する調査およびプレゼンテーションの準備 (14), (15) プレゼンテーション</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>第 1~6 回 各回の講義に関する課題および予習を行なう。 第 7~10 回 英語論文の日本語訳の予習を行う。 第 11~13 回 プレゼンテーションの準備を行う。 第 10~11 回 各回の講義に関する課題を行なう。 第 14, 15 回 プレゼンテーションの準備および最終レポートの作成。</p>
成績評価の方法と基準	総合成績は、講義課題・レポート (30%), プレゼンテーション(30%), 定期試験(40%)として算出し、60 点以上を合格とする。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準, プレゼンテーションの評価基準, 定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	電気電子工学と環境Ⅱ（環境と電磁工学）	
担当教員（所属）	村松和弘（工）	
講義形式	講義，調査およびプレゼンテーション，グループ作業	
講義概要	電磁工学の基礎について概説するとともに，その関連技術および環境問題との関連について，講義およびグループ調査を通じて学習し，電磁工学と環境とのかかわりについて理解を深める。	
開講の意図	環境・資源・エネルギー問題の解決に資する電磁工学の歴史と最近の技術動向について理解を深める。	
到達目標	電磁工学の基礎について学び，その関連技術や環境との関わりを知ることを通じて，電磁工学と環境に対する理解を深めることを目標とする。	
履修上の注意		
授業計画	<p>内容</p> <p>第1回 ガイダンス 第2～4回 電磁工学の基礎（講義） 第5,6回 電磁工学と環境の関わり（講義） 第7回 電磁工学に関する環境問題の調査（グループ毎） 第8,9回 調査結果のプレゼンテーション（グループ毎）</p> <p>第10～11回 電磁工学に関する環境問題の対策技術（講義） 第12回 電磁工学に関する環境問題の対策技術の調査（グループ毎） 第13,14回 調査結果のプレゼンテーション（グループ毎）</p> <p>第15回 まとめ 第16回 定期試験</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>第1～6回 各回の講義に関する課題を行なう。 第7回 プレゼンテーションの準備を行なう。 第8,9回 他のプレゼンテーションに対する意見，自身のプレゼンテーションに関する反省をレポートにまとめる。 第10～11回 各回の講義に関する課題を行なう。 第12回 プレゼンテーションの準備を行なう。 第13,14回 他のプレゼンテーションに対する意見，自身のプレゼンテーションに関する反省をレポートにまとめる。 本授業の感想をレポートにまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	総合成績は，講義課題・レポート（30%），プレゼンテーション(30%)，定期試験(40%)として算出し，60点以上を合格とする。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準，プレゼンテーションの評価基準，定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は，定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	電気電子工学と環境 III (環境とプラズマエレクトロニクス)	
担当教員 (所属)	大津康徳 (工)	
講義形式	講義, 調査およびプレゼンテーション, グループ作業	
講義概要	プラズマエレクトロニクスの基礎について概説するとともに, その関連技術および環境問題との関連について, 講義およびグループ調査を通じて学習し, プラズマエレクトロニクスと環境とのかかわりについて理解を深める.	
開講の意図	環境・資源・エネルギー問題の解決に資するプラズマエレクトロニクスの歴史と最近の技術動向について理解を深める.	
到達目標	プラズマエレクトロニクスの基礎について学び, その関連技術や環境との関わりを知ることを通じて, プラズマエレクトロニクスと環境に対する理解を深めることを目標とする.	
履修上の注意		
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 ガイダンス</p> <p>第2~4回 プラズマエレクトロニクスの基礎 (講義)</p> <p>第5, 6回 プラズマエレクトロニクスと環境の関わり (講義)</p> <p>第7回 プラズマエレクトロニクスに関する環境問題の調査 (グループ毎)</p> <p>第8, 9回 調査結果のプレゼンテーション (グループ毎)</p> <p>第10~11回 プラズマエレクトロニクスに関する環境問題の対策技術 (講義)</p> <p>第12回 プラズマエレクトロニクスに関する環境問題の対策技術の調査 (グループ毎)</p> <p>第13, 14回 調査結果のプレゼンテーション (グループ毎)</p> <p>第15回 まとめ</p> <p>第16回 定期試験</p>	<p>第1~6回 各回の講義に関する課題を行なう.</p> <p>第7回 プレゼンテーションの準備を行なう.</p> <p>第8, 9回 他のプレゼンテーションに対する意見, 自身のプレゼンテーションに関する反省をレポートにまとめる.</p> <p>第10~11回 各回の講義に関する課題を行なう.</p> <p>第12回 プレゼンテーションの準備を行なう.</p> <p>第13, 14回 他のプレゼンテーションに対する意見, 自身のプレゼンテーションに関する反省をレポートにまとめる.</p> <p>本授業の感想をレポートにまとめる.</p>
成績評価の方法と基準	総合成績は, 講義課題・レポート (30%), プレゼンテーション(30%), 定期試験(40%)として算出し, 60点以上を合格とする.	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準, プレゼンテーションの評価基準, 定期試験の解答例を希望者に開示する.	
開示方法	開示を希望する場合は, 定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること.	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	電気電子工学と環境 IV (環境とオプトエレクトロニクス)	
担当教員 (所属)	田中 徹 (工)	
講義形式	講義, 調査およびプレゼンテーション, グループ作業	
講義概要	太陽電池、発光ダイオードなど各種光デバイスの開発の歴史, 材料, 動作原理などについて概説するとともに, その関連技術および環境問題との関連について, 講義およびグループ調査を通じて学習し, オプトエレクトロニクスと環境とのかかわりについて理解を深める.	
開講の意図	環境・資源・エネルギー問題の解決に資するオプトエレクトロニクスの歴史と最近の技術動向について理解を深める.	
到達目標	オプトエレクトロニクスの基礎について学び, その関連技術や環境との関わりを知ることを通じて, オプトエレクトロニクスと環境に対する理解を深めることを目標とする.	
履修上の注意		
授業計画	<p>内容</p> <p>第 1 回 ガイダンス 第 2~6 回 オプトエレクトロニクスの基礎, 各種光デバイスの歴史, 材料, 動作原理 (講義) 第 7 回 光デバイスの応用例に関する調査 (グループ毎) 第 8, 9 回 調査結果のプレゼンテーション (グループ毎)</p> <p>第 10~11 回 各種光デバイスと環境・エネルギーの関わり (講義) 第 12 回 環境・エネルギー問題の解決に資する光デバイスに関する調査 (グループ毎) 第 13, 14 回 調査結果のプレゼンテーション (グループ毎)</p> <p>第 15 回 まとめ 第 16 回 定期試験</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>第 1~6 回 各回の講義に関する課題を行なう. 第 7 回 プレゼンテーションの準備を行なう. 第 8, 9 回 他のプレゼンテーションに対する意見, 自身のプレゼンテーションに関する反省をレポートにまとめる. 第 10~11 回 各回の講義に関する課題を行なう. 第 12 回 プレゼンテーションの準備を行なう. 第 13, 14 回 他のプレゼンテーションに対する意見, 自身のプレゼンテーションに関する反省をレポートにまとめる. 本授業の感想をレポートにまとめる.</p>
成績評価の方法と基準	総合成績は, 講義課題・レポート (30%), プレゼンテーション(30%), 定期試験(40%)として算出し, 60 点以上を合格とする.	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準, プレゼンテーションの評価基準, 定期試験の解答例を希望者に開示する.	
開示方法	開示を希望する場合は, 定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること.	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	有明海学 I (有明海学概論)	
担当教員 (所属)	速水祐一 (低平地沿岸)・片野俊也 (低平地沿岸)・濱田孝治 (低平地沿岸)・五十嵐勉 (全学)・郡山益実 (全学)・李應喆 (農)	
講義形式	講義・野外実習・ワークショップ	
講義概要	佐賀市は、広大な干潟があり、独特の生き物が生息する有明海に面しています。この海の自然とそこに生きる人の暮らし、そして今起きている環境問題について概観します。まずは実際に干潟に入ってみることから始めましょう。	
開講の意図	有明海が持つ代表的な自然・社会的特性について学ぶと共に、実際に有明海の干潟を体験することで、有明海学 II~IV を学ぶのに必要な基礎知識と高いモチベーションを身につける。	
到達目標	有明海に実際に触れる。その経験と講義の内容を合わせることで、有明海について自ら学ぶ意識を高める。	
履修上の注意	<p>○開講期間中に干潟体験実習を行うため、その安全面を考慮し 40 名以下 (30 名以下が望ましい) の人数制限を設ける。</p> <p>○干潟体験実習を 5 月中旬～6 月下旬のいずれかの土曜日に 1 日かけて実施する。実施日は予備日と合わせて初回の講義終了までに開示する。特別の理由がない限り、この実習への参加を必須とする。</p> <p>○実習等の都合により、講義の順番を変えることがある。</p> <p>○受講者は必ず学生傷害保険等に加入しておくこと。</p>	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>以下のテーマに沿って進める。ただし、理解度や天候等により、内容・順番を変更する場合がある。</p> <p>1) グリーンマップを作ろう～街から有明海まで</p> <p>2) 干潟とエスチュアリー</p> <p>3) 潮の満ち干はなぜ起きるのか</p> <p>4) ガタ土の環境－泥干潟と砂干潟</p> <p>5) 有明海底泥の役割</p> <p>6) 有明海の基礎生産</p> <p>7) 実習の説明</p> <p>8-9) 干潟体験実習</p> <p>10) 有明海のいきもの</p> <p>11) 干潟文化の多様性－干潟漁撈</p> <p>12) 干潟文化の多様性－食文化</p> <p>13) 「里海」の形成－干拓と生業複合の場</p> <p>14) 「里海」の危機－大規模開発と生業複合の変容</p> <p>15) 海洋シミュレーション－開発の影響を予測する</p>	<p>鹿島市にある佐賀大学干潟環境教育サテライト「むつごろう館」を利用して、干潟体験実習を 5 月中旬～6 月下旬のいずれかの土曜日に 1 日かけて実施する。実施日は予備日と合わせて初回の講義終了までに開示する。交通手段は大学のバスを使用予定。泥まみれになってもよい服装、着替え、タオルを持って参加のこと。</p>
成績評価の方法と基準	<p>成績は下記の 2 項目に基づいて評価する</p> <p>○出席点 (受講姿勢を含む) 30 点 ○レポート 70 点</p>	
開示する試験問題等	レポートの出題意図や成績の評価等について問い合わせに応じる。	
開示方法	レポート提出期限後の 1 週間、問い合わせに応じますので、希望する者は各教員の研究室まで来ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	有明海学Ⅱ（干潟の役割）	
担当教員（所属）	郡山益実（全学）・片野俊也（低平地沿岸）	
講義形式	講義・実験・野外実習	
講義概要	干潟は、希少な生き物が生息している場であるとともに、私たちに生活や安らぎを与える場でもある。この講義では、干潟の多面的機能や干潟を支えるエコシステムについて考える。	
開講の意図	干潟の持つ多面的機能について学ぶとともに、干潟の現地調査、実験及び野外実習を通して、干潟の環境やエコシステムについて自ら考える力を身につける。	
到達目標	干潟の保全や利用等を考える際に必要となる干潟の環境やエコシステムについて基礎知識を身に付け、理解を深めることを目標とする。	
履修上の注意	<p>○開講期間中に干潟の現地調査や野鳥観察実習を行うため、その安全面を考慮し40名以下（30名以下が望ましい）の人数制限を設ける。</p> <p>○干潟の現地調査を9月中旬～10月下旬のいずれかの土曜日に1日かけて実施する。野鳥観察実習は、12月中旬～1月下旬のいずれかの土曜日に1日かけて実施する。また、潟土を用いた実験は、11月～12月のいずれかの土曜日に1日かけて実施する。特別の理由がない限り、この実習への参加を必須とする。</p> <p>○実習等の都合により、講義の順番を変えることがある。</p> <p>○受講者は必ず学生傷害保険等に加入しておくこと。</p>	
授業計画	<p>内容</p> <p>以下のテーマに沿って進める。ただし、理解度や天候等により、内容・順番を変更する場合がある。</p> <p>1)干潟とはー国内外の干潟についてー</p> <p>2)干潟の種類と発達条件</p> <p>3)干潟の生物相</p> <p>4)干潟の底質環境</p> <p>5-6)干潟の現地調査</p> <p>7)干潟の物質循環（1）</p> <p>8)干潟の物質循環（2）</p> <p>9)干潟の付着性藻類</p> <p>10-11)潟土の実験</p> <p>12) 干潟の野鳥</p> <p>13-14)干潟の野鳥観察実習</p> <p>15)干潟の利用</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>干潟の現地調査は、佐賀市東与賀町のシチメンソウ公園で、9月中旬～10月下旬のいずれかの土曜日に1日かけて実施する。</p> <p>野鳥観察実習は、鹿島市もしくは佐賀市の干潟にて、12月中旬～1月下旬のいずれかの土曜日に1日かけて実施する。</p> <p>潟土を用いた実験は、大学内の実験室において11月～12月のいずれかの土曜日に1日かけて実施する。</p> <p>交通手段は大学のバスを使用予定。泥まみれになってもよい服装、着替え、タオルを持って参加のこと。</p>
成績評価の方法と基準	<p>成績は下記の2項目に基づいて評価する</p> <p>○出席点（受講姿勢を含む）50点 ○レポート 50点</p>	
開示する試験問題等	<p>レポートの出題意図や成績の評価等について問い合わせに応じる。</p> <p>試験は行わない。</p>	
開示方法	<p>レポートの採点結果などは、問い合わせがあれば対応する。</p>	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	有明海学Ⅲ（有明海の自然と環境）	
担当教員（所属）	片野俊也，濱田孝治，速水祐一（低平地沿岸海域研究センター），郡山益実，五十嵐勉（全学教育機構），李應喆（農学部）	
講義形式	講義と学外授業（野外船舶実習，魚市場見学）	
講義概要	沿岸海洋の物理学，生物学の基礎について講義と野外実習を通じて学んだのち，有明海の環境問題や水産業についても学ぶ。 野外実習では，有明海に船で出て，海洋観測実習を行い，プランクトンや底生生物の採集，観察を行う。本科目の後半には，魚市場の見学も行う。	
開講の意図	生物生産が高く，独特な生物が生息している“有明海”の自然と環境について学ぶ。	
到達目標	海の問題について，自ら考える力を養う。	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・船舶による野外実習を行うので，受講生数は最大 40 名とする。 ・6，7）の野外実習は5月中，下旬の土曜日を予定している。 ・13，14）の魚市場見学は，6月から7月を予定している。 ・授業計画は，実習実施日などに応じて変わることがある。 ・受講者は学生傷害保険等に加入しておくこと。 	
授業計画	内容（カッコ内は講義担当教員）	授業時間外の学習
	1）有明海の地形と地史（速水） 2）海の構造，貧酸素（濱田） 3）風，河川水が作る海の流れ，生き物への影響（濱田） 4）潮汐，潮流（濱田） 5）泥と濁り（濱田） 6）野外実習（片野，速水，濱田，郡山） 7）野外実習（片野，速水，濱田，郡山） 8）有明海の生物生産構造（片野） 9）ノリ養殖（片野） 10）赤潮の生物学（片野） 11）沿岸海域における海洋動物の幼生の輸送（速水） 12）有明海の水産業（速水） 13）魚市場見学（全員） 14）魚市場見学（全員） 15）沿岸域の持続的利用に向けた取り組み（片野）	予習と復習，レポート
成績評価の方法と基準	出席点（50％）レポート4-5回（50％）	
開示する試験問題等	試験は行わない。	
開示方法	レポートの採点結果などは，問い合わせがあれば対応する。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	有明海学Ⅳ（干潟の保全と活用）	
担当教員（所属）	五十嵐 勉（全学教育機構）・李 應喆（農）	
講義形式	講義、および体験型現地学習	
講義概要	干潟・湿地を含む有明海の保全と活用について、現地での調査・対話・参画等を含む体験型学習を行う。	
開講の意図	Ⅰ～Ⅲの学習を踏まえ、干潟・湿地を含む有明海の環境保全と地域の活性化に関わる持続可能な活用について考える。	
到達目標	身近な有明海の環境について理解し、市民としての行動の意味について理解する。	
履修上の注意	講義に加えて、現地見学や環境保全活動への参加型授業を行うため、通常の講義以外に土日・祝日等を活用して行う。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 ガイダンス（五十嵐）</p> <p>第2～5回 干潟・湿地の保全とワイズ・ユース（五十嵐）</p> <p>第6～8回 干潟生態文化論（李）</p> <p>第7～12回 鹿島の干潟域での体験学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統的干潟漁撈 ・干潟環境学習 ・野鳥観察 ・地域おこしイベント <p>第14～15回 グループ研究の報告と討論</p>	<p>第1～5回 干潟・湿地保全に関する文献を読む</p> <p>第6～8回 干潟文化に関する文献を読む</p> <p>第6～12回 グループ研究による調査・対話・交流・活動の企画を立案し、交渉する。対話・交流を通して、企画の立案・活動に関与する。</p> <p>第14～15回 グループ毎に自主研究を行い、発表資料をまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	出席・調査実習への参加を重視（50点）、グループ研究（報告・討議）50点。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域環境の保全と市民社会Ⅰ（環境保全運動と市民）	
担当教員（所属）	五十嵐 勉（全学教育機構）	
講義形式	講義、および現地見学学習	
講義概要	市民やNPO/NGO等による環境保全運動の動向と課題について学び、彼らとの対話・交流・参加の体験型学習を行う。	
開講の意図	環境を保全する一市民としての役割について考え、参加・協働することの意味について、体験を通して理解する。	
到達目標	身近な環境問題について理解し、市民としての行動の意味について理解する。	
履修上の注意	講義に加えて、現地見学や環境保全活動への参加型授業を行うため、通常の講義以外に土日・祝日等を活用して行う。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 ガイダンス</p> <p>第2～3回 環境保全・自然保護の歴史</p> <p>第4～5回 環境を守る人々—NPO/NGO—</p> <p>第6～12回 環境保全活動家たちとの対話・交流・参画（グループ研究）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森を守る人々 ・里山・里地を守る人々 ・水環境を守る人々 ・干潟を守る人々 ・リサイクル・資源循環に取り組む人々 <p>第14～15回 グループ研究の報告と討論</p>	<p>第1～3回 自然保護・環境保全運動に関する文献を読む</p> <p>第4～5回 NPO/NGOに関する文献を読む</p> <p>第6～12回 グループ研究による訪問調査・対話・交流・活動の企画を立案し、交渉する。対話・交流を通して、企画の立案・活動に関与する。</p> <p>第14～15回 グループ毎に自主研究を行い、発表資料をまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	出席・調査実習への参加を重視（50点）、グループ研究（報告・討議）50点。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域環境の保全と市民社会Ⅳ（環境社会学）	
担当教員（所属）	樫澤秀木（経済）・藤村美穂（農）	
講義形式	講義、および現地見学学習	
講義概要	環境問題と紛争、及び農林漁業と環境等の現代的課題について、地元や当事者の視点から考える。	
開講の意図	環境を保全する当事者とよそ者の立場・視点から、環境問題について考え、参加・協働することの意味について、体験を通して理解する。	
到達目標	身近な環境問題について理解し、市民としての行動の意味について理解する。	
履修上の注意	講義に加えて、現地見学や環境保全活動への参加型授業を行うため、通常の講義以外に土日・祝日等を活用して行う。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	第1回 ガイダンス（樫澤・藤村） 第2～8回 有明海・諫早湾干拓問題の概要 環境紛争の構造 環境紛争の当事者と資源動員 第9～15回 農林漁業からみた環境 農林業政策と資源管理 環境問題における当事者とよそ者との関係	第2～8回 環境紛争に関する文献を読む。講義に加えて、現地に赴いて、調査をする予定である。 第9～15回 講義に加えて、グループごとに事例調査、発表を行い、全体で討論を行う予定である。
成績評価の方法と基準	出席・調査実習への参加を重視（50点）、グループ研究（報告・討議）50点。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準，プレゼンテーションの評価基準，定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は，定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

科目名	アジアの理解Ⅰ（アジアの地理・歴史・文化）	
担当教員（所属）	諸泉俊介（全学教育機構）・中尾友香梨（文教）	
講義形式	講義・演習	
講義概要	インターフェースプログラム・アジアの理解への入門として、アジアを、地理・歴史・文化の面から大きく概観する。授業は、講義と資料調査・分析、及び報告と討議によって構成する。	
開講意図	ユーラシア大陸をヨーロッパと二分するアジアは、ユーラシア大陸の80%を占める広大な地域に広がり、そこに住む人間は世界の60%を占めている。この地には四大文明のうちの三つが発生して、古代においては文明の発展をリードして来たが、近世以降にはヨーロッパとの熾烈な国際関係の下で幾多の不幸を経験してきた。しかし今日、ヨーロッパ文明の陰りとともに、アジアの将来に再び光が当たり始めている。アジアの理解Ⅰでは、こうしたアジアの将来を考えるための基礎的知識の習得を目指す。	
到達目標	① アジアの地理・歴史・文化に関する基礎的知識の修得 ② アジアに関する現代的な課題の理解。 ③ 多様な文化と価値観の理解 ④ 持続的な学習力と社会的責任感の修得	
履修上の注意	随時、小レポートを課します。	
授業計画	内容	授業外の学習
	1. オリエンテーション 2. アジアの地理① 3. アジアの地理② 4. アジアと文明 5. アジアの歴史① 6. アジアの歴史② 7. アジアの歴史③ 8. アジアの社会と文化 9. 資料調査① 10. 資料調査② 11. 資料分析① 12. 資料分析② 13. 報告及び討議① 14. 報告及び討議② 15. 講義のまとめ	1. 講義の課題を整理する 2. 講義の内容を整理する。 3. 講義の内容を整理する。 4. 講義の内容を整理する。 5. 講義の内容を整理する。 6. 講義の内容を整理する。 7. 講義の内容を整理する。 8. 資料調査の方法を整理する。 9. 資料調査の結果を整理する。 10. 資料調査の結果を整理する。 11. 資料分析の結果を整理する。 12. 資料分析の結果を整理する。 13. 報告と討議の内容を整理する。 14. 報告と討議の内容を整理する。 15. 講義全体のまとめを行う。
成績評価の方法と基準	到達目標の①基礎的知識、②課題の理解及び③多様な価値観の理解は、最終レポート（60%）をもって評価します。④の持続的な学習力と社会的責任は、小レポートの提出及び討議への参加（40%）をもって評価します。	
開示する試験問題等	レポート課題の意図及び評価を成績発表後に研究室で本人に開示します。	
開示方法	成績発表後の1週間、研究室において本人に開示します。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	アジアの理解Ⅱ（アジアの社会）	
担当教員（所属）	高橋良輔（文化教育学部）・田中豊治（文化教育学部）	
講義形式	講義 & ワークショップ（グループによる調査・報告・討議）	
講義概要	<p>アジアの社会とその将来を「文化の地政学」の観点から検討する。まず、この分野で古典となっているエドワード・サイード『オリエンタリズム』と近年の批判地理学の視点について講義した後、その傾向を反映している視聴覚資料の分析をグループワークで行う。続いて現代のアジアの問題を考えるために、アジアの歴史と精神性、さらにアジアのコミュニティの特質と可能性、将来展望について、講義と演習を行う。</p>	
開講の意図	グローカリゼーションの下での、アジア社会の表象の持続と変化を知ること。	
到達目標	政治社会学の観点から「文化の地政学」の考え方を身につけ、自ら批判的な視点でアジアをめぐる社会表象を分析できるようになること。	
履修上の注意	2012年度試行プログラム「文化創成学」で実施した授業形式「講義」→「資料分析」→「各班での分析実践」を踏襲します。講義を聴くだけでなく、視聴覚資料を自分達で分析し、グループ発表の準備をすることが求められます。	
授業計画	<p>内容</p> <p>第1回 ガイダンス</p> <p>第2回 講義と演習 E・サイードのオリエンタリズム批判</p> <p>第3回～第4回 講義と演習 批判地理学とコスモポリタニズム</p> <p>第5回～第6回 グループワーク 視聴覚資料の分析:『ロストイントランスレーション』とアジアの場所性</p> <p>第7回～第8回 グループ発表と前半まとめ</p> <p>第9回～第11回 アジアの歴史とアジア人の精神性</p> <p>第12回～第13回 講義と演習 アジアコミュニティの特質と可能性</p> <p>第14回～第15回 講義と演習 アジア社会と日本の将来展望 講義と演習</p> <p>第16回 レポート提出 (視聴覚資料や講義予定は、変更する場合があります。)</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>講義内容の予習・復習</p> <p>講義内容の予習・復習</p> <p>視聴覚資料の分析</p> <p>グループ発表準備</p> <p>DVD鑑賞とGD（グループディスカッション）とレポート PPTによる説明とGDとレポート</p> <p>映画鑑賞とGDとレポート</p> <p>レポートの作成・提出</p>
成績評価の方法と基準	<p>出席：30%</p> <p>グループ発表内容（2回）：40%</p> <p>期末レポート（1回）：30%</p>	
開示する試験問題等	グループ発表の内容および期末レポートの詳細については、その都度に指示します。	
開示方法	授業内で開示します。	

インターフェース授業科目シラバス

科目名	アジアの理解 III (アジアの政治)	
担当教員 (所属)	山崎 (文化教育学部)・森 (文化教育学部)	
講義形式	講義・演習	
講義概要	本講義は、プログラム I、II で概観したアジアの社会と文化を取り巻く諸問題を踏まえ、東北アジア・東南アジアを政治の観点から考察するものである。プログラム I・II で取り上げた個別問題の検討をもとに、政治学・国際関係論的観点からアジアを見るための思考枠組と知識を修得する場である。	
開講意図	「アジアとは何か」という問いかけを出発点として、社会・文化と政治・国際関係との関わりを、東北アジア・東南アジアを対象として理解できるようにすることを目的とする。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東北アジア、東南アジアの政治文化についての基礎的な理解ができる。 ・ 東北アジア、東南アジアの国際関係についての基本的な知識・情報収集法を習得、おおまかな動向分析ができる。 	
履修上の注意		
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 東北アジア・東南アジア政治動向 (1) 2. 東北アジア・東南アジア政治動向 (2) 3. 東北アジア・東南アジア政治動向 (3) 4. 東北アジア・東南アジアの政治文化 (1) 5. 東北アジア・東南アジアの政治文化 (2) 6. 東北アジア・東南アジアの政治文化 (3) 7. 東北アジア・東南アジアの政治文化 (4) 8. 東北アジア・東南アジアの動向分析 (1) 9. 東北アジア・東南アジアの動向分析 (2) 10. 東北アジア・東南アジアの動向分析 (3) 11. 東北アジア・東南アジアの動向分析 (4) 12. 東北アジア・東南アジアの国際関係 (1) 13. 東北アジア・東南アジアの国際関係 (2) 14. 東北アジア・東南アジアの国際関係 (3) 15. 東北アジア・東南アジアの政治と国際関係 (まとめ) 16. 定期試験 	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキスト・資料を通読する 2. 新聞、ウェブ検索を試みる 3. 上記 1, 2 を実施する 4. テキスト・資料を通読する 5. テキスト・資料を通読する 6. テキスト・資料を通読する 7. テキスト・資料を通読する 8. 新聞、ウェブ検索・情報収集 9. 新聞、ウェブ検索・情報収集 10. 新聞、ウェブ検索・情報収集 11. 収集資料集約と分析 12. テキスト・資料を通読する 13. 新聞、ウェブ検索・情報収集 14. 収集資料の集約と分析 15. テキスト・資料を通読する
成績評価の方法と基準	定期試験を行う。出席率 (40%) と定期試験、レポート (60%)	
開示する試験問題等	成績発表後に研究室で個別に対応、開示する。	
開示方法	研究室に来室すること。(開示期間、時間帯は研究室前に掲示する。)	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	アジアの理解Ⅳ (アジアの経済)	
担当教員 (所属)	張 韓模 (文化教育学部)・ラタナーヤカ (経済学部)	
講義形式	講義・演習	
講義概要	アジアを中心とした新興国経済が、その成長率、経済規模ともに世界経済の中で存在感を高めており、世界経済は、米国を中心とした一極集中からアジアを中心とした新興国に多極化しつつあることを学ぶ。	
開講の意図	アジア経済は、日本を先頭に、韓国、香港、台湾、シンガポールといったNIEs、その次にASEAN、中国、インドが続く雁行型経済発展を遂げてきた。しかし、中国やインド等の急成長により、近年、アジア経済の成長モデルが変化しつつある。つまり中国がアジア経済をけん引する構図が見られるが、本講義の意図はこのような状況を正確に認識することである。	
到達目標	まず国際経済に関する用語を理解し、次は授業で取り上げる内容を正確に認識することを到達目標とする。	
履修上の注意	授業は、講義とグループ発表と言う構成で進める。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 講義説明、講義関係のキーワード説明、アジア経済とは。</p> <p>第2-3回 世界経済危機から回復するアジア経済</p> <p>第4回 東アジア生産ネットワーク</p> <p>第5回 東アジア消費市場の現状</p> <p>第6回 東アジアのインフラ整備と日本の役割</p> <p>第7-9回 東アジアの諸課題—少子高齢化、環境・エネルギー問題—</p> <p>第10-11回 日本と東アジアの相互依存</p> <p>第12-13回 中国経済の成長と課題</p> <p>第14-15回 東アジア共同体の議論</p>	<p>講義内容の復習</p> <p>講義内容の予習・復習 GD (グループディスカッション) 準備</p> <p>講義内容の予習・復習</p> <p>講義内容の予習・復習 GD 準備</p> <p>講義内容の予習・復習 GD 準備</p> <p>講義内容の予習・復習 GD 準備</p> <p>講義内容の予習・復習 GD 準備</p>
成績評価の方法と基準	アサインメント：30% グループ発表内容：30% 期末テスト：40%	
開示する試験問題等	期末テストの詳細については、その都度に指示します。	
開示方法	授業内で開示します。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	芸術創造 I	
担当教員 (所属)	橋本正昭	
講義形式	講義	
講義概要	音楽の理論を作曲の視点から、音楽史で使われる時代区分に沿って実作品を鑑賞しながら分析することによって学ぶ。 音楽の領域について、その様式の変遷を概観する。特に現代的な課題を反映していると思われる 20 世紀音楽について詳しく学ぶ。	
開講の意図	音楽の基本的な歴史や理論について学ぶことによって多様な文化と価値観や現代的な課題を知ること。また、芸術創造Ⅲ、Ⅳの履修時に主体的に活動内容を考える際のヒントとして活用する。	
到達目標	音楽の世界の多様な文化と価値観を理解し、それらに関する独自の考察について具体的に言葉で表現できる。	
履修上の注意		
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス 2 バロック① 3 バロック② 4 古典派① 5 古典派② 6 前期ロマン派① 7 前期ロマン派② 8 後期ロマン派① 9 後期ロマン派② 10 20 世紀初頭① 11 20 世紀初頭② 12 世界大戦間① 13 世界大戦間② 14 第二次世界大戦後③ 15 第二次世界大戦後④ 16 試験	1 本時の活動をまとめておく 2 本時の活動をまとめておく 3 本時の活動をまとめておく 4 本時の活動をまとめておく 5 本時の活動をまとめておく 6 本時の活動をまとめておく 7 本時の活動をまとめておく 8 本時の活動をまとめておく 9 本時の活動をまとめておく 10 本時の活動をまとめておく 11 本時の活動をまとめておく 12 本時の活動をまとめておく 13 本時の活動をまとめておく 14 本時の活動をまとめておく 15 本時の活動をまとめておく
成績評価の方法と基準	レポート提出 ① 20 世紀音楽の中で特に興味を持った音楽について調べ考察せよ。 ② 講義全般に関する感想を述べよ 以上 2 項目について合計 2000 字以上にまとめレポート提出。	
開示する試験問題等	課題及び出題の意図を開示する。	
開示方法	希望者にはレポート返却、評価のコメントをする。試験期間終了後3ヶ月以内に担当教員と連絡を取った上でオフィスアワーの時間帯に研究室に来ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	芸術創造Ⅱ	
担当教員(所属)	荒木博申、小木曾誠、徳安和博、井川健、石崎誠和、田中右紀、田中嘉生	
講義形式	講義、演習	
講義概要	美術・工芸の歴史や理論を各分野についてオムニバス形式で学ぶ。 前半の美術・工芸の領域については、歴史や理論を概観する。後半のデザインについてはデザインの基本的な考え方について詳しく学ぶ。 合間に佐賀大学美術館や佐賀県立美術館での作品鑑賞も行う。	
開講の意図	美術・工芸分野の基礎的、基本的な歴史や理論について学ぶことによって多様な文化と価値観や現代的な課題を知ること。また、芸術創造Ⅲ、Ⅳの履修時に、その課題を意識したテーマの設定など、主体的に活動内容を考える際のヒントとして活用する。	
到達目標	美術・工芸の世界の多様な文化と価値観を理解し、それらの違いや共通点などを具体的に言葉で表現できる。	
履修上の注意	オムニバス授業なので欠席をしないこと。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス 2 絵画について(西洋画を中心に) 3 彫刻について(彫塑を中心に) 4 工芸について(木工工芸を中心に) 5 絵画について(日本画を中心に) 6 工芸について(窯芸を中心に) 7 工芸について(染色工芸を中心に) 8 美術館見学 9 デザインについて 10 デザインについて 11 デザインについて 12 デザインについて 13 デザインについて 14 デザインについて 15 デザインについて 16 筆記試験(デザイン)	1 本時の活動をまとめておく 2 本時の活動をまとめておく 3 本時の活動をまとめておく 4 本時の活動をまとめておく 5 本時の活動をまとめておく 6 本時の活動をまとめておく 7 本時の活動をまとめておく 8 見学の感想をまとめておく 9 本時の活動をまとめておく 10 本時の活動をまとめておく 11 本時の活動をまとめておく 12 本時の活動をまとめておく 13 本時の活動をまとめておく 14 本時の活動をまとめておく 15 本時の活動をまとめておく
成績評価の方法と基準	出席状況と筆記試験(デザイン)とレポート(デザイン以外)で評価する。 筆記試験では、選択問題、列挙問題、記述問題等で授業の理解を計る。決して難しくはないが、受講はしていても、発想の切り替えや客観性・推理力を働かせる必要もある。	
開示する試験問題等	課題及び出題の意図を開示する。	
開示方法	成績閲覧を希望する者(履修登録した者に限る)は平成26年7月31日から8月6日のオフィスアワーの時間帯に担当者の研究室に来ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	芸術創造Ⅲ（音楽実技体験Ⅰ）	
担当教員（所属）	古賀雅子、板橋江利也、今井治人	
講義形式	講義、演習	
講義概要	ピアノ、声楽、指揮の3分野の中で今学期に開講されている2分野から一つ選択させ個人レッスンをを行う。芸術創造Ⅲを通じて同じ分野のレッスンとなる。ピアノ、声楽、指揮の個人レッスンをを行い、それぞれの実技課題に取り組む。	
開講の意図	ピアノ、声楽、指揮の実技活動において基礎的、基本的な技法の学習と併せて、受講者が独自に試行錯誤を重ねることにより、各人の芸術観の再構築につながる課題発見、課題解決の道を探る。	
到達目標	芸術創造Ⅰで学んだ音楽の世界に反映されている多様な文化と価値観を踏まえ、実技体験の中で主体的に課題を発見し、解決していく力をつける。（各時間の活動内容や発見した問題の内容、それをどう解決しようとしたかなどは記録に残しておくこと）	
履修上の注意	芸術創造Ⅳでは異なる分野を選択するので、その点を考慮して選択すること。レッスン内容の詳細については、受講生の経験等を考慮する為、担当教員と相談し、指導を受けること。 また、担当教員から楽器の扱い方等について指導がある時はそれに従うこと。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス 2 講義・演習 3 講義・演習 4 講義・演習 5 講義・演習 6 講義・演習 7 講義・演習 8 講義・演習 9 講義・演習 10 講義・演習 11 講義・演習 12 講義・演習 13 講義・演習 14 講義・演習 15 講義・演習 16 試験	1 本時の活動をまとめておく 2 本時の活動をまとめておく 3 本時の活動をまとめておく 4 本時の活動をまとめておく 5 本時の活動をまとめておく 6 本時の活動をまとめておく 7 本時の活動をまとめておく 8 本時の活動をまとめておく 9 本時の活動をまとめておく 10 本時の活動をまとめておく 11 本時の活動をまとめておく 12 本時の活動をまとめておく 13 本時の活動をまとめておく 14 本時の活動をまとめておく 15 本時の活動をまとめておく
成績評価の方法と基準	出席状況、授業に対する姿勢、講義中に課す課題への評価、実技に取り組む姿勢等から総合的に評価する。詳細については、担当教員の方針に基づいて行われるので事前に聞いて理解しておくこと。	
開示する試験問題等	課題及び出題の意図を開示する。	
開示方法	閲覧を希望する者は、試験期間終了後3ヶ月以内に担当教員と連絡を取った上でオフィスアワーの時間帯に研究室に来ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	芸術創造Ⅲ（平面・立体表現活動Ⅰ）	
担当教員（所属）	小木曾誠、井川健、徳安和博	
講義形式	講義・演習	
講義概要	絵画（西洋画）制作、木工工芸制作、彫刻制作をそれぞれ5コマずつオムニバス形式で行い、それぞれの実技課題に取り組む。	
開講の意図	美術と工芸の両分野、平面造形と立体造形のバランスを配慮しこの組み合わせとした。実技活動において基礎的、基本的な技法の学習と併せて、受講者が独自に試行錯誤を重ねることにより、各人の芸術観の再構築につながる課題発見、課題解決の道を探る。	
到達目標	芸術創造Ⅱで学んだ美術・工芸の世界の多様な文化と価値観を踏まえ、実技制作の中で主体的に問題発見、問題解決していく。（各時間の活動内容や発見した問題の内容、それをどう解決しようとしたかなどは記録に残しておくこと）	
履修上の注意	作業ができる服装で参加すること。 オムニバス形式なので欠席しないこと。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 絵画制作（講義） 2 絵画制作 3 絵画制作 4 絵画制作 5 絵画制作（講評） 6 木工工芸制作（講義） 7 木工工芸制作 8 木工工芸制作 9 木工工芸制作 10 木工工芸制作（講評） 11 彫刻制作（講義） 12 彫刻制作 13 彫刻制作 14 彫刻制作 15 彫刻制作（講評） 16 まとめ	1 次時の画材、テーマの準備 2 本時の活動をまとめておく 3 本時の活動をまとめておく 4 本時の活動をまとめておく 5 講評の内容をまとめておく 6 次時の画材、テーマの準備 7 本時の活動をまとめておく 8 本時の活動をまとめておく 9 講評の内容をまとめておく 10 本時の活動をまとめておく 11 次時の画材、テーマの準備 12 本時の活動をまとめておく 13 本時の活動をまとめておく 14 本時の活動をまとめておく 15 講評の内容をまとめておく
成績評価の方法と基準	出席状況とレポートや提出作品で評価する。	
開示する試験問題等	課題及び出題の意図を開示する。	
開示方法	成績閲覧を希望する者（履修登録した者に限る）は平成27年7月31日から8月6日のオフィスアワーの時間帯に担当者の研究室に来ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	芸術創造Ⅳ（音楽実技体験Ⅱ）	
担当教員（所属）	古賀雅子、板橋江利也、今井治人	
講義形式	講義・演習	
講義概要	ピアノ、声楽、指揮の3分野の中で今学期に開講されている2分野から一つ選択させ個人レッスンを行う。芸術創造Ⅲを通じて同じ分野のレッスンとなる。ピアノ、声楽、指揮の個人レッスンを行い、それぞれの実技課題に取り組む。	
開講の意図	ピアノ、声楽、指揮の実技活動において基礎的、基本的な技法の学習と併せて、受講者が独自に試行錯誤を重ねることにより、各人の芸術観の再構築につながる課題発見、課題解決の道を探る。	
到達目標	芸術創造Ⅰで学んだ音楽の世界に反映されている多様な文化と価値観を踏まえ、実技体験の中で主体的に課題を発見し、解決していく力をつける。（各時間の活動内容や発見した問題の内容、それをどう解決しようとしたかなどは記録に残しておくこと）	
履修上の注意	必ず芸術創造Ⅲとは異なる分野を選択すること。 レッスン内容の詳細については、受講生の経験等を考慮する為、担当教員と相談し、指導を受けること。 また、担当教員から楽器の扱い方等について指導がある時はそれに従うこと。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス 2 講義・演習 3 講義・演習 4 講義・演習 5 講義・演習 6 講義・演習 7 講義・演習 8 講義・演習 9 講義・演習 10 講義・演習 11 講義・演習 12 講義・演習 13 講義・演習 14 講義・演習 15 講義・演習 16 試験	1 本時の活動をまとめておく 2 本時の活動をまとめておく 3 本時の活動をまとめておく 4 本時の活動をまとめておく 5 本時の活動をまとめておく 6 本時の活動をまとめておく 7 本時の活動をまとめておく 8 本時の活動をまとめておく 9 本時の活動をまとめておく 10 本時の活動をまとめておく 11 本時の活動をまとめておく 12 本時の活動をまとめておく 13 本時の活動をまとめておく 14 本時の活動をまとめておく 15 本時の活動をまとめておく
成績評価の方法と基準	出席状況、授業対する姿勢、講義中に課す課題への評価、実技に取り組む姿勢等をから総合的に評価する。詳細については、担当教員の方針に基づいて行われるので事前に聞いて理解しておくこと。	
開示する試験問題等	課題及び出題の意図を開示する。	
開示方法	閲覧を希望する者は、試験期間終了後 3 ヶ月以内に担当教員と連絡を取った上でオフィスアワーの時間帯に研究室に来ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	芸術創造Ⅳ（平面・立体表現活動Ⅱ）	
担当教員（所属）	石崎誠和、田中右紀、田中嘉生	
講義形式	講義・演習	
講義概要	絵画（日本画）制作、窯芸制作、染色工芸制作をそれぞれ5コマずつオムニバス形式で行い、それぞれの実技課題に取り組む。	
開講の意図	美術と工芸の両分野、平面造形と立体造形のバランスを配慮しこの組み合わせとした。実技活動において基礎的、基本的な技法の学習と併せて、受講者が独自に試行錯誤を重ねることにより、各人の芸術観の再構築につながる課題発見、課題解決の道を探る。	
到達目標	芸術創造Ⅱで学んだ美術・工芸の世界の多様な文化と価値観を踏まえ、実技制作の中で主体的に問題発見、問題解決していく。（各時間の活動内容や発見した問題の内容、それをどう解決しようとしたかなどは記録に残しておくこと）	
履修上の注意	作業ができる服装で参加すること。 オムニバス形式なので欠席しないこと。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 絵画制作（講義） 2 絵画制作 3 絵画制作 4 絵画制作 5 絵画制作（講評） 6 窯芸制作（講義） 7 窯芸制作 8 窯芸制作 9 窯芸制作 10 窯芸制作（講評） 11 染色工芸制作（講義） 12 染色工芸制作 13 染色工芸制作 14 染色工芸制作 15 染色工芸制作（講評） 16 まとめ	1 次時の画材、テーマの準備 2 本時の活動をまとめておく 3 本時の活動をまとめておく 4 本時の活動をまとめておく 5 講評の内容をまとめておく 6 次時の画材、テーマの準備 7 本時の活動をまとめておく 8 本時の活動をまとめておく 9 講評の内容をまとめておく 10 本時の活動をまとめておく 11 次時の画材、テーマの準備 12 本時の活動をまとめておく 13 本時の活動をまとめておく 14 本時の活動をまとめておく 15 講評の内容をまとめておく
成績評価の方法と基準	出席状況とレポートや提出作品で評価する。	
開示する試験問題等	課題及び出題の意図を開示する。	
開示方法	成績閲覧を希望する者（履修登録した者に限る）は平成27年7月31日から8月6日のオフィスアワーの時間帯に担当者の研究室に来ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 I	
担当教員 (所属)	布尾勝一郎 (全学教育機構)、中山亜紀子 (全学教育機構)	
講義形式	この授業では、異文化交流に必要な基本的な知識や考え方について学びます。また、外国人に関わるボランティア活動をし、その内容や考えたことについて発表します。授業時間外でのボランティア活動が必要です。	
講義概要	副題：「異文化交流」入門	
開講の意図	1) 日本に在住する外国人についての基本的な知識を得る そのうえで、 2) ボランティア活動に取り組むことによって、文化的な背景が異なる人々との交流を体験する。 3) 自分の体験を振り返り、まとめて発表する。 それらの体験を通じ、異文化に対してより開かれた視野を持てるようにする。	
到達目標	1) 初対面の人、置かれた立場の異なる人と交流をすることができる。 2) 自分達の体験を振り返り、多角的な視点から理解することができる。 3) 自分達の体験をポスターにまとめて発表することができる。 4) 体験について、他の人と意見交換をすることができる。	
履修上の注意	履修者数は、佐賀大学の正規学生の履修は 25 名まで。 授業時間外でのボランティア活動や作業が求められる。 ボランティア活動は、「留学生の学習支援」「外国にルーツを持つ子供たちへの学習支援」などから学生たちが自分で探す。 ボランティア活動を簡単に記録し、毎回の授業でグループで話し合う。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1. オリエンテーション、アイスブレイキング 2. 「日本に在住する外国人」(1) 3. ボランティア活動を決める。 4. 「日本に在住する外国人」(2) 5. 「言語学習」(1) 6. ボランティア活動についてクラス内で中間報告 7. 「言語学習」(2) 8. 「言語サービス」(1) 9. 「言語サービス」(2) 10. 「海外の事例」(1) 11. 「海外の事例」(2) 12. 予備日 13. ボランティア活動についての報告 (1) 14. ボランティア活動についての報告 (2) 15. 授業の振り返り	ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 ボランティア活動 報告の準備 ボランティア活動 ボランティア活動
成績評価の方法と基準	授業参加 (30%)、振り返り (30%)、最終レポート (40%) で評価する。	
開示する試験問題等	レポートは返却する。	
開示方法	レポートは学期終了後に返却する。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 I	
担当教員 (所属)	Alan E. Bowman (Organization for General Education, OGE)	
講義形式	講義・演習	
講義概要	副題 : Sequential Drawing In English This course will introduce students to the many forms of sequential drawing (“comics”) and also introduce them to the craft of creating (writing and drawing) their own comics. Students will study and the do the following STEPS: creating ideas, making a story structure, designing a world, dialoguing, and then drawing. There will be many examples examined and students will take an active role in investigating such styles as the super-hero, comic strips, manga, action, and many more. Near the end of the course, students will present or introduce their projects to the class, but there will also be review tests to build students’ knowledge.	
開講の意図	Students will independently and cooperatively create their own sequential drawings and will learn and investigate sequential drawings from the past and current times, mostly from American culture but also from their own culture.	
到達目標	By immersing themselves in this class of “comic” culture it is expected that the students will learn new ways of expressing themselves and add to their language abilities while doing so. The students will be able to create (write) an understandable story including plot and script in English, will be able to illustrate that story, and be able to explain the meaning and content of the story to others.	
履修上の注意	Students SHOULD have a TOEIC Score of at least 400. However they will also be given a proficiency Pre-Test early on in the class.	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	Week1 (W1): Introduction/Pre-Test/ Comics W2: What is Sequential Drawing? W3: Vocabulary of Comics: (Reading) W4: Test/ Examining Ideas W5: Active: Brainstorming Ideas W6: Examining Story Structure W7: Active: Creating a Story W8: Examining the Environment W9: Active: World Building W10: Examining Words and Pictures W11: Active: Storyboarding W12: Test/ Examining Dialogue W13: Active: Scripting Your Comic W14: Finishing the Project 1 W15: Finishing the Project 2	W1: Investigating a Comic W2: Reading an English comic W3: Study for a review test W4: Thinking of Ideas for comics W5: Brainstorming Worksheet W6: Looking at some Stories W7: Create a Story W8: Compare some Environments W9: Build your World! W10: Try to Rough Out a story W11: Study for a review test W12: Write dialogue for your comic W13: Tighten your script W14: Prepare for presentation

成績評価の方法 と基準	There will be at least two review tests to insure students understanding of the material (30%), a few in-class exercises to allow students to use step-by-step active learning (30%), and a final project consisting of a full-comic drawn and or written by each student or pair of students (40%). The final project will be reviewed by both the teacher and classmates.
開示する試験問 題等	Before the review tests students will be given review sheets that they can use to study. The tests will be paper tests.
開示方法	Students will be given the questions in class before the test or they may come to the teacher's office to inquire about exam questions. The tests will be given in-class, on paper, no textbook or dictionary allowed.

授業科目名	異文化交流Ⅱ	
担当教員(所属)	木原 誠(文化教育学部)	
講義形式	講義は、多久市の廃校で行われる体験型学習を通じての学生間(留学生と本学学生)の討論形式で行う。フィールド・ワーク形式によって行われる。	
講義概要	副題:「異文化間衝突の作法-はじめに不理解あり」「異文化」の「異」とは、本来、自文化にとって<異物としての文化>を含意する否定的表現であり、他文化側からみれば、「外人=よそ者」という言葉と同様に、ときに差別的表現と映るであろう。では、なぜこのような誤解を招く表現をあえて授業の科目名(「異文化交流」)として掲げる必要があるのだろうか。それは、各々の文化(自己)が他文化(他者)にとっての「異文化」であると理解することで、異文化交流によって生じる摩擦・衝突による不都合=相互不理解を体感(異化体感)し、そのことを通じて、自文化中心主義の呪縛から自己を解放する機会を得てもらうことを願うからである。本授業では、<異文化間理解の前には不理解あり>を合言葉に、様々な国々の大学生による異文化間衝突の舞台を提供したいと思う。舞台は多久市の廃校を考えている。	
開講の意図	他文化(他者)を知ることの真の意味は自文化(自己)を知ることであることを学ぶこと。	
到達目標	異文化交流による不理解性の体感	
履修上の注意	母国語を身体表現を通じて他者に理解してもらう身体パフォーマンス性とそれが出来ない場合は、英語による説明を要求する場合がある。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
成績評価の方法と基準	討論による発表で評価する。	
開示する試験問題等	レポート	
開示方法	口頭で行う。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 II	
担当教員 (所属)	早瀬 博範 (文化教育学部)	
講義形式	講義とその内容に合わせたアクティブラーニング	
講義概要	副題：異文化間コミュニケーション 異文化でのコミュニケーションをスムーズに行うために必要な知識とその方法について実践を取り入れながら学ぶ。	
開講の意図	異文化に対する理解を深め、異文化の人々とのコミュニケーションの方法を身につけるための授業	
到達目標	異文化間でのコミュニケーションに必要な知識を習得するとともに、実際の場面でしっかりと自らの考えを述べることを目標とする。	
履修上の注意	異文化への関心が高く、積極的にコミュニケーション活動を行う意欲のあるもの。実践的な活動を伴うため、受講生は 20 名以内に制限する。	
授業計画	<p>内容</p> <p>主な内容は以下の通りである。それぞれ理論と実践をおこなう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コミュニケーションとは？ 2. パーバルコミュニケーションとノンバーバル小コミュニケーション 3. 異文化コミュニケーションとは？ 4. 異文化コミュニケーションをスムーズに行うための知識と訓練 <p>以上の理論を理解するとともに、実際に異文化の人々とのコミュニケーション体験する機会を設け、実践的でアクティブな学習ができるようにし、異文化間のコミュニケーションについて体得する。</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>毎時間ごとに授業と関連する異文化コミュニケーションに関する論文等を読み、その要旨を授業で発表できるようにまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	以下のような項目と比率で評価する。 復習テスト 30% + 最終試験 20% + プレゼンテーション 20% + パフォーマンス 20% + 授業外学習 10%	
開示する試験問題等	復習テストと最終試験	
開示方法	授業中に開示するとともに、オフィスアワーを利用して質問に応じる。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 II	
担当教員 (所属)	FELLNER, Terry (Organization for General Education, OGE)	
講義形式	講義・演習・実習	
講義概要	<p>副題 : Outdoor Education in English: Learning English using Outdoor Education principles This course is an introduction to Outdoor Education, and will take place in both the classroom and outside of the classroom (on campus and off campus). The class will be conducted entirely in English!</p> <p>Through this course students will gain a basic understanding of the teaching methodology called Outdoor Education. As such they will learn about the history and theory behind experiential learning. The important role of reflective thinking plays in both guiding student learning and developing student identities of the self. It is expected that students will develop an appreciation of using the outdoor environment to facilitate learning.</p> <p>Classes typically will start in the classroom and after a brief introduction and explanation we will go outside where students will work in small groups to solve problems that normally involve some type of activity outside of the classroom.</p> <p>Students are also required to write on a class blog and share their feelings about their learning. Students are expected to use English at all times!</p>	
開講の意図	Upon completion students will independently and cooperatively develop a deeper appreciation of the natural environment, use English to communicate, gain a basic understanding of Outdoor Education theory and practices and how it can be used in educational settings.	
到達目標	Students will be able to reflect upon, understand, and communicate their feelings in English as well gain a greater appreciation of the outdoor environment.	
履修上の注意	<p>Students wanting to take this class may be required to pass an English test to gain admission. Japanese students and international students who qualify for this course must also register on Live Campus and come to class on the FIRST day to take an English Proficiency exam (Pre-Test) to measure their English level. All students must have an ability to communicate in English beyond the basic level (400 TOEIC or higher).</p> <p>There will be two off campus activities that will take place on the weekend. Students are required to make arrangements to attend these trips.</p>	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>Week 1 (W1): Introduction/Pre-Test/List of useful terms and phrases W: Blog set up & problem solving W3: Mapping & On campus GEO Caching W4: Team building W5: Team building W6: Off campus trip preparation W7: Off campus trip preparation W8: Weekend trip (no regular class) GEO Caching</p>	<p>Students will be required to keep an online journal (class blog) to discuss the challenges they encountered in each class and their feelings in doing the challenges. Additionally students</p>

	W9: Midterm test W10: Natural environment W11: Natural environment W12: Water activities W13: Water craft skills W14: Camping trip preparation W15: Weekend Camping trip (Nanayama Waterfall run) W16 – Final test	will possibly do rope courses, swimming, camping where active participation is essential.
成績評価の方法と基準	Midterm test 15% Final test 20% Class blog 20% Participation 30% Attendance 15%	
開示する試験問題等	In class exam.	
開示方法	Teacher will notify students what material must be studied.	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 III	
担当教員 (所属)	藤田 清士	
講義形式	講義・実習	
講義概要	本講義では、英語によるプレゼンテーション力を養うと同時に論理的に物を考え、発表する授業です。グローバル化の時代には、大学だけでなく、一般社会でも豊かな英語の表現力を求められます。講義では、話者が聴衆に一方的に話しかけるプレゼンテーションではなく、参加者や聴衆が情報を共有できるプレゼンテーションを学びます。最終的には、自分の専門分野等を口頭発表やポスター発表で発信できる事を目指します。	
開講の意図	<ul style="list-style-type: none"> ・発表する内容を論理的に考え、英語でまとめる ・英語発表の手順を学び、発信力を鍛える ・口頭やポスター等での英語発表を実践し、プレゼンテーション力を養う 	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・英語発表のための高い論理思考能力の取得 ・自分自身の専攻・研究分野を英語にて紹介できる能力の取得 ・英語発表における倫理・著作権等の問題を意識できる力 	
履修上の注意	本講義では授業への積極的かつ能動的な参加が求められます。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 英語によるプレゼンテーションとは 2. 英語発表のための論理構成 3. 英語論文とプレゼンテーションの違い 4. 発表に際しての倫理・著作権等の問題 5. Oral Presentation の実際 (1) 6. Oral Presentation の実際 (2) 7. Poster Presentation の実際 (1) 8. Poster Presentation の実際 (2) 9. Discussion Session 10. 発表内容の検討・議論 11. IT を利用した発表手法 12. 学生発表 1 (Oral Presentation 1.) 13. 学生発表 2 (Oral Presentation 2.) 14. 学生発表 3 (Poster Presentation) 15. 学生発表の総評・発表改善指導例 	発表コンテンツの準備、 口頭発表準備 (1) (2)、 ポスター発表準備 (1) (2) 討論議題準備、 PC 操作の予習、 ポスター作成、 スライド作成 1、2
成績評価の方法と基準	授業参加 (30%)、演習 (40%)、発表課題 (30%) で評価する。 成績は出欠・授業参加・口頭発表・ポスター発表の得点により総合的に評価する。教員による評価だけでなく、学生同士の相互採点結果も加味する場合がある。	
開示する試験問題等	座学等に使用する PPT は配布物としてもらえます。	
開示方法	授業中に教材は全て開示されます。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 III	
担当教員 (所属)	古賀 弘毅、丹羽 順子 (全学教育機構)	
講義形式	講義・実習	
講義概要	副題: <i>Interactions with SPACE-E students</i> This is a course of practices in which the students explain Japanese cultures or affairs or do a small research on overseas cultures or affairs by interviewing the international students or through participations in activities (e.g., field trips together with them, international students' presentations on Japanese cultures or affairs, cooking and eating party). <SPACE-E の留学生との交流活動 (留学生の日本文化・事情に関する口頭発表、合同見学旅行、料理食事会など) やインタビューを通して、日本の事情・文化に関して説明したり、海外の事情・文化に関して調査し、発表したりする。>	
開講の意図	Students can know differences between overseas cultures/affairs and their own through activities with international students or doing a research by interviewing international students.	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人に自分の考えや思いを理解してもらえるようになる ・海外の文化・事情と日本の文化・事情の違いがあることを知る ・自分の文化・事情を説明でき、留学生の文化や事情を理解できる 	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・履修者数は 22 人。多い場合は抽選。 ・異文化交流 I、II および英語母語話者の英語科目を既修。 ・外国人が出席する交流授業は、英語で行われる。 	
授業計画	<p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 概要 2. 合同授業：自己紹介 3. 日本の文化・事情の口頭発表参加 4. 海外の文化・事情の口頭発表 5. 日本の文化・事情の口頭発表参加 6. 海外の文化・事情の口頭発表 7. 日本の文化・事情の口頭発表参加 8. 海外の文化・事情の口頭発表 <p>授業外の時間に以下の交流活動 (それぞれ、2 回の授業分に相当) がある:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐賀バルーンフェスティバル見学 ・熊本城見学旅行 ・小城 (酒造、お菓子) 見学旅行 ・多文化料理・食事会 	<p>授業時間外の学習</p> <p>口頭発表 (1 回) 準備 (4 週間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構想 ・担当教員と話し合い ・インタビュー ・発表リハーサル <p>学生の口頭発表の協力・支援</p>
成績評価の方法と基準	授業参加 (留学生との交流) を 60%、発表を 40% の比率にして、評価する。	
開示する試験問題等	過去の口頭発表の資料	
開示方法	授業において提示	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 III	
担当教員 (所属)	Angove, Dana (Organization for General Education, OGE)	
講義形式	講義・演習・実習	
講義概要	<p>副題：Global Cuisine for a healthy world This cross-cultural active-learning food preparation class aims to raise the awareness of the connections between the food we eat and both human health and environmental health. This class is conducted in the medium of English. Students will interface with the teacher and other students about the preparation and consumption of vegan cuisine as an example of nutrition that can be global and sustainable for a healthy world in the 21st Century.</p> <p>Global Cuisine will introduce plant-based whole food nutrition, in other words, vegan nutrition: in theory and in practice. The theory will be presented by the teacher in the classroom; and the food preparation practice will be completed by the students, independently and/or collaboratively, outside of the classroom. Each student will be required to show (in the classroom) a short video recording of the previous week's Food Preparation Task (FPT) in which they use English to instruct another person to complete the recipe. It is expected that students will complete the FPTs in pairs, with one student in the role of 'Expert Chef' instructing the other in the role of 'Beginning Cook'. Students should alternate between these two roles from week to week. Near the end of the course, the class will plan a special end-of-course luncheon menu, and in the final class, students can enjoy preparing and eating vegan cuisine together as a group.</p> <p>Textbook: (2012) Nixon, Lindsay S. "Happy Herbivore Abroad", BenBella Books Incorporated, ISBN:978-193785604-5</p>	
開講の意図	Students will study and practice, both independently and cooperatively, food preparation for a plant-based whole food nutrition plan as a valuable experience of healthy living. This course hopes to raise the awareness about how our food choices affect both human health and the health of the planet.	
到達目標	By preparing food and communicating in English in the kitchen every week, it is expected that students will learn many new recipes, further develop their cooking skills and add to their English language abilities whilst doing so.	
履修上の注意	In order to qualify to take this Cross-Cultural Interaction III class, both Cross-Cultural Interaction I and Cross-Cultural Interaction II must have been successfully completed.	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>THEORY / PRACTICE (Food Preparation Task and Eating Journal Entry)</p> <p>Week 1: PREtest and Course Overview</p> <p>Week 2: Lecture and Getting Ready for Food</p>	To prepare for each class

	<p>Preparation</p> <p>Week 3: Lecture / FPT1: Soups, Stews & Chilis</p> <p>Week 4: Lecture & FPT1 Reviews / FPT2: Legume-based Dishes</p> <p>Week 5: Lecture & FPT2 Reviews / FPT3: Vegetable Sides</p> <p>Week 6: Lecture & FPT3 Reviews / FPT4: Stir-Fries & Veggie Dishes</p> <p>Week 7: Lecture & FPT4 Reviews / FPT5: Grain-based Dishes</p> <p>Week 8: Lecture & FPT5 Reviews / FPT6: Desserts & Baked Goods</p> <p>Week 9: Lecture & FPT6 Reviews / FPT7: Pasta, Noodles & Sauce</p> <p>Week 10: Lecture & FPT7 Reviews / FPT8: Gravies, Condiments, Sauces & Toppers</p> <p>Week 11: Lecture & FPT8 Reviews / FPT9: Drinks</p> <p>Week 12: Lecture & FPT9 Reviews / FPT10: USA cuisine</p> <p>Week 13: Lecture & FPT10 Reviews and Making Menu Plans for Week15</p> <p>Week 14: POST Test: Theory</p> <p>Week 15: Cooking Together</p>	
成績評価の方法と基準	<p>Food Preparation Tasks: 50%</p> <p>10-week Reflective Journal: 25%</p> <p>Class Attendance and Participation: 25%</p>	
開示する試験問題等	A test on the theoretical content of the course will be given.	
開示方法	The test will be given by the teacher in the second last class.	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 IV	
担当教員 (所属)	吉川 達 (全学教育機構)	
講義形式	講義・演習	
講義概要	副題：留学生と日本人学生がともに考える現代社会 日本や世界で起こっているさまざまな社会問題について留学生と日本人学生がともに考え、ディベートやディスカッションを通して意見を共有する。ひとつの問題について様々な国の事情を知ることによって視野を広げ、それに対する個人の意見を共有することによって自分自身の視点、考え方を内省するきっかけを作る。使用言語は日本語。	
開講の意図	本授業によって日本人学生と留学生の意見共有の場を設ける。また、現在日本や世界で話題になっている社会的問題を取り上げることにより、現代社会への理解を深め、大学生としての基本的教養を身につける。さらにディベートやディスカッションを通して、自分の意見を主張する技能を身に付ける。	
到達目標	基本的な教養としての一般的社会知識を身に付け、それについて自分の意見が言える。また、相手の言語能力に配慮して自分の意思が伝えられるようなコミュニケーションを行うことができる。	
履修上の注意	使用言語は日本語であるが、日本人学生は留学生の日本語レベルに配慮した日本語使用が求められる。留学生は、中上級 (日本語能力試験 N2 レベル程度) 以上の日本語力が必要である。日本人学生、留学生ともに積極性が求められる。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 授業の説明、アイスブレイキング、自己診断</p> <p>第2回 話題 1-1 新聞等を読んで基本的な知識を共有する</p> <p>第3回 話題 1-2 グループ構成と意見共有</p> <p>第4回 話題 1-3 グループで情報検索及び共有</p> <p>第5回 話題 1-4 ディベート</p> <p>第6回 話題 1-5 反省とポストリーディング</p> <p>第7回 話題 2-1 新聞等を読んで基本的な知識を共有する</p> <p>第8回 話題 2-2 グループ内で情報共有</p> <p>第9回 話題 2-3 ディスカッション</p> <p>第10回 話題 2-4 反省とまとめ</p> <p>第11回 話題 3-1 新聞等を読んで基本的な知識を共有する</p> <p>第12回 話題 3-2 グループ構成と意見共有</p> <p>第13回 話題 3-3 グループで情報検索及び共有</p> <p>第14回 話題 3-4 ディベート</p> <p>第15回 話題 3-5 反省とポストリーディング、総まとめ</p>	<p>第1回授業時に指定する</p> <p>第2回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第3回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第4回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第5回自分の発話の内省</p> <p>第6回ビデオを見て反省</p> <p>第7回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第8回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第9回自分の発話の内省</p> <p>第10回ビデオを見て反省</p> <p>第11回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第12回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第13回関連記事を集めポートフォリオを作成する</p> <p>第14回自分の発話の内省</p> <p>第15回ビデオを見て反省</p>
成績評価の方法と基準	調べた内容を管理するポートフォリオ、活動時の積極性、ディベートの勝敗、学期末のレポートを評価対象とする。なお、事情が考慮できない欠席が2回以上あった場合、その学生は評価の対象から除外する。 <評価内訳> ポートフォリオ 40%・活動時の積極性 20%・ディベートの勝敗 10%・	

	レポート 30%
開示する試験問題等	評価とその内訳
開示方法	全ての受講者の評価後、自ら開示を申し出た者に対し個別に行う

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流科目Ⅳ	
担当教員(所属)	中山亜紀子／布尾勝一郎(全学教育機構)	
講義形式	この授業では、留学生と一っしょに、佐賀のことを調べ、発表します。授業時間外での調査が必要です。	
講義概要	副題：佐賀の魅力を探しましょう	
開講の意図	留学生と佐賀大学の学生が、「佐賀の魅力を探す」というタスクに取り組むことによって、 1) 佐賀に対する愛着を育てる。 2) 文化の異なる人と共に何かを作り上げる体験をする。 3) 異文化に対してより開かれた視野を持つ。	
到達目標	1) 日本語を母語としない人たちと日本語を使って協働体験をする。 2) 自分の体験を振り返った上で、体験を多角的な視野から理解し、異文化に対する寛容な態度を養う。 3) 自分たちが調べたことをポスターにまとめて発表する。 4) 佐賀大学の先輩として、後輩の留学生や佐賀初心者たちの参考になるようパンフレットを作成する。	
履修上の注意	履修者数は、佐賀大学の正規学生の履修は15名まで。 授業時間外での調査や作業が求められる。 異文化交流Ⅰ(異文化交流基礎)を受講していること。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1. オリエンテーション、アイスブレイキング 2. グループ編成。佐賀について、知っていることを話し合う。 3. テーマを決定する。 4. 文献調査の結果を報告する。 5. 学外調査を行う。 6. 学外調査の結果を報告する。 7. 発表について学ぶ 8. 発表用のPPTを作る。 9. 発表用のPPTを作る。 10. 発表の練習 11. 学外者も招いての発表会 12. 発表について振り返る 13. パンフレット作り 14. 自分たちの異文化体験を振り返る1 15. 自分たちの異文化体験を振り返る2	佐賀について調べる 佐賀についてより深く調べる。 テーマについて文献調査 学外調査の準備 学外調査の結果をまとめる 発表のための作業 発表のための作業 発表のための作業 パンフレットのための作業
成績評価の方法と基準	グループへの貢献(30%)、ポスター発表およびパンフレット作成(40%)、最終レポート(30%)で評価する。	
開示する試験問題等	レポートは返却する。	
開示方法	レポートは授業中に返却する。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 IV	
担当教員 (所属)	山田直子 (国際交流推進センター)	
講義形式	講義・実習	
講義概要	副題: Reexamination of local community through field work この授業では、佐賀の地域社会が直面する現代的变化や課題を題材として、グローバル化がもたらす諸問題に取り組むための新しい視点を地域社会の価値やローカルなコミュニティの再検討を通じて探る。受講者は自然環境と地勢、経済と産業、社会構造、人の移動、文化変容などの中からテーマを一つ選び、グループでフィールドワークを行なう。地域社会の内側から理解するために、参与観察やインタビューを繰り返し行なう。フィールドワークやデータ分析の過程では、日本人学生と留学生が異なる視点からの意見を持ちディスカッションを行なう。フィールドワークから得られた成果はグループごとに発表し、報告書にまとめる。	
開講の意図	地域から問題を提起し、地域から世界を考えることができるようになる人材を育成すること。また、異なる文化的・言語的背景を持つ人々と協働するために必要な素養や態度を養成する。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・地域から問題を提起し、地域から世界を考えることができるようになること。 ・相対的かつ重層的に地域を理解するために必要な情報を収集し、様々な視点からコミュニティのありようを分析できるようになること。 	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・履修者数はプログラム受講者内の 15 人。多い場合は抽選。 ・異文化交流 I、II を履修済みでなければならない。 ・日本語が母語でない履修者は基礎的な日本語の会話ができること。 1泊2日のフィールドワークを週末に1回実施する。交通費・宿泊費が1回あたり2,000円程度必要となる。	
授業計画	内容 1. 科目概要説明、地域研究のアプローチ 2. インドネシア村落社会での調査事例 3. フィールドワークの方法と倫理 4. 文献資料が語る調査地 5. ~10. フィールドワーク 11. グループ発表 (1) 12. グループ発表 (2) 13. グループ発表 (3) 14. グループ発表 (4) 15. 全体ディスカッション・総括	授業時間外の学習 指定された文献や書籍を読む。 フィールドワークの準備をグループで行う。
成績評価の方法と基準	授業での議論参加(20%)、グループワーク中間報告(30%)、口頭およびエッセイによる最終成果報告 (50%) で評価する。	
開示する試験問題等	特になし	
開示方法	関連文献や資料を授業で配布する。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	異文化交流 IV	
担当教員 (所属)	古賀 弘毅 (全学教育機構)	
講義形式	講義と実習 (実習を授業外に行い、課題に関する教員の発表例を参考にして、受講者は、言語の情報提供者を対象に調査をして口頭発表の準備をする。)	
講義概要	副題: Field methods in linguistics `現地語文法調査' This course is an introduction to doing research into sentences and phrases of an indigenous foreign language or dialect. Following the instructor's example on a grammatical pattern of a language, each student is required to make a 10-minute presentation to sketch the pattern of his or her target language in class. The grammatical patterns are simple ones: SV (Topic 1, T1), SVO (T2), postpositional and locational phrases (T3), tense (including progressive) (T4) and noun/adjective plus copula (T5). As the 6 th (sixth) presentation (T6), each student makes a self-introduction in the language or dialect (topic 6) using the patterns he or she has studied.	
開講の意図	受講者は、自分の知らない言語や方言のデータを収集し、観察し、文法の型の仮説を立て、試験する。証拠を使って、分析を議論する。この結果を口頭発表において提示する。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・分析について論理的に問題となる点を明確に提示できる。 ・提案する分析に必要なかつ十分な証拠を収集することができる。 	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・履修者数はプログラム受講者内の 12 人。多い場合は抽選。 ・異文化交流 I, II を履修済みでなければならない。英語母語話者の英語科目、言語学や日本語学の科目の既修が望ましい。 ・履修者は、それぞれ、調査言語の母語話者 (例、留学生) を自分で探し、情報提供者としての協力をその人をお願いする。情報提供者が日本語を話せなければ、英語か、その人の知っている言語かを使う必要がある。お礼をご飯をおごるなどして工夫しよう。 	
授業計画	<p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 概要、野外手法の倫理、音声録音提示法 2. 教師の発表例: 言語と情報提供者(T0) 3. 例: SV 型(T1)、学生発表(T0) 4. 例: SVO 型(T2)、学生発表(T1) 5. 学生発表(T1) (続き) 6. 例: PP&Loc 型(T3)、学生発表(T2) 7. 学生発表(T2) (続き) 8. 例: N/Adj-Copula 型(T4)、学生発表(T3) 9. 学生発表(T3) (続き) 10. 例: 時制(T5)、学生発表(T4) 11. 学生発表(T4) (続き) 12. 学生発表(T5) 13. 学生発表(T5) (続き) 14. 例: 自己紹介スピーチ(T6) 15. 学生発表(T6) 	<p>授業時間外の学習</p> <p>情報提供者と調査言語の決定</p> <p>T0 の発表準備 T1 の発表準備 T2 の発表準備</p> <p>T3 の発表準備</p> <p>T4 の発表準備</p> <p>T5 の発表準備</p> <p>T6 の発表準備</p> <p>Note: Preparing for six presentations, each student needs to do research in cooperation with the informant for one to two hours every other week besides the usual class.</p>

成績評価の方法と基準	授業での議論参加を 20%、発表 6 つを 80% で評価する。
開示する試験問題等	授業中に、教師による口頭発表の例が示される。教師の調査・発表例はインドネシア語の方言ブギス方言による。
開示方法	授業中に、教師による口頭発表の例が示される。教師の調査・発表例はインドネシア語の方言ブギス方言による。

インターフェイス授業科目シラバス

科目名	現代社会における消費 I (消費生活環境論)	
担当教員 (所属)	赤星礼子 (文化教育学部) 甲斐今日子 (文化教育学部)	
講義形式	講義・演習	
講義概要	<p>生活経営、消費者教育の立場から、消費者とはだれかに始まり、日本における消費者問題発生の小史をみる。また、消費者問題の発生とともに進んできた消費者教育の流れについて説明する。</p> <p>後半においては、衣生活を例にとり、衣生活における消費者像の変遷と問題点を概観する。</p>	
開講意図	現代における消費生活に顕在化している諸問題を理解するとともに、あるべき消費生活を創造できるようになるための入門編として開講する。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が生活者・消費者であることを説明できる。 ・変化の激しい消費生活環境を説明できる。 ・消費生活に生じている被害状況、問題の発生状況を具体的に説明できる。 	
履修上の注意	「授業時間外の学習」に記した「調べる」「記録する」などは小レポートである。	
授業計画	内容	授業以外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 消費者の出現 2. 消費者問題の小史 3. 消費者相談の増加 4. 現代の消費者被害の内容 5. 悪質商法・悪徳商法・問題商法とは 6. 金銭管理と消費者問題 7. 消費者教育と消費者の権利 8. 「賢い消費者」から「自立した消費者」 9. グリーン・コンシューマとは 10. 目指す消費者像 11. 衣生活の消費生活環境 12. ワードローブの管理 13. アパレル業界 14. クリーニング業界 15. リフォーム業界 16. 定期試験 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校家庭科教科書を読む 2. 消費者問題を1例、調べる 3. 相談先の住所等を調べる 4. 身近に被害例がないか調べる 5. ストップ!被害の方法を練る 6. 家計簿をつける 7. CMの記憶を記録する 8. 4Rの実践例を記録する 9. 消費生活センターの見学 10. 衣類の在庫点検をする 11. 衣類の表示を確認する 12. 洗濯の方法を記録する 13. 保管方法を記録する 14. 問題点を見出す
成績評価の方法と基準	出席率 (40%) とは、レポート等の提出や発表の加点である。 定期試験 (60%) は、小論文形式である。	
開示する試験問題等	成績発表後に研究室で全開示する。	
開示方法	研究室に来室する。(開示期間は、成績発表後の1週間とするが、時間帯は研究室前に掲示する。)	

インターフェイス授業科目シラバス

科目名	現代社会における消費Ⅱ（消費者と法）	
担当教員（所属）	岩本 諭（大学理事・副学長）	
講義形式	講義・演習	
講義概要	本講義は、プログラムⅠで概観した消費者と消費生活を取り巻く諸問題について、法律と政策の観点から考察するものである。プログラムⅢ・Ⅳで取り上げる個別問題の検討に際して前提となる基本的な法的思考と知識を修得する場である。	
開講意図	「消費者とは何か」という問いかけ（プログラムⅠ）を出発点として、法と制度における「消費者」が「事業者」との関係において捉えられてきたこと、さらに「消費者＝市民」という視座が重視されている今日の状況を把握するとともに、消費者－事業者の間に惹起する個々の問題・トラブルの法律上の意味と対応策について検討することを目的とする。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「消費者＝市民（Consumer-citizen）」としての自律性を涵養する。 ・商品や役務（サービス）を適正に選択できる。 ・消費生活上のトラブルに遭遇した際、適切に対応できる。 ・他者とのトラブルに接した際、適切なアドバイスができる。 	
履修上の注意	「授業時間外の学習」に記した「調べる」「記録する」などは小レポートである。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1.消費者とは何か－法における位置づけ 2.消費者と法・制度－基本フレーム 3.価格と消費者（1） 4.価格と消費者（2） 5.「景品」と「懸賞」と法 6.ボーナス・ポイントサービスと法 7.表示と法（1） 8.表示と法（2） 9.食品表示と法（1） 10.食品表示と法（2） 11.広告（CM）と法 12.安全と法（1）－製品の安全 13.安全と法（2）－契約・取引の安全 14.「消費者の権利」の考え方 15.消費者市民社会と「消費者の自律」 16.定期試験 	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキスト・資料を通読する 2. 消費者庁 HP を概観する 3. 公正取引委員会 HP を概観する 4. 店頭で価格表示の実態を把握する 5. 購入経験・動機を整理する 6. 自らのポイント履歴を把握する 7. 身の回りの商品表示を見る 8. 店頭で商品表示を確認する 9. 身の回りの食品表示を見る 10. 店頭で食品表示を確認する 11. CM 本来の機能を考え CM に接する 12. 欠陥に対する対処を考える 13. 解約の仕方を考える 14. テキスト・資料を通読する 15. テキスト・資料を通読する
成績評価の方法と基準	定期試験を行う。出席率（40％）と定期試験（60％）である。	
開示する試験問題等	成績発表後に研究室で全開示する。	
開示方法	研究室に来室する。（開示期間は、成績発表後の1週間とするが、時間帯は研究室前に掲示する。）	

インターフェイス授業科目シラバス

科目名	現代社会における消費Ⅲ（衣食住の科学Ⅰ）	
担当教員（所属）	甲斐今日子（文化教育学部）澤島智明（文化教育学部） 小林恒夫（附属アグリ創生教育研究センター）	
講義形式	講義・演習	
講義概要	プログラムⅠ、Ⅱを受けてⅢ、Ⅳでは、生活経営、消費者教育の立場から、生活の基盤となる衣食住に用いる消費財について「生産・流通・消費」における問題・課題について分析・考察する。まず本授業では、それぞれの領域の専門家が、衣食住の基礎知識について解説する。	
開講意図	現代における消費生活に顕在化している諸問題を理解するとともに、あるべき消費生活を創造できるようになるための実践編として開講する。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・衣生活に関する基礎知識を習得し、現代の衣生活の課題を指摘できる。 ・食生活に関する基礎知識を習得し、現代の食生活の課題を指摘できる。 ・住生活に関する基礎知識を習得し、現代の住生活の課題を指摘できる。 	
履修上の注意	「授業時間外の学習」に記した「調べる」「記録する」などは小レポートである。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 衣生活の基礎知識（被服材料Ⅰ） 2. 衣生活の基礎知識（被服材料Ⅱ） 3. 衣生活の基礎知識（被服管理） 4. 食生活の基礎知識（食の新たな動向） 5. 食生活の基礎知識（食の安全性） 6. 食生活の基礎知識（佐賀県の食文化） 7. 食生活の基礎知識（お茶の消費） 8. 食生活の基礎知識（酒の消費） 9. 食生活の基礎知識（肉の消費） 10. 住生活の基礎知識（住居の選択） 11. 住生活の基礎知識（住居の構造） 12. 住生活の基礎知識（住居の計画） 13. 住生活の基礎知識（住居各室の計画） 14. 住生活の基礎知識（住居の室内環境） 15. 住生活の基礎知識（住居の管理） 16. 定期試験 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自分の衣服材料を調べる 2. 店頭の衣服材料を調べる 3. 使用している洗剤を調べる 4. 若い世代の食の傾向を調べる 5. 食の安全性事件を調べる 6. 佐賀県の食文化を考える 7. 佐賀県＝主要消費県の確認 8. 佐賀県＝日本一の酒消費県確認 佐賀牛に関する消費・生産調査 9. 住宅のチラシを集める 10. 自宅の構造を調べる 11. 自宅の平面図を作成する 12. 自宅の間取りを評価する 13. 自室の室内環境を評価する 14. 自宅の手入れ方法を調べる
成績評価の方法と基準	定期試験を行う。 衣生活分野（20％）食生活分野（40％）住生活分野（40％）	
開示する試験問題等	成績発表後に研究室で全開示する。	
開示方法	研究室に来室する。（開示期間は、成績発表後の1週間とするが、時間帯は研究室前に掲示する。）	

インターフェイス授業科目シラバス

科目名	現代社会における消費Ⅳ（衣食住の科学Ⅱ）	
担当教員（所属）	甲斐今日子（文化教育学部） 澤島智明（文化教育学部） 小林恒夫（附属アグリ創生教育研究センター）	
講義形式	講義・演習	
講義概要	プログラムⅠ、Ⅱを受けてⅢ、Ⅳでは、生活経営、消費者教育の立場から、生活の基盤となる衣食住に用いる消費財について「生産・流通・消費」における問題・課題について分析・考察する。本授業では、衣食住に関する消費者問題・被害等を挙げて問題解決のための検討を行う。	
開講意図	現代における消費生活に顕在化している諸問題を理解するとともに、あるべき消費生活を創造できるようになるための実践編として開講する。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・現代衣生活の課題を理解し、課題解決のための具体的な提案ができる。 ・現代食生活の課題を理解し、課題解決のための具体的な提案ができる。 ・現代住生活の課題を理解し、課題解決のための具体的な提案ができる。 	
履修上の注意	「授業時間外の学習」に記した「調べる」「記録する」などは小レポートである。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代衣生活の課題Ⅰ（消費者心理） 2. 現代衣生活の課題Ⅱ（安全性） 3. 現代衣生活の課題解決（検討） 4. 食生活の課題Ⅰ（学生の食生活） 5. 食生活の課題Ⅱ（食の安全性） 6. 食生活の課題Ⅲ（佐賀県の食文化） 7. 食生活の課題Ⅳ（お茶の消費） 8. 食生活の課題Ⅴ（酒の消費） 9. 食生活の課題Ⅵ（肉の消費） 10. 住生活の課題Ⅰ（住宅トラブル） 11. 住生活の課題Ⅱ（欠陥住宅） 12. 住生活の課題Ⅲ（省エネルギー） 13. 住生活の課題Ⅳ（家庭内事故） 14. 住生活の課題Ⅴ（防災、防犯） 15. 住生活の課題Ⅵ（居住形態） 16. 定期試験 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 衣服の購入動機を振り返る 2. 衣服の安全性を振り返る 3. 衣生活のあり方を検討する 4. 食を食い改める 5. 安全性対策を考える 6. 佐賀県の食文化を見直す 7. お茶の消費と健康を考える 8. 酒消費から見た「佐賀学」論 9. 肉消費から見た「佐賀学」論 10. 住宅トラブルのニュースを検索 11. 欠陥住宅のニュースを検索 12. エネルギー消費を調べる 13. 自宅の危険箇所を記録する 14. 自宅の耐震診断をする。 15. 様々な居住形態の事例を調べる
成績評価の方法と基準	定期試験を行う。 衣生活分野（20％）食生活分野（40％）住生活分野（40％）	
開示する試験問題等	成績発表後に研究室で全開示する。	
開示方法	研究室に来室する。（開示期間は、成績発表後の1週間とするが、時間帯は研究室前に掲示する。）	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	アントレプレナーシップⅠ ー導入ー	
担当教員(所属)	佐藤三郎(産学・地域)、中村隆敏(文教)、松前あかね(産学・地域)	
講義形式	座学講義(含:質疑応答)、調査、ワークショップによる双方向型講義である	
講義概要	<p>講座担当者による総括的な導入のためのガイダンスに始まり、自身のキャリア選択・キャリアデザインの指針となる、基本的なキャリアデザイン手法を学ぶ。その後、社会の幅広い分野において新たな価値創造に挑戦する講師陣に出会い、社会およびキャリアに関する視野を広める。また、各自が関心をもつキャリアについて、調査等により理解を深めレポートにまとめる。</p>	
開講の意図	<p>変革の時代にあつて、ベンチャー起業に限らず、企業、行政・NPOなどの各種団体、アカデミア等を含む社会のあらゆる分野において、アントレプレナーシップ(起業家精神)をもった人材、すなわち、新たな価値創造に挑戦する人材が求められている。</p> <p>本講義では、アントレプレナーシップ教育の導入として、多様で幅広い社会観・キャリア観を涵養し、自身のキャリアデザインへの動機づけ、手がかりとなる指針を得る。</p> <p>本講義が、多様な世界に羽ばたいて行く皆さんの社会への橋渡しとして、青年期におけるアイデンティティ確立の一助となり、大学で学ぶことの意味の再発見や社会の動向を知る契機となることを期待する。</p>	
到達目標	話者の見解を十分に聞き取ることができる。多様な社会観を踏まえ、自らのキャリアを自立的に描くことができる。	
履修上の注意	ワークではもちろん、座学にあつても、主体的・協動的に取り組む姿勢を重視する。連続講義や土曜開講等、必要に応じて講義日を変更する可能性がある。	
授業計画	<p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス(講座の意義と進め方) 2 キャリアデザイン手法 3-5 起業家として新たな価値創造に挑戦されている方の講演と質疑応答 6-7 会社員として新たな価値創造に挑戦されている方の講演と質疑応答 8 中間報告会 9-10 起業家として新たな価値創造に挑戦されている方の講演と質疑応答 11 研究者として新たな価値創造に挑戦されている方の講演と質疑応答 12 公務員として新たな価値創造に挑戦されている方の講演と質疑応答 13-14 経営者として新たな価値創造に挑戦されている方の講演と質疑応答 15 まとめ 	<p>授業時間外の学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・志望するキャリアについて、各自調査 ・中間および期末レポート ・適宜課題
成績評価の方法と基準	<p>(1) 毎回提出の成績評価票(50点)とレポート(中間・期末各10点)により評価する。</p> <p>(2) 講義に関連する自主的な取り組みの報告を積極的に評価し、加点する。</p>	
開示する試験問題等	成績評価票	
開示方法	開示を希望する場合は、講義最終回終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	アントレプレナーシップⅡ -基礎-	
担当教員(所属)	佐藤三郎(産学・地域)、中村隆敏(文教)、松前あかね(産学・地域)	
講義形式	座学講義(含:質疑応答)、フィールドワーク、ワークショップ、プレゼンテーションによる双方向型の講義である	
講義概要	地域の企業や非営利団体等の訪問、経営者との対話、課題(ビジネスチャンス)発見・ビジネスアイデア創出ワークを行う。プレゼンテーション技法を学び、ビジネスアイデアのプレゼンテーションを講義終盤に行う。	
開講の意図	<p>変革の時代にあつて、ベンチャー起業に限らず、企業、行政・NPOなどの各種団体、アカデミア等を含む社会のあらゆる分野において、アントレプレナーシップ(起業家精神)をもった人材、すなわち、新たな価値創造に挑戦する人材が求められている</p> <p>本講義では、アントレプレナーシップ教育の基礎として、地域の企業や非営利団体の現場に足を運び社会感覚を養うほか、経営者らとの対話、ワークショップ、プレゼンテーションなどを通じて、課題(ビジネスチャンス)発見・課題解決アイデア(ビジネスアイデア)創出手法を修得し、実践する。</p> <p>御縁を得た経営者の再訪問や、学生間でのディスカッション、外部のビジネスアイデアコンテストへの挑戦など、講義外でも積極的に行動し、社会での新しい価値創造の機会を発見し、それを活かすアイデアを創出してほしい。</p>	
到達目標	社会との対話を通じて、(1)自らが取り組む課題を発見し、(2)課題解決に向けたアイデアを創出し、(3)公の場でプレゼンテーションできる。	
履修上の注意	ワークではもちろん、座学にあつても、主体的・協動的に取り組む姿勢を重視する。連続講義や土曜開講等、必要に応じて講義日を変更する可能性がある。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス(起業家精神とは何か、講座の意義と進行の案内) 2-4 プレゼンテーション技法(講義・ワーク)※土曜集中開講 5-6 機会発見・アイデア創出手法(講義・ワーク) 7-9 課題発見(フィールドワーク) 10 中間報告会 11-14 アイデア創出・プレゼンテーション準備(ワーク) 15 ビジネスアイデア発表会	・フィールドワーク ・グループ学習 ・適宜課題 ・希望者は、インターシップ演習に向けた準備
成績評価の方法と基準	(1) 毎回提出の成績評価票(50点)と学期末プレゼンテーション(20点)により評価する。 (2) 講義に関連する自主的な取り組みの報告を積極的に評価し、加点する。	
開示する試験問題等	成績評価票。試験に相当する発表会(プレゼンテーション)は公開とする。	
開示方法	開示を希望する場合は、講義最終回終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	アントレプレナーシップⅢ -応用-	
担当教員(所属)	佐藤三郎(産学・地域)、中村隆敏(文教)、松前あかね(産学・地域)	
講義形式	座学講義(含:質疑応答)、フィールドワーク、ワークショップ、プレゼンテーションによる双方向型の講義である	
講義概要	この授業では、ビジネスモデルの構造を学び、基礎的な経営戦略を理解した上で、着想したビジネスアイデア実現のためのビジネスモデルの構築と修正を繰り返す。講義終盤に、ビジネスモデル・アワードを実施する。	
開講の意図	<p>変革の時代にあつて、ベンチャー起業に限らず、企業、行政・NPOなどの各種団体、アカデミア等を含む社会のあらゆる分野において、アントレプレナーシップ(起業家精神)をもった人材、すなわち、新たな価値創造に挑戦する人材が求められている</p> <p>本講義では、アントレプレナーシップ教育の応用としてビジネスモデル創出手法を学び、社会との関わりの中で、アントレプレナーシップⅡで着想したアイデア実現のためのビジネスモデルの構築・修正を繰り返す。</p> <p>社会参画、学生同士でのディスカッション、外部のビジネスモデルコンテストへの挑戦など、講義外でも積極的に行動し、社会における新しい価値創造に向け、戦略を練り上げてほしい。</p>	
到達目標	自らのアイデア実現のためのビジネスモデルを戦略的に構築できる。他者の意見を聞き取り、自らの意見を適宜柔軟に変えることができる。	
履修上の注意	ワークではもちろん、座学にあつても、主体的・協動的に取り組む姿勢を重視する。連続講義や土曜開講等、必要に応じて講義日を変更する可能性がある。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>1 ガイダンス(イノベーションとは何か、講座の意義と講義の進め方の案内)</p> <p>2-3 ビジネスモデルの基礎構造(講義・ワーク)</p> <p>4 ビジネスモデルの基本型(講義・ワーク)</p> <p>5-6 基本的経営戦略(講義・ワーク)</p> <p>7-9 ビジネスモデルの構築(ワーク)</p> <p>10 中間発表</p> <p>11-12 ビジネスモデルの再構築・社会参画(ワーク)</p> <p>13 ビジネスモデル・アワード発表準備</p> <p>14 ビジネスモデル・アワード予選</p> <p>15 ビジネスモデル・アワード</p>	<p>・フィールドワーク</p> <p>・グループ学習</p> <p>・適宜課題</p>
成績評価の方法と基準	<p>(1) 毎回提出の成績評価票(50点)とプレゼンテーション(20点)により評価する。</p> <p>(2) 講義に関連する自主的な取り組みの報告を積極的に評価し、加点する。</p>	
開示する試験問題等	成績評価票。試験に相当するアワード(プレゼンテーション)は公開とする。	
開示方法	開示を希望する場合は、講義最終回終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	アントレプレナーシップⅣ ー実践ー	
担当教員(所属)	佐藤三郎(産学・地域)、中村隆敏(文教)、松前あかね(産学・地域)	
講義形式	座学講義(含:質疑応答)、フィールドワーク、ワークショップ、プレゼンテーションによる双方向型の講義である	
講義概要	この授業では、アントレプレナーシップⅢで自らが創出した(あるいは他の受講生が創出した)ビジネスモデルをビジネスプランに落とし込み、プランを実現させるための資金調達やチーム形成、ものづくりに挑戦し、社会との協働によりプランの実現を目指す。	
開講の意図	<p>変革の時代にあつて、ベンチャー起業に限らず、企業、行政・NPOなどの各種団体、アカデミア等を含む社会のあらゆる分野において、アントレプレナーシップ(起業家精神)をもった人材、すなわち、新たな価値創造に挑戦する人材が求められている</p> <p>本講義では、アントレプレナーシップ教育の実践として、アントレプレナーシップⅢで創出したビジネスモデルをビジネスプランに落とし込み、社会との協働の中で実践する。</p> <p>学生同士でのディスカッション、外部のビジネスプランコンテストへの挑戦、学外との連携・協働など、講義外でも積極的に行動し、社会における新しい価値創造のアイデアを絵に描いた餅に終わらせないスキルを実践的に修得してほしい。</p>	
到達目標	ビジネスプランを構成する要素について基礎的な説明ができる。社会との協働・連携を通じて、プランの実践に挑戦する。	
履修上の注意	ワークではもちろん、座学にあつても、主体的・協動的に取り組む姿勢を重視する。連続講義や土曜開講等、必要に応じて講義日を変更する可能性がある。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス(講座の意義と進行案内、グループ分け) 2 ビジネスプランの基本要素(講義) 3 企業組織法(講義) 4 資金調達(講義) 5-7 ビジネスプランの作成(ワーク) 8-10 ビジネスプランの実践 11 中間報告会 12-14 ビジネスプランの実践・報告会準備 15 アントレプレナーシップ・プログラム最終報告会	・フィールドワーク ・グループ学習 ・ビジネスプランの作成、実践 ・適宜課題
成績評価の方法と基準	(1) 毎回提出の成績評価票(50点)、ビジネスプラン(10点)、プレゼンテーション(10点)により評価する。 (2) 講義に関連する自主的な取り組みの報告を積極的に評価し、加点する。	
開示する試験問題等	成績評価票。試験に相当するプレゼンテーションは公開とする。	
開示方法	開示を希望する場合は、講義最終回終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	インターフェース演習 -アントレプレナーシップV-	
担当教員(所属)	佐藤三郎(産学・地域)、中村隆敏(文教)、松前あかね(産学・地域)	
講義形式	就業体験・起業体験・企業との共同研究・研修プログラム参加のいずれか	
講義概要	<p>各自のキャリア志向に合わせ、国内外での就業体験(インターンシップ)や起業体験、企業との共同研究、研修プログラム参加の機会を調査し、長期休暇等に実践的かつ『集中的』に取り組む。期間を10~14日間前後とする。</p> <p>なお、参画すべき研修プログラムを自ら企画することも推奨する。</p>	
開講の意図	<p>変革の時代にあって、ベンチャー起業に限らず、企業、行政・NPOなどの各種団体、アカデミア等を含む社会のあらゆる分野において、アントレプレナーシップ(起業家精神)をもった人材、すなわち、新たな価値創造に挑戦する人材が求められている</p> <p>本講義では、集中的に時間を確保できる長期休暇等を活用し、存分に社会的視野を広め、自らのキャリアを実践的に探求・試行し、アントレプレナーシップ発揮の感覚を掴んでほしい。</p>	
到達目標	自らの志向に基づき、自主的にプログラムを組み、実践する。	
履修上の注意	主体的・積極的に取り組む姿勢を重視する。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ul style="list-style-type: none"> ・ガイダンス(講座の意義と進行案内) ・実習 ・中間報告会 ・実習 ・報告会 	適宜課題
成績評価の方法と基準	実習レポートを課し、総合的に合否判定をする。	
開示する試験問題等	該当なし	
開示方法	該当なし	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	リサーチ・リテラシーⅠ（くらしの中の統計）	
担当教員（所属）	村山 詩帆（全学教育機構）	
講義形式	講義・演習	
講義概要	<p>人が決断を迫られる時、何らかの事実に基づいて望ましい決断をしたいと考えることがしばしばある。噂話に耳を傾けることもあれば、信頼している誰かに経験談を語ってもらおうとするかもしれない。統計も事実を知るための一つの方法である。だが、統計が作成され、利用される過程で政治的な仮定が入り込むことや、意図的もしくは無意図的に誤用されることさえある。</p> <p>本プログラムは、統計を適切に活用できるリサーチ・リテラシーの修得を目指し「リサーチ・リテラシー」のフェーズⅠとして、統計データの読み込みと統計データの作成を行う。担当教員は、統計の活用に関するさまざまな議論を提示し、統計データの適切な読み込みができるよう支援する。履修者は担当教員や履修者同士でディスカッションしながら、各自の問題意識を明らかにし、グループワークを通して興味・関心に即した統計データを実際に作成する。</p>	
開講の意図	<p>統計データは、さまざまな文化や価値観をふくめた事象を量的に理解するツールとして、日常的に用いられている。しかしながら、何をどう統計するかによって、データがあらわす事象は大きく異なってくる。統計データは、人々を欺くこともできれば、中立的な意思決定の材料にもなるのである。</p> <p>本プログラムは、統計が作成され、利用される日常的な過程を題材として、現代社会の課題を自ら発見し、他者と共生していくための責任ある解決の方法を探る能力を獲得することを目標としている。このため、統計技法をわかりやすく、無理なく修得できるよう、共同作業やプレゼンテーションを交えた、フェーズⅠ（くらしの中の統計学）、フェーズⅡ（やさしい計算の科学）、フェーズⅢ（人文・教育・社会の統計科学）、フェーズⅣ（経済・生物・環境の統計科学）からなる4つの授業科目を開講する。また、日本統計学会が2011年11月から開始した統計検定に対応した授業内容・方法を採用する。</p>	
到達目標	<p>(1)統計データを適切に読み込み、問題点を指摘できる。 (2)共同作業において自らの役割を取得し、必要な提案ができる。 (3)偏見に囚われることなく統計データを解釈できる。 (4)統計データの活用に関する社会的責任を理解できている。</p>	
履修上の注意	フェーズⅡ（やさしい統計計算）、フェーズⅢ（人文・教育・社会の統計科学）、フェーズⅣ（経済・生物・環境の統計科学）は、必ずこの授業科目を履修してから受講してください。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回：気になる統計データを集めよう 第2回：統計データで主張してみよう 第3回：統計的調査 第4回：標本の収集と記述 第5回：既存統計と2次分析 第6回：データの収集① 第7回：データの収集② 第8回：収集したデータの報告 第9回：データのまとめ 第10回：分布 第11回：標本と母集団 第12回：標本の比較 第13回：検定 第14回：解析 第15回：小テストと解説</p>	<p>第1回：関心のあるデータを収集する 第2回：自らの主張と収集したデータの不整合をチェックする 第3回：教科書の該当章の内容を確認する 第4回：練習問題を解答する 第5回：教科書の該当章の内容を確認する 第6回：データの所在を確認する 第7回：データ収集の目的を報告する準備を行う 第8回：質疑応答の結果にもとづき不足データを収集する 第9回：教科書の該当章の内容を確認する 第10回：教科書の該当章の内容を確認する 第11回：教科書の該当章の内容を確認する 第12回：教科書の該当章の内容を確認する</p>

		第13回：練習問題を解答する 第14回：練習問題を解答する 第15回：収集データの適切さをフェーズⅡに向けて再チェックする
成績評価の方法と基準	<p>成績評価に際しては、①授業への取り組み状況（3回以上の無断欠席は不可）、②客観テストの得点、③作成した統計データの完成度の3点を基準とする。</p> <p>②の客観テストでは、統計学の基礎知識（統計検定4級程度）に係る事項を問う。出題数は20問とし、正答数×3の60点スケールに換算する。</p> <p>③の作成した統計データの完成度については、(1)講義で解説した統計の定義に即したデータになっているか、(2)履修生の問題意識を検討できるデータになっているかを評価する。評価にあたって、1～10ポイントで採点し、総合ポイント×4の40点スケールに換算する。</p>	
開示する試験問題等	<p>今年度実施分については、以下のものを開示する。</p> <p>(1)客観テスト (2)採点結果の詳細</p>	
開示方法	<p>今年度実施分については、成績報告完了後、履修者の求めに応じて開示する。</p>	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	食料と生活 I (食料の生産と課題)	
担当教員 (所属)	有馬進 (農)、鄭紹輝 (農)	
講義形式	講義・演習・実習等	
講義概要	本講は、人類の生存と密接に関わる栽培植物、なかでも食生活をささえる主要な食用作物ならびに食料加工原料用作物を取り上げ、それぞれの栽培に関する歴史と生産に関わる現代的課題を探ると共に、植物学的ならびに栄養学的視点から各作物の特徴を紹介する。また、食用作物に関する改良の歴史や栽培技術についても紹介する。なお、本講義は基本的に前半を有馬教授、後半を鄭准教授が担当する。	
開講の意図	各種の食用作物を知ることによって食料に対する興味を抱かせ、食料生産に対する問題意識を啓発する。	
到達目標	各種の食用作物の歴史・性状・機能・生産に関する知識を修得する。また、現在の食料生産に関する情報を収集して、その課題を説明し、独自の問題意識として将来の食料生産のあり方を展望できる。	
履修上の注意	欠席・遅刻・早退・授業中の私語は減点の対象とする。 【農学部以外の学生を対象とする。】	
授業計画	<p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 栽培植物 (農作物) の種類と利用 2. 食用作物の改良・栽培の歴史と飢餓 3. 食用作物栽培と自然・社会経済環境 4. イネ科作物の紹介 (イネ) 5. イネ科作物の紹介 (コムギ) 6. イネ科作物の紹介 (トウモロコシ) 7. ヒルガオカ科作物の紹介 (サツマイモ) 8. ナス科作物の紹介 (ジャガイモ) 9. 中間試験・討論. 10. マメ科作物の起源、伝播 11. マメ科作物の栽培利用現状 12. マメ科作物の生理・形態的特長 I 13. マメ科作物の生理・形態的特長 II 14. マメ科作物の栄養価と利用 15. 環境保全型農業におけるマメ科作物の役割 	<p>授業時間外の学習</p> <p>第 1~8 回・第 10~15 回 各回の講義について復習する。 第 9 回・16 回 講義内容に関する試験と討論。</p>
成績評価の方法と基準	レポート、試験、平常点、討論時のプレゼンテーションを総合して 60 点以上を合格とする。その場合、課題の理解程度と問題解決能力を評価する。	
開示する試験問題等	講義課題、レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、試験答案を希望者に開示。	
開示方法	試験答案の開示希望者は試験終了後 2 週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	食料と生活Ⅱ（食料資源の保護）	
担当教員（所属）	大島一里（農）、草場基章（農）、吉賀豊司（農）、徳田誠（農）	
講義形式	講義、演習、実習等	
講義概要	本講は、人類の生存と密接に関わる農作物の病害虫について、実際の被害などの例を取り上げ、農作物の被害やそれらの保護や防除に関する知識に関連した現代的な課題を探る。また将来期待される農作物の保護について紹介すると共に、病気に関わる植物ウイルスや糸状菌（菌類）などについて紹介後、害虫に関わる植物寄生性線虫や昆虫についても紹介する。なお、本講義はそれぞれを専門とする植物病理学者、線虫学者、昆虫学者が担当する。	
開講の意図	各種の病害虫などを農作物の保護の観点から知ること、食料に対する興味を抱かせ、食料生産に対する問題意識を啓発する。	
到達目標	各種の病害虫などの農作物の被害に関する知識を修得する。また、現在の食料生産に関する情報を収集して、その課題を説明し、独自の問題意識として将来の食料生産のあり方を展望できる。	
履修上の注意	欠席・遅刻・早退・授業中の私語は減点の対象とする。欠席と遅刻の合計が4回以上の場合単位を出さない。【農学部以外の学生を対象とする。】	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 植物保護全般とウイルス病の紹介 2. 植物病原ウイルスの紹介 3. ウイルス多様性とウイルス病防除 4. 植物病原糸状菌の紹介 5. 糸状菌の起こす病気と防除1 6. 糸状菌の起こす病気と防除2 7. 糸状菌の起こす病気と防除3 8. 植物寄生性線虫による被害1 9. 植物寄生性線虫による被害2 10. 植物寄生性線虫への対策 11. 農薬の利用と安全性 12. 昆虫による被害1 13. 昆虫による被害2 14. 植物検疫と侵入害虫 15. 生物多様性と食料資源の保護 	<p>第1～15回 各回の講義について復習する。</p> <p>第16回 講義内容に関する試験と討論。</p>
成績評価の方法と基準	レポート、試験、平常点、討論時のプレゼンテーション等を総合して60点以上を合格とする。その場合、課題の理解程度と問題解決能力を評価する。	
開示する試験問題等	講義課題、レポートの出題意図と評価基準、討論の評価基準、試験答案を希望者に開示。	
開示方法	試験答案の開示希望者は試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	食料と生活Ⅲ（食料資源の開発）	
担当教員（所属）	和田康彦（農）、穴井豊昭（農）、一色司朗（農）、山中賢一（農）	
講義形式	講義、演習、実習等	
講義概要	本講は、有用作物や家畜家禽の新品種作出や育種改良の手法と育種改良の現状、および家畜の増殖手法について紹介する。なお、本講義は基本的に和田、穴井、一色、山中の順に担当する。	
開講の意図	農作物や家畜家禽の育種改良や家畜の増殖手法に対する興味を抱かせ、食料資源の開発に関する問題意識を啓発する。	
到達目標	農作物や家畜家禽の新品種作出や育種改良の手法と育種改良の現状、および家畜の増殖手法についての知識を習得する。また、現在の食料生産に関する情報を収集して、その課題を説明し、独自の問題意識として将来の食料生産のあり方を展望できる。	
履修上の注意	欠席・遅刻・早退・授業中の私語は減点の対象とする。 【農学部以外の学生を対象とする】	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 家畜化の歴史 2. 多様な家畜・家禽の品種 3. 佐賀県における和牛改良の実際 4. 烏骨鶏の改良をめざして 5. 作物の栽培化と馴化 6. 遺伝的多様性とは 7. 遺伝的改良の原理 8. 作物育種の現状 9. 野菜とは。学名， 蔬菜分類， 起源地 10. 野菜の紹介・アブラナ科 11. 野菜の紹介・ウリ科、ユリ科 12. 野菜の紹介・ナス科 13. 家畜人工授精技術 14. 体外生産胚の利用とその課題 15. 家畜繁殖技術の応用 	第1～15回 各回の講義について復習する。 第16回 講義内容に関する試験と討論。
成績評価の方法と基準	レポート、試験、平常点、討論時のプレゼンテーションを総合し、60点以上を合格とする。その場合、課題の理解程度と問題解決能力を評価する。	
開示する試験問題等	講義課題、レポートの出題意図と評価基準、討論時のプレゼンテーションの評価基準、試験答案を希望者に開示。	
開示方法	試験答案の開示希望者は試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	食料と生活Ⅳ（食料と健康）	
担当教員（所属）	光富勝（農）、石丸幹二（農）、亀井勇統（農）	
講義形式	講義、演習、実習等	
講義概要	日常摂取している食料・食品について、その開発の歴史や製造方法、機能性などについて学ぶ。	
開講の意図	日常摂取している食料・食品について、その開発の歴史や製造方法、機能性などについて学び、食と健康に対する興味を高め、食について科学的に評価できる力を養う。	
到達目標	食と健康に関する知識を習得し、科学的根拠に基づいて食品の機能を評価する力を身につける。また、現在の食と健康に関する情報を収集して、その課題を説明し、独自の問題意識として将来の食料と健康のあり方を展望できる。	
履修上の注意	欠席・遅刻・早退・授業中の私語は減点の対象とする。 【農学部以外の学生を対象とする】	
授業計画	<p>内容</p> <p>糖質と健康</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 糖質系甘味料 2. デンプンからつくられる甘味料 3. 低う蝕性甘味料 4. 機能性オリゴ糖 5. 食物繊維 <p>茶と健康</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 佐賀の茶文化 7. 茶の起源と野生茶 8. 発酵食品としての茶 9. 微生物発酵と茶成分 10. 新しい茶製品と健康効果 <p>海産物の機能性</p> <ol style="list-style-type: none"> 11. 食品としての海産物 12. 海産物の特性 13. 海産物の機能性 14. 機能性試験の方法 15. 機能性物質の開発 	<p>授業時間外の学習</p> <p>第1～15回 各回の講義について復習する。</p> <p>第16回 授業内容に関するレポートと討論。</p>
成績評価の方法と基準	レポート、平常点、討論時のプレゼンテーションの総合点数で60点以上を合格とする。その場合、課題の理解程度と問題解決能力を評価する。	
開示する試験問題等	講義課題、レポートの出題意図と討論時の評価基準を開示。	
開示方法	課題及びレポートの配点、及び採点のポイントの開示を希望する場合は、電子メール等で担当教員に申し込むこと。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	エレクトロニクスと生活 I (通信のしくみ)	
担当教員 (所属)	佐々木 伸一 (工学系研究科)	
講義形式	講義および演習 (予習, 復習をレポートとして課す)	
講義概要	情報通信の基礎知識に関する講義, ならびに電話ネットワーク, インターネット, 携帯電話, 衛星通信等に関する講義をテキストを用いて実施する.	
開講の意図	情報通信に関する基礎的な素養を修得できることを目的として授業を構成し, 課題抽出力および持続的な学習力を養い社会への参画力向上の一助とする.	
到達目標	予習課題を通し問題点 (重要点) の抽出を行え, 自分なりの方法で調べる習慣を身につける. さらに, 現在までの通信の基本と仕組みを理解し, 今なお進展しつつある ICT 社会形成の担い手となるための, 知識と姿勢を身につける.	
履修上の注意	なし	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p><1 週></p> <p>[1] 通信の歴史と形態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通信とその発展 ・通信の構成について <p>[2] データ伝搬の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データはどのように伝送されるか ・ケーブルについて <p><2 週></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アナログとデジタル ・伝送と中継 ・電気/光変換 <p>[3] 交換方法と通信プロトコルについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・回線交換とパケット交換 ・パケット通信について <p><3 週></p> <ul style="list-style-type: none"> ・通信プロトコル (OSI 参照モデル, TCP/IP) <p><4 週></p> <p>[4] 電話と電話網サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電話機の仕組みと伝送経路 ・多重化による電話伝送 ・電話回線と ISDN <p><5 週></p> <p>[5] ブロードバンド通信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有線/無線ブロードバンド <p><6 週></p> <p>[6] 無線通信の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電波の伝わり方 ・情報と搬送波としての電波 ・電波の周波数 <p><7 週></p> <ul style="list-style-type: none"> ・無線通信規格例 ・モバイル対応の無線通信 <p><8 週></p> <p>[7] 携帯電話の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネットワーク構成について ・携帯電話がつながる仕組み <p><9 週></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 3 世代携帯電話について ・携帯電話と PHS の違い 	毎週, 講義予定範囲の予習と, 講義範囲の復習レポートを課す

	<ul style="list-style-type: none"> ・ローミングについて <10 週> [8] LAN の仕組み ・ LAN とは ・イーサネットの信号伝送の仕組み ・伝送路へのアクセス方式 (CSMA/CD) ・MAC アドレスとは <11 週> ・ LAN に必要な機器 ・有線 LAN, 無線 LAN [9] インターネットの仕組み ・インターネットのネットワーク構造 <12 週> ・ IP アドレスとドメイン名 ・ルーティングについて ・インターネットアプリケーション例 <13 週> [10] 衛星通信について ・衛星通信とは ・色々な通信衛星 ・衛星通信の利用 <14 週> [11] IP 電話について ・ IP 電話とは ・ IP 電話サービスとインターネット電話の違い ・ IP 電話を支える VoIP 技術 <15 週> [12] ユビキタス社会における通信の現状 ・ ALL-IP 化へ ・次世代ネットワーク 	
成績評価の方法と基準	評価方法： 定期試験 70%，課題演習等 30% 評価基準： 60 点	
開示する試験問題等	試験の解答例および答案	
開示方法	希望者に開示	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	エレクトロニクスと生活 II (生体に学ぶ情報処理入門)
担当教員 (所属)	和久屋 寛 (工学系研究科)
講義形式	<p>基本的に座学中心で進めていくが、適宜、様々な事項に関する調査と報告の時間枠を設けて、主体的な取り組みを織り交ぜていく予定である。</p> <p>また毎回の授業終了前 (10~15 分程度) に、当日の授業内容に関する簡単なレポート課題を出す。時間内の提出ならびに適切な解答をもって「出席」とみなす。</p> <p>またこれとは別に、授業内容の区切りを勘案しながら、3~4 回に 1 度の頻度でレポート課題 (宿題) を出していく。</p>
講義概要	<p>本講義では、生体情報処理、その応用技術、そして関連する最近の話題について取り上げる。それぞれの内容は以下のとおりである。</p> <p>1) 生体情報処理：生体の仕組み (感覚系・神経系・運動系)、脳の情報処理など</p>

	<p>2) 応用技術：ニューラルネットワーク、ファジィ、進化計算など</p> <p>3) 関連する最近の話題</p>	
開講の意図	<p>我々、人間をはじめとする生物の身体は、微弱な電気信号によって制御されている。例えば、脳が活動するときに脳細胞が発する電気信号を頭皮上から記録したものが「脳波」であり、手足を動かすときに収縮する筋細胞が発する電気信号を記録したものが「筋電図」である。また、そこで行われている情報処理には、現在のコンピュータが行っているものとは根本的に異なる様式を含んでおり、それらのエッセンスを学び、工学的なシステムに取り込むことができれば、これまでにない新しいものを作り上げることも可能と考えられる。</p> <p>また近年は、直接、この電気信号をコンピュータへ取り込むことで、実際に手で触れることなく、人間の意思だけで様々な機器を操作する技術「ブレイン・マシン・インターフェース (BMI)」が注目されている。このように最近の科学技術の進歩には目覚ましいものがあり、従来はサイエンス・フィクション (SF) の産物でしかないと考えられていたものが、次第に現実のものになりつつある。これに伴って、「できるからやる」というのではなく、「やってよいのか」という倫理上の問題も提起されつつある。</p> <p>本講義では、このような時代を背景に、現在、注目されつつある生体情報処理工学について取り上げる。また、これに関連する最近の話題についても紹介していきたいと考えている。</p>	
到達目標	<p>1) 生体情報処理工学の役割について理解し、その概要を説明できる。</p> <p>2) 生物と機械の類似点や相違点を列挙できる。</p> <p>3) 自分の専門分野（所属している学部・学科で修得する学問分野など）との“接点”について具体例を挙げて説明できる。</p> <p>4) 与えられた課題について、必要な情報を収集し、それらを整理して報告できる。</p>	
履修上の注意	<p>ここに記されていない事項や変更点等については、授業時間あるいは電子メールなどにより周知するので、各自、十分注意すること。</p> <p>【重要】電子メールについては、LiveCampus を利用して配信する予定なので、各自で登録しておくこと。</p> <p>具体的には、LiveCampus にログインした後、「学生情報関連」のカテゴリにある「学籍情報の更新」をクリックし、「メールアドレス 1」の項目に自分のメールアドレスを入力する。</p> <p>なお、上の設定に自信がない場合は、情報処理科目担当教員など関連知識を有している人たちに助力を求めることを勧める。</p>	
授業計画	<p>内容</p> <p>基本的に、以下の内容について行う予定であるが、やむを得ない理由などにより変更することもある。</p> <p>1 週目 ガイダンス</p> <p>2 週目 生体情報処理工学の位置付け</p> <p>3～4 週目 生体の仕組み</p> <p>5～7 週目 脳の仕組み</p> <p>8 週目 調査報告会 (1)</p>	<p>授業時間外の学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シラバスの事前理解 (熟読) ・報告会へ向けての資料収集 ・報告会の発表準備 ・レポート課題【想定される例】 －脳死と植物状態

	9～11週目 脳型計算機の基礎 12週目 ファジィの基礎 13週目 進化計算の基礎 14週目 調査報告会(2) 15週目 関連する最近の話題 16週目 定期試験	-脳機能障害としての水俣病 -サイボーグ医療 -ロボット工学三原則 -メンデルの法則
成績評価の方法と基準	授業への出席状況とレポート課題の提出状況(50%)、定期試験の成績(50%)を中心に、それぞれが一定の基準に達した場合に、総合的に判断する。なお、定期試験を受け、2/3以上の出席がある者だけを成績評価の対象とする。	
開示する試験問題等	定期試験等の問題、解答例および配点。	
開示方法	閲覧を希望する者(履修登録者に限る)は、開講学期の末日までに電子メールで授業担当教員・和久屋(wakuya@cc.saga-u.ac.jp)へ申し込むこと。ただし、セキュリティの観点から、教育用システム(*****@edu.cc.saga-u.ac.jp)より発信された電子メールのみを受け付ける。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	エレクトロニクスと生活 III (生活の中の電波とレーダーの基礎)	
担当教員(所属)	田中 高行(工学系研究科)	
講義形式	講義・演習	
講義概要	電波と電波を用いたアプリケーションを理解する上で必要な基礎知識(波動、電波伝搬、電気回路・電子回路など)、およびレーダーの原理について学び、電波の応用(特にレーダー)を考える上での基礎を養う。	
開講の意図	レーダーの原理を理解する上で必要な基礎知識を修得し、レーダーの基礎を学ぶ。さらに、レーダーの歴史についても学ぶことにより、現代社会におけるレーダーの役割を理解し、よりよい社会の実現を考える。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・レーダーの原理を理解する上で最低限必要な知識(波動、電波伝搬、電気回路・電子回路に関するもの)を身につけ、文章と数式で表現できる。 ・実用化されているレーダーシステムの基本原理を説明できる。 ・レーダーの社会に対する役割を理解し、よりよい社会の実現を考え、提案することができる。 	
履修上の注意	電気回路および電磁気学の基礎的な知識を有していることが望ましい。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1週目 概要説明 2週目 電波・電磁界 3週目 同上 4週目 電波の利用(携帯電話(セル方式)、GPS、電波の用途) 5週目 同上	1週目 講義の全体構成(講義の流れ)を理解し、次回の内容(電波・電磁界)について予習しておく。 2週目 次回の内容(電波・電磁界)について予習しておく。 3週目 次回の内容(電波の利用)について予習しておく。 4週目 次回の内容(電波の利用)について予習しておく。 5週目 次回の内容(アンテナ)

	<p>6 週目 アンテナについて (アンテナの特性、各種アンテナ)</p> <p>7 週目 同上</p> <p>8 週目 中間試験</p> <p>9 週目 電波の伝わり方</p> <p>10 週目 同上</p> <p>11 週目 レーダーについて</p> <p>12 週目 同上</p> <p>13 週目 各種レーダー</p> <p>14 週目 同上</p> <p>15 週目 同上</p> <p>16 週目 最終レポート (グループ学習)。</p>	<p>について予習しておく。</p> <p>6 週目 次回の内容 (アンテナ) について予習しておく。</p> <p>7 週目 これまでの内容を整理し、中間試験に備える。</p> <p>8 週目 次回の内容 (電波の伝わり方) について予習しておく。</p> <p>9 週目 次回の内容 (電波の伝わり方) について予習しておく。</p> <p>10 週目 次回の内容 (レーダー) について予習しておく。</p> <p>11 週目 次回の内容 (レーダー) について予習しておく。</p> <p>12 週目 次回の内容 (各種レーダー) について予習しておく。</p> <p>13 週目 次回の内容 (各種レーダー) について予習しておく。</p> <p>14 週目 次回の内容 (各種レーダー) について予習しておく。</p> <p>15 週目 これまでの内容を整理する。</p>
成績評価の方法と基準	<p>毎回 (初回、中間試験日、最終日以外) の小テストの結果 (40%)、中間試験 (30%)、最終レポート (30%) により決定する。</p> <p>小テストは毎回の講義の理解度の確認。中間試験はレーダーの原理を理解する上で最低限必要な知識 (波動、電波伝搬、電気回路・電子回路に関するもの) を身につけているかどうかの確認。最終レポートはグループ学習とし、現代社会におけるレーダーの役割を理解し、よりよい社会の実現を考えるために実施する。また、実用化されているレーダーシステムの基本原理の理解の確認も行う。</p> <p>なお、2/3以上の出席者のみを成績評価対象とする。</p>	
開示する試験問題等	小テストの結果、中間試験、最終レポート。	
開示方法	<ul style="list-style-type: none"> ・小テストの正解については、講義中に説明する。 ・中間試験については、採点后、解答例を配布する。 ・最終レポートについては、採点基準を前もって提示する。 ・採点結果については、希望者は担当者に直接質問すること。 ・最終成績については、教務システムにおいて確認する。直接問い合わせてもよい。 	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	エレクトロニクスと生活 IV (データ解析)
担当教員 (所属)	伊藤 秀昭 (工学系研究科)
講義形式	講義・演習
講義概要	統計的データ解析の基本的な手法を修得するとともに、その手法を実データに適用して科学技術と社会との関係を考察する。また、グループによる発表

	や他者との討論によって協調性や多面的な考え方を身につける。	
開講の意図	統計的データ解析は、実験系のあらゆる分野で必要となる重要な概念であるため、この講義でその基本的な手法を身につけられるようにする。また、当インターフェースプログラム I~III で学んだテーマなどに関して実際にデータ解析を行うことによって、知識の定着を図るとともに科学技術と社会との関係を考察する。さらに、グループによる調査・発表や、他者との討論によって、協調性や多面的な考え方を身につける。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・統計的データ解析手法を使うことができる。 ・グループで協力して調査および発表（プレゼンテーション）ができる。 ・科学技術と社会との関係について、多面的な視点から考察・討論できる。 	
履修上の注意	なし	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>（履修者数により変更する場合がある）</p> <p>1～3週目 統計的データ解析の基礎</p> <p>4～15週目 3名ずつの班に分かれて、実データを調査しデータ解析を行う。毎週5班が発表し、その内容について全員で討論する。</p> <p>16週目 定期試験</p>	<p>1～3週目 講義内容の予習・復習</p> <p>4～15週目 予習（実データの調査・解析・プレゼンテーションの準備）、復習（討論内容の総括）</p>
成績評価の方法と基準	発表(40%)、討論(20%)、定期試験(40%)の100点満点で評価し、60点以上を合格とする。2/3以上の出席率の者だけを成績評価の対象とする。	
開示する試験問題等	定期試験の問題、解答例および配点。	
開示方法	web上にて開示する（URLは講義中に示す）。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	情報技術者キャリアデザインI (情報技術者キャリアデザイン入門)	
担当教員(所属)	掛下哲郎(工学系研究科)、中山功一(工学系研究科 知能情報システム学専攻)	
講義形式	講義、演習	
講義概要	情報技術者として身につけておくべき基礎的知識を講義するとともに、IT パスポート試験に合格するレベルにスキルアップするための演習を行う。	
開講の意図	情報技術者=SE・プログラマとの誤解があるが、情報系の職業はそれよりもはるかに多様である。また、情報技術は社会的ニーズや企業活動との関連も強い。本科目では、こうした背景を踏まえ、情報技術者としてのキャリアを設計する上での導入を行う。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報を収集し、その適正を判断でき、適切に活用・管理できる。(学士力 1(3)) ・ 情報分野の様々な職種を理解し、情報技術を活用する様々な立場で物事を考えることができる。(学士力 3(1)) ・ 自らの社会的役割について主体的に考える態度を身に付ける。(学士力 3(2)) ・ IT パスポート試験に合格できるレベルの知識を身に付ける。(学士力 3(1), 3(2), 3(3)) 	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・ 無線 LAN 接続可能なノート PC を持参すること。 ・ PC の基本的な利用法に習熟していること。 	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1週 導入, IT の社会的インパクト, 情報系の人材育成 第2週 情報処理技術者試験と IT スキル標準 第3~5週 情報系の様々な職種 マーケティング, セールス, コンサルティング, プロジェクトマネジメント, システム設計, Web 開発, プログラミング, テスト, 運用・保守, 企業内の IT 企画・開発・運用, その他の職種・仕事 第6週 情報系の仕事に関する調査 (PC 演習) 第7週 様々な IT 資格 技術士, IT コーディネータ, PMP, CPD (継続研鑽), 技術者倫理</p> <p>以下の各週の授業は座学および PC 演習により構成する。</p> <p>第8~10週 マネジメント SLCP と調達, システム開発, テストと運用・保守, システム開発技法, ユーザインタフェース, プロジェクトマネジメント, 工程管理, サービスマネジメント, システム監査</p> <p>第11~13週 企業活動と法務 企業会計, 知的財産権, 関連法規と標準化, データ整理技法, QC 七つ道具とグラフ</p> <p>第14~15週 経営戦略とシステム戦略 企業活動と組織, 全社戦略と事業戦略, 機能別戦略, ビジネス戦略と経営管理システム, 情報システム戦略, ビジネスインダストリ</p>	<p>知能情報システム学科で運営している情報処理技術者試験自習システム「IT パスポート試験」より、授業の進行に合わせて適宜演習問題を与える。</p>

成績評価の方法と基準	演習課題および情報処理技術者試験自習システム「IT パスポート試験」の小テスト結果に基づいて評価する。ただし、欠席が多い学生には単位を与えない。
開示する試験問題等	情報処理技術者試験自習システムの小テスト問題の問題および正解を開示する。
開示方法	情報処理技術者試験自習システムはWeb上で運営されており、佐賀大学の全ての学生・教職員に公開している。情報処理技術者試験自習システムの小テストを解いた後、システムが正解を表示する。

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	情報技術者キャリアデザインⅡ（テクニカル・コミュニケーション）	
担当教員（所属）	皆本晃弥（工学系研究科）、岡崎泰久（工学系研究科）	
講義形式	講義、演習	
講義概要	情報技術者として身につけておくべき論理的思考能力、プレゼンテーション能力を講義や演習を通じて養う。	
開講の意図	論理的思考による問題解決や、知識や情報を分かりやすく伝えるための技術は、情報技術者としての基本的な要件の一つである。 本授業では、論理的思考能力（ロジカルシンキング）・問題解決・コミュニケーション技術の学習を行うことにより、パーソナルスキルの向上を図る。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム活動を通じた問題解決の重要性を理解し、チーム活動を通じて、特定の問題に対する基礎的な解決を実践できる。（学士力 2(3)） ・パーソナルスキルの必要性を理解する。（学士力 2(3),3(1)） ・論理思考力による問題解決の基本的知識を習得する。（学士力 1(3),2(1)） 	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・ 無線 LAN 接続可能なノート PC を持参すること。 ・ PC の基本的な PC の利用法について習熟していること。 	
授業計画	<p>内容</p> <p>第1回：テーマ：ロジカルシンキング概要 第2回：ロジカルシンキングの基本となる思考 第3回：Whatツリーの概要と活用方法 第4回：Whyツリーの概要と活用方法 第5回：Howツリーの概要と活用方法 第6回：ピラミッドストラクチャーの概要と活用方法 第7回：マトリクスの概要と活用方法 第8回：プロセスの概要と活用方法 第9回：問題解決（問題発見） 第10回：問題解決（原因分析） 第11回：問題解決（解決手段検討） 第12回：問題解決の実践（総合演習） 第13回：コミュニケーション（説明/説得） 第14回：コミュニケーション（文書作成） 第15回：コミュニケーションの実践（総合演習）</p>	<p>授業時間外の学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 毎回、所定の範囲の予習を行うこと。 ・ 講義ノートを作成し、毎回復習を行うこと。 ・ 所定の課題を解くこと。
成績評価の方法と基準	<p>下記の項目により評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業における個人ワーク演習課題とチーム演習課題、およびテスト（60%） ・ 授業終了後の受講レポート課題（40%） 	
開示する試験問題等	個人ワーク演習課題、チーム演習課題、テスト問題および解答例、受講レポート課題。採点結果。	
開示方法	個人ワーク演習課題、チーム演習課題、テスト問題および解答例、受講レポート課題は、掲示により開示する。 採点結果については本人からの請求により本人に開示する。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	情報技術者キャリアデザイン III (情報技術者キャリアデザイン実践)	
担当教員 (所属)	奥村浩 (工学系研究科)、大月美佳 (工学系研究科)	
講義形式	講義、演習	
講義概要	情報技術者として身につけておくべき実践的知識を講義するとともに、基本情報技術者試験に合格するレベルにスキルアップするための演習を行う。	
開講の意図	基本情報技術者試験は、情報技術者として社会に出る人材にとっての必須知識およびスキルを試験範囲としている。このことを踏まえ、本科目では基本情報技術者試験に合格できるレベルの知識およびスキルを教育する。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 基本情報技術者試験に合格できるレベルの知識およびスキルを身に付ける。(学士力 3(1), 3(2), 3(3)) 情報技術に関する学習を自主的・自律的に続けることができる。(学士力 3(2)) 	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> 無線 LAN 接続可能なノート PC を持参すること。 PC の基本的な利用法に習熟していること。 情報技術者キャリアデザイン入門の単位を履修していること。 	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>各週の授業は座学および PC 演習により構成する。</p> <p>第 1～2 週 情報の基礎理論 情報量の単位、基数変換、補数表現と固定小数点表示、浮動小数点表示、誤差、シフト演算、オートマトン、文字コード、論理演算と論理回路、半加算器と全加算器</p> <p>第 3～4 週 データ構造とアルゴリズム アルゴリズム、配列、リスト構造、キューとスタック、木構造、データの整列、データの探索</p> <p>第 5 週 ハードウェア コンピュータの 5 大装置、CPU、アドレス指定、CPU の高速化、記憶素子、磁気ディスク装置、補助記憶装置、入力装置、出力装置、入出力インターフェース</p> <p>第 6～7 週 ソフトウェア ソフトウェアと OSS、ジョブ管理、タスク管理、記憶管理、ファイル管理、プログラムの性質、プログラム言語、マルチメディアと標準化</p> <p>第 8～9 週 システムの構成と方式 システムの処理形態、クライアントサーバシステム、高信頼化システム、RAID と高信頼化技術、システムの性能評価、稼働率</p> <p>第 10～11 週 システム開発技術と監査 システム企画、業務プロセスとモデル化、システム開発手法、画面設計とデータ設計、コード設計と入力チェック、</p>	<p>知能情報システム学科で運営している情報処理技術者試験自習システム「基本情報技術者試験」より、授業の進行に合わせて適宜演習問題を与える。</p>

	<p>モジュール分割, プログラミング, オブジェクト指向, テスト手法, レビュー, IT サービスマネジメント, プロジェクト管理, 工程管理, システム監査</p> <p>第12~13週 ネットワーク技術 電気通信サービス, OSI 参照モデルと TCP/IP, IP アドレス, クラスとサブネット分割, LAN, LAN 間接続装置, 同期方式・誤り制御と伝送計算</p> <p>第14週 データベース技術 データベース, 関係データベース, 正規化, バックアップとデータベース復旧, 排他制御と2相コミット, SQL</p> <p>第15週 情報セキュリティ 情報セキュリティ, コンピュータウィルス, 暗号化方式, ネットワークセキュリティ</p>	
成績評価の方法と基準	演習課題および情報処理技術者試験自習システム「IT パスポート試験」の小テスト結果に基づいて評価する。ただし、欠席が多い学生には単位を与えない。	
開示する試験問題等	情報処理技術者試験自習システムの小テスト問題および正解を開示する。	
開示方法	情報処理技術者試験自習システムはWeb上で運営されており、佐賀大学の全ての学生・教職員に公開している。情報処理技術者試験自習システムの小テストを解いた後、システムが正解を表示する。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	情報技術者キャリアデザインⅣ（情報技術コロキウム）	
担当教員（所属）	奥村（工学系研究科）、中山功一（知能）（工学系研究科）ほか学科教員全員	
講義形式	講義、演習	
講義概要	ICT 分野における技術／研究開発は日々進歩してあり、数年で大きな変革が起きることも珍しくない。この授業では、情報技術分野の最先端の内容を、ゼミ形式で学ぶとともに、グループワークを行う。	
開講の意図	日々進歩している ICT 分野における技術／研究開発の動向を、本学科教員を初め、他の研究機関、官公庁や ICT 関連企業の方を招いて、いろいろな視点から学ぶとともに、学生自らの将来の情報技術者像形成の一助とする。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT 分野における技術／研究開発の動向に関する知識を有する。（学士力 2(1)、3(2)） ・ 情報技術者、社会人として不可欠なリーダーシップや他者との協調の重要性を理解している。（学士力 2(3)） ・ 情報技術者としての社会における役割を理解している。（学士力 3(1)） 	
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・ ノートと筆記用具を持参し、毎回授業のメモをとること 	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会における情報技術者(1)（就職担当教員） 2. ICT 技術／研究トピックス(1) 3. ICT 技術／研究トピックス(2) 4. ICT 技術／研究トピックス(3) 5. ICT 技術／研究トピックス(4) 6. ICT 技術／研究トピックス(5) 7. ICT 技術／研究トピックス(6) 8. ICT 技術／研究トピックス(7) 9. ICT 技術／研究トピックス(8) 10. ICT 技術／研究トピックス(9) 11. ICT 技術／研究トピックス(10) 12. ICT 技術／研究トピックス(11) 13. ICT 技術／研究トピックス(12) 14. グループ発表(1) 15. グループ発表(2) 	<p>（授業前の学習）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館の書籍、インターネット、新聞、雑誌等から ICT 分野の技術／研究開発の動向を調査する <p>（授業後の学習）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業中のメモをもとに各回で出題されたレポートを作成する
成績評価の方法と基準	<ul style="list-style-type: none"> ・ レポート、グループ発表を基に総合的に評価する。ただし、無断欠席は減点対象とする ・ 総合点で 60 点以上を合格とする。 	
開示する試験問題等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 出題したレポートの内容 	
開示方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 掲示板による掲示およびインターネット上で公開 	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	現代社会と医療Ⅰ(医療科学史)	
担当教員(所属)	青木 歳幸(地域学歴史文化)	
講義形式	江戸時代の医療に関する講義のほか、実地見学、レポート作成を通して、現代の医療の課題を認識し解決能力を養う。	
講義概要	江戸時代の医学のあゆみのなかで、医師の人体を見る目がどのように発達してきたか、医師がどのように医療を行っていたのか等の講義をもとに、受講生が、尊厳死や国民健康保険制度などの現代社会と医療の問題を考える。	
開講の意図	我が国医学の発達史を知るとともに、江戸時代の地域医療と医師の活動から、現代の医療の礎がそこにあり、現代の医学が学ぶものは何かを、自ら主体的につかみとることが、開講意図である。	
到達目標	江戸時代の医学の発達、医療環境の変化、科学的な人体を見る目の発達、幕末・明治期の医療の近代化等の医学の発達史を把握するとともに、受講者が江戸時代の医療から現代社会における医療問題へ多様な側面から主体的にとりくむ。	
履修上の注意	出席をとり、評価に加える。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>授業は概ね、つぎの2パターンである。</p> <p>①パワーポイント、資料による講義と質問、小テスト</p> <p>②医学レポート提出、例 漢方医学と現代、尊厳死について、江戸時代と国民健康保険制度、看護制度の成立など、江戸時代から明治にかけての医学を学び、現代医療に関するテーマを見だし、レポートを提出する。</p> <p>③学外授業として、中富くすり記念博物館見学をする。</p> <p>第1時限 本時のねらい、入門</p> <p>第2時限～第5時限 江戸前期・中期の医師と医学・・・日本漢方医学の成立と展開</p> <p>第6時限～第9時限 江戸中期の医学・・・実証的精神の発達、くすり博物館見学</p> <p>第10時限～第15時限 西洋医学の発達と近代医学への転換</p>	<p>1. 江戸時代から明治の医学を学び、現代社会と医療に関するテーマを自ら設定し、時間外にレポートを作成し、最終日に提出する。</p> <p>2. 中富くすり博物館見学を5月か6月の土日に行い、歴史と現代の医療がどう結びついているか実地に学習する。</p>
成績評価の方法と基準	定期テスト・小テストの結果、見学レポート、医学レポートの評価と出席点等で総合評価する。	
開示する試験問題等	テストの試験問題と解答例	
開示方法	試験後一週間以内に受講者本人の申し出により、オフィスアワーを中心に研究室(本庄)で本人に行う。	

授業科目名	現代社会と医療Ⅱ(医療人キャリアデザイン)	
担当教員(所属)	吉田 和代(医学部)	
講義形式	講義概要参照のこと	
講義概要	さまざまな医療領域に携わる医師・研究者・医学教育者・コメディカルスタッフなどがオムニバス形式で1コマずつ各専門分野の概要、なぜ自分が進路決定にいたったか、現在のとりくみ、将来の展望、各分野の魅力などを概説し、学生との質疑応答により理解を深めていく。	
開講の意図	医療人として活躍する職域・専門分野は多様に分化している。各分野で活躍する先輩たちの実体験に基づく講義を通して、各職域・専門分野の理解を深め、チーム医療・全人的医療における各分野の相互の役割や医療の社会性を認識するとともに、各自が目指す方向性を定めるための参考とする。	
到達目標	様々な職域・専門分野の活動・魅力を理解し、チーム医療・全人的医療におけるそれぞれの役割・指名を概説できる。各自が目指す方向性を熟考し、その目標に向けた学習計画を立てることができる。	
履修上の注意	講義に出席・聴講に集中し、積極的に質疑応答に参加すること。講義内容から自分なりに何かを感じ、得ることが重要である。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	テーマについては各分野の専門家によるオムニバス方式のため、順次予定が決まり次第、更新する。 1)「これから学ぶこと～医療人のキャリアデザインとは～」(吉田和代) 2)「今思い描く自分の未来像は？」(吉田和代)	医学医療に関する資料を読む。
成績評価の方法と基準	【成績評価の方法】毎回の講義終了時にミニレポートによる小テストを課し、その評価点と講義出席点とを総合して評価する。 【評価基準】3/4以上(12回以上)の出席を必須条件とし、出席点と小テスト評価点の総計が60%以上を合格として秀・優・良・可・不可の5段階評価を行う。再試験は行わない。 なお、出席については、30分以上の遅刻は欠席として扱い、30分以内の遅刻は2回を1回の欠席相当とみなす。	
開示する試験問題等	なし	
開示方法	成績については規定のどおり	

授業科目名	現代社会と医療Ⅲ（公害薬害問題と人権）	
担当教員（所属）	市場 正良(医学部)	
講義形式	講義および調査, グループ討論など	
講義概要	公害薬害問題と人権を, 水俣病を事例として考えていく。	
開講の意図	水俣病を例として公害薬害問題と人権を考える。	
到達目標	水俣病における人権問題を説明できる。	
履修上の注意		
授業計画	<p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 本コースの解説・グループ分けなど 2 水俣病とその背景① 水俣病とは何か？ 3 水俣病とその背景① 4 水俣病とその背景② 水俣病は何故広がったのか？ 5 水俣病とその背景② 6 水俣病と医学① 原因はいかにして解明されたのか？ 7 水俣病と医学① 8 水俣病と医学② 胎児性水俣病とは何か？ 9 水俣病と医学② 10 現代社会と水俣病① 水俣病の訴訟はどのように進んだか？ 11 現代社会と水俣病① 12 現代社会と水俣病② 水俣病を解決するには何が必要か？ 13 現代社会と水俣病② 14 総括 15 総括 	<p>授業時間外の学習</p> <p>公害に関する資料を読む。</p>
成績評価の方法と基準	出席とレポート	
開示する試験問題等	なし	
開示方法		

授業科目名	現代社会と医療Ⅳ（環境と健康）	
担当教員（所属）	寺東 宏明(総合分析実験セン)	
講義形式	講義（演習・実習を含む）	
講義概要	人間は好むと好まざるとに関わらず、自身を取り巻く環境と関連しながら生きている。本抗議ではグローバルな環境問題から労働衛生に至るまであらゆるレベルの環境問題を取り扱い、人間と環境との関係について論じていく。特に鍋島キャンパスでの開講ということで、衛生学、環境毒性学等、医学的な側面をクローズアップし、環境と健康の関係についても考察していく。	
開講の意図	様々な環境問題を理解し、自身の専門に活かせるような実践的な知識を身につける。	
到達目標	自身の専門分野において、環境という観点から新しい問題提起ができるようになる。	
履修上の注意	本授業は「佐賀大学版環境教育プログラム」関連科目ではないので注意すること。同プログラムの単位には認定されない。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 環境科学概論 2 地球環境の概要 3 環境問題 1：環境破壊 4 環境問題 2：環境汚染 5 環境問題 3：エネルギー問題 6 環境毒性学 1：環境汚染物質 7 環境毒性学 2：化学物質の人体影響 8 環境毒性学 3：用量反応関係 9 放射線生物学 1：放射線と放射性物質 10 放射線生物学 2：環境放射線 11 放射線生物学 3：放射線生物影響 12 公衆衛生 13 労働安全衛生と作業環境管理 14 環境マネジメント 1：環境マネジメントシステム 15 環境マネジメント 1：佐賀大学の取組み	毎回、次回の講義内容を説明するので、予習をしておくこと。演習形態や実習形態の回については、事前・事後の情報収集やレポート作成、グループ学習等が必要である。
成績評価の方法と基準	期末試験および実習課題の合計点を 100 点とし、60 点以上を合格とする。	
開示する試験問題等	1.期末試験配点 2.実習課題配点	
開示方法	開示希望学生に対し、オフィスアワーに担当教員の居室（医学部臨床研究棟 2 階 2225 室）にて開示する。	

授業科目名	食と健康Ⅰ (食物科学)	
担当教員 (所属)	市場 正良(医学部), 関 清彦(農学部), 永尾 晃治(農学部), 牧山 嘉見(医学部)	
講義形式	講義と演習	
講義概要	3人の先生とともに、下記の3つのテーマについて学び、討論し、考察していく科目です。まず、食品化学をテーマに、日頃、口にしている食品に含まれる種々の成分について学習します。次に、栄養化学をテーマに、食品成分が、どのように代謝されていくのかについて学びます。最後に、臨床栄養学と題して、病気に対する食事を通してバランスの良い食事や栄養の取り方について学び、臨床栄養学の基礎と食育の大切さを学びます。現代の食の問題点を、科学的に評価できる力を養っていくための基礎となる講義、演習です。	
開講の意図	人類が生存していくために必須の食と健康の関わりに焦点を絞り、健康社会を構築していく上で必要な基礎的理解と食の在り方を考える力を養うことを目的として、食品科学、栄養学、薬、運動などの授業科目で構成する。現代の食の問題点を、科学的に評価できる力を養う。	
到達目標	食品を構成する成分、およびその代謝について理解し、現代の食の問題点を化学的に評価する力を身につける。また、その対応について自分の考えを基に討論する力を身につけ、レポートしてまとめ表現することができる。	
履修上の注意	カリキュラムの関係で、2年次以降この講義を取得するのが難しい場合があります。きちんと予習、復習し、単位を落とさないように勉強してください。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1-5回 食品化学とは (農学部 関担当) 開講意図 日常の食生活で摂取している食品そのものの本質を知る。 到達目標 食品および食品を構成する成分について理解する。 講義および演習。 講義で学んだ食品成分の物性変化を演習をとおして理解する。例) タンパク質の凝集：食品加工例 (豆腐) の演習。 例) 寒天、アルギン酸ナトリウムビーズの物性変化。※2013年度は、寒天、アルギン酸ビーズを用いた加工食品例を示し、実際にビーズを作成した。</p> <p>第6-10回 栄養化学 (農学部 永尾担当) 現代の栄養化学より、代謝、自分で食べたものの分析レポート</p> <p>第11回~15回 臨床栄養学 (医学部 牧山担当) 便秘予防(食物繊維とうんち)、食生活と体重変化 (食事時間と栄養バランス)、1人暮らしはメタボに注意 (外食とアルコール)、若さを保つには(たんぱく質と水分)、食物アレルギー</p>	<p>第1-5回 食と健康(機能性食品)について、考察する。</p> <p>第1回：レポート 「食と健康」と題し、食と健康に関し、自分がどのように考えているのか、まとめる機会をもつ。</p> <p>第3回：第1回のレポートで提出された意見(よい点、問題点等)に対して、根拠資料をふまえて自分の考えをレポートとしてまとめる。</p> <p>第5回：第3回レポートから、賛否両論ある課題を選び、自分と反対の意見を持つものに対して相手の考えを理解した上で、どのように自分の考えを説明するかをレポートとして表現する。</p> <p>第6回：栄養の概念と3大栄養素について、講義内容を整理・復習する。</p> <p>第7回：微量栄養素について、講義内容を整理・復習する。レポート作成の準備を始める。</p>

		<p>第8回：脂質栄養について、講義内容を整理・復習する。レポート作成を始める。</p> <p>第9回エネルギー代謝について、講義内容を整理・復習する。レポート作成を始める。</p> <p>第10回：食生活と生活習慣病について、講義内容を整理・復習する。レポートを提出する。</p> <p>第11回～15回 講義に際し、事前にテーマ毎に学生自身の生活および食環境に関するレポート課題を与える。この課題を基に講義を展開し、より深く学習し興味を持てるよう行う。</p>
<p>成績評価の方法と基準</p>	<p>成績評価の方法と基準： 3人の教員により開講されます。3人の成績の平均点を評価点とします。各担当教員の成績評価方法について、各講義の初回（1回目、6回目、11回目）に説明があります。</p> <p>講義中で出題される課題（90%）、履修状況（10%）で判定します。</p> <p>講義の第1回目、6回目および11回目に、講義の概要（講義の開講意図および到達目標、成績の評価方法）について説明します。</p> <p>第1-5回</p> <p>課題発見・解決能力：レポート等において、与えられた課題内容を理解し、また、そこに自らの問題関心から問題点を発見し、解決する方途を見出す能力がある。</p> <p>多様な文化と価値観を理解し共生に向かう力：討議において相手の意見を十分に聞き取ることができ、相手に配慮した発言ができる。種々の根拠を基に、自らの意見に修正が必要であると判断できる場合に、考えを修正することができる。</p> <p>秀：課題が十分に理解されており、問題及び解決法が極めて深く掘り下げられている。また、相手の意見の真意を理解し、自らの意見に十分反映し、相手に配慮した適切な発言ができる。</p> <p>優：課題が十分に理解されており、問題及び解決法が深く掘り下げられている。また、相手の意見を十分に聞き取り、自らの意見に反映し、相手に配慮した発言ができる。</p> <p>良：課題は十分に理解されており、問題及び解決法は常識的である。相手の意見は聞き取りうるが、自らの意見に反映させることができない。</p> <p>可：課題はある程度理解されているが、問題及び解決法については説得力を欠いている。相手の意見を聞き取ることができず、自らの意見に固執している。</p> <p>不可：課題の理解、問題及び解決法の発見が、ともに不十分である。第6-10回：自身の食事内容及び活動状況レポートを課題とするが、データ整理・データ考察・問題発見・解決法の検討などの質を評価する。</p> <p>※成績評価法について質問がある場合は、必ず講義中の評価方法説明の際に問い合わせること。</p> <p>※課題評価点の閲覧、評価のポイント開示を希望する者（履修登録した者に限る）は、メールにて連絡後、オフィスアワーの時間帯に担当教員の研究室まで来るこ</p>	

	と。
開示する試験問題等	課題、レポートの配点および採点のポイントを開示する。
開示方法	課題およびレポートの配点、および採点ポイントの閲覧を希望する者（履修登録した者に限る）は、講義終了後1週間以内に、メールにて連絡後、オフィスアワーの時間帯に担当教員の研究室まで来ること。

授業科目名	食と健康Ⅱ(医療人キャリアデザイン)	
担当教員(所属)	吉田 和代(医学部)	
講義形式	講義概要参照のこと	
講義概要	さまざまな医療領域に携わる医師・研究者・医学教育者・コメディカルスタッフなどがオムニバス形式で1コマずつ各専門分野の概要、なぜ自分が進路決定にいたったか、現在のとりくみ、将来の展望、各分野の魅力などを概説し、学生との質疑応答により理解を深めていく。	
開講の意図	医療人として活躍する職域・専門分野は多様に分化している。各分野で活躍する先輩たちの実体験に基づく講義を通して、各職域・専門分野の理解を深め、チーム医療・全人的医療における各分野の相互の役割や医療の社会性を認識するとともに、各自が目指す方向性を定めるための参考とする。	
到達目標	様々な職域・専門分野の活動・魅力を理解し、チーム医療・全人的医療におけるそれぞれの役割・指名を概説できる。 各自が目指す方向性を熟考し、その目標に向けた学習計画を立てることができる。	
履修上の注意	講義に出席・聴講に集中し、積極的に質疑応答に参加すること。講義内容から自分なりに何かを感じ、得ることが重要である。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	テーマについては各分野の専門家によるオムニバス方式のため、順次予定が決まり次第、更新する。 1)「これから学ぶこと～医療人のキャリアデザインとは～」(吉田和代) 2)「今思い描く自分の未来像は？」(吉田和代)	医学医療に関する資料を読む。
成績評価の方法と基準	【成績評価の方法】毎回の講義終了時にミニレポートによる小テストを課し、その評価点と講義出席点とを総合して評価する。 【評価基準】3/4以上(12回以上)の出席を必須条件とし、出席点と小テスト評価点の総計が60%以上を合格として秀・優・良・可・不可の5段階評価を行う。再試験は行わない。 なお、出席については、30分以上の遅刻は欠席として扱い、30分以内の遅刻は2回を1回の欠席相当とみなす。	
開示する試験問題等	なし	
開示方法	成績については規定のどおり	

授業科目名	食と健康Ⅲ（運動と栄養）	
担当教員（所属）	西田 裕一郎(医学部)	
講義形式		
講義概要	生涯にわたり健康を維持・増進するために、健康や身体活動・運動、栄養に関する正しい知識とエビデンスに基づいた情報を習得するとともに、学んだことを日常的に実践できるように座学とスポーツ実技の融合形式で授業を行う。大塚製薬株式会社様より協賛を得て、授業内容に関連する情報提供や飲料・栄養補助食品などの提供を受ける。	
開講の意図	健康づくり・生活習慣病予防のために、安全で効果的な運動と適切な栄養摂取について学び、実技を通して運動・スポーツの実践方法も習得する。	
到達目標	健康の維持・増進のための運動と栄養摂取、その実践方法について述べる事が出来、日常的に実践出来るようになる。	
履修上の注意	実技(医学部体育館またはグラウンドで実施)の時は、スポーツが出来る服装とシューズで参加する。汗ふきタオル、飲み物（お茶や水）を持参する。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 メタボリックシンドローム予防のための最適な運動とは？（スポーツ実技） 2 ステップ運動と筋力トレーニング（スポーツ実技） 3 大学生活の基本はバランスのよい食事と身体を動かすこと（座学） 4 バイオメカニクスを通してバドミントンを理解する（スポーツ実技） 5 健康に関する講義（座学） 6 運動の基礎編（スポーツ実技） 7 楽しくシェイプアップ（ボールゲーム）（スポーツ実技） 8 暑さ対策と運動（1）（スポーツ実技） 9 硬式テニスを体験しよう（スポーツ実技） 10 暑さ対策と運動（2）（座学） 11 体をまもるミクロの防衛軍（座学） 12 サプリメントの賢い摂り方（座学） 13 運動の応用編（スポーツ実技） 14 身体づくりのための栄養補給（座学） 15 講義と実技のまとめ（座学）	15 でこの科目を通して学んだこと・考えたことについて発表を行う。この発表のために学生は、授業内容の整理、発表原稿の作成、配布資料（またはパワーポイント）の作成を行う。
成績評価の方法と基準	レポートと出席状況で評価する。レポートの評価基準は、次のとおりである。秀（90-100）：健康づくり・生活習慣病予防のための適切な運動と食事摂取について十二分に理解し、理論または実践方法についての問題及び解決法が極めて深く掘り下げられている。優（80-89）：健康づくり・生活習慣病予防のための適切な運動と食事摂取について十分に理解し、理論または実践方法についての問題及び解決法が深く掘り下げられている。良（70-79）：健康づくり・生活習慣病予防のための適切な運動と食事摂取について十分に理解しているが、理論または実践方法についての問題及び解決法は傑出したものではない。可（60-69）：健康づくり・	

	<p>生活習慣病予防のための適切な運動と食事摂取についてある程度理解しているが、理論または実践方法についての問題及び解決法が説得力を欠いている。不可（～59）：健康づくり・生活習慣病予防のための適切な運動と食事摂取についての理解、理論または実践方法についての問題及び解決法の発見が、ともに不十分である。インターネット等からのコピーがあった場合も、不可（0点）とする。上述の基準でレポートを評価した後、出席率も加味する（欠席1回－6点、遅刻・見学－3点）。</p>
開示する試験問題等	レポート課題の出題意図
開示方法	開示を希望する者に個別に開示する。

授業科目名	食と健康Ⅳ (薬の話)	
担当教員 (所属)	藤戸 博(医学部)	
講義形式	主に医学部附属病院で、実際に診療にあたっている医師や薬剤師が分担して、それぞれの専門の立場から、パワーポイントや配布資料を使用して、わかりやすく講義する。	
講義概要	病気の治療には、お薬を用いる薬物療法が、行なわれることが多い。この授業では、将来、医療職を目指す学生に、病気や医薬品についての最先端の研究成果や臨床応用など最新の話も取り混ぜて、病気と医薬品の基礎と臨床応用について講義する。	
開講の意図	お薬についての基礎的なことを理解し、臨床で行われている患者さんに対する薬物療法について、興味を深めてもらう。	
到達目標	お薬の作用や有害作用について理解し、薬物療法の成果や注意すべきことを知る。	
履修上の注意	必要に応じて、その都度、プリントを配布する。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 薬っていったい何だろう? (薬剤部: 藤戸博 教授) 2. 薬を効果的に使うための基礎知識 (薬剤部: 藤戸博 教授) 3. 糖尿病の治療ってどうするの? (肝糖尿病内科: 安西慶三 教授) 4. 新規白血球薬の開発 (血液内科: 木村晋也 教授) 5. 高血圧・心臓病の治療 (循環器内科: 野出孝一 教授) 6. こどもの薬の話 (小児科: 濱崎雄平 教授) 7. 感染症医療に必要な薬の知識 (感染制御部: 曲渕裕樹 助教) 8. がんの痛み治療と緩和ケア (佐藤英俊 診療教授) 9. ジェンナーから新型インフルエンザまで (分子生命科学: 吉田裕樹 教授) 10. 皮膚病の治療 (皮膚科: 成澤寛 教授) 11. 精神機能に作用する薬物—向精神薬— (精神神経科: 門司晃 教授) 12. 命を蘇らせる薬 (麻酔蘇生科: 坂口嘉郎 教授) 13. 胃腸の病気の薬: くすりによる治療か? 生活指導か? (消化器内科: 岩切龍一 診療教授) 14. Fight or flight (薬理学: 寺本憲功 教授) 15. 慢性炎症性疾患に対する薬物療法の考え 	<p>講義が始まる前までに、普段、自分が飲んでいる薬、友達や家族が使用している薬があったら、添付文書を読んだり、インターネットで調べて、薬効や使用上の注意を調べておく。また、ドラッグストアに行き、どんな薬が販売されているのかを、調べておく。</p> <p>また、講義の日は、講義で学んだ講義内容を、ルーズリーフ1頁に、簡潔にまとめておく。</p>

	方:気管支喘息管理の進歩をモデルに (呼 吸器内科:林真一郎診療教授)	
成績評価の方法 と基準	毎回、講義者にレポートを提出してもらって、その講義内容の理解度、受講した ことによる意識の変化などを評価する。なお、出席が 2/3 に満たない者には、単 位を認めない。(10 回以上の出席が必要)	
開示する試験問 題等	レポートにより評価するため、開示する試験問題はない。	
開示方法	レポートにより評価するため、開示する試験問題はない。	

授業科目名	子どもの発達支援Ⅰ（発達障害・心身症(不登校)と小児保健)	
担当教員(所属)	藤田 一郎(文化教育学部)	
講義形式	ビデオ視聴、パワーポイント・配布資料・教科書を使用した講義、学生とのディスカッション等を行う。	
講義概要	子どもの問題を理解して支援するため、子どもの心理と様々な病態を学ぶ。	
開講の意図	教員、医療関係者を目指す学生に受講をお勧めするが、将来の自分の子育てにも役立つはず。	
到達目標	子どもの心理と病態についてディスカッションできること。	
履修上の注意	8時50分に出席確認を兼ねた問題を考える。	
授業計画	<p>内容</p> <p>第1回 赤ちゃんの心の世界（赤ちゃんの能力、母子相互作用）</p> <p>第2回 甘えと自立（甘え、自立、反抗期）</p> <p>第3回 心身症とは（子どもの悩みの現れ方）</p> <p>第4回 子どもの心身症（思春期やせ症、自律神経失調症）</p> <p>第5回 うつ病（うつ病、産後うつ病、子ども虐待）</p> <p>第6回 発達障害①（自閉症、アスペルガー症候群）</p> <p>第7回 発達障害②（注意欠陥多動性障害、学習障害）</p> <p>第8回 心身症クリニック①（薬物療法、神経症）</p> <p>第9回 心身症クリニック②（認知行動療法、育て直し療法）</p> <p>第10回 家族療法①（不登校への対応、カウンセリング）</p> <p>第11回 家族療法②（事例検討、ロールプレイ）</p> <p>第12回 ソーシャルスキル（アサーション）</p> <p>第13回 親子関係の観察</p> <p>第14回 子どもの心の育て方</p> <p>第15回 講義内容の復習</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>課題：自立するとは</p> <p>課題：心身症とは</p> <p>課題：思春期やせ症の身体症状</p> <p>課題：うつ病の対応</p> <p>課題：自閉症の症状</p> <p>課題：注意欠陥多動性障害の症状</p> <p>課題：抗不安薬の作用機序</p> <p>課題：母子の愛着形成を促す方法</p> <p>課題：家族療法とは</p> <p>課題：カウンセリングのコツ</p> <p>課題：ソーシャルスキルとは</p> <p>課題：愛着行動パターン</p> <p>課題：前向き子育てとは</p> <p>課題：講義内容の復習</p>
成績評価の方法と基準		
開示する試験問題等		
開示方法		

授業科目名	子どもの発達支援Ⅱ(児童福祉施設の目的と役割)	
担当教員(所属)	松山 郁夫(文化教育学部),山口 玲子(文化教育学部)	
講義形式	講義形式(対面授業・同期型遠隔授業)	
講義概要	<p>この科目は「子どもの発達と支援プログラム」のコア科目の一つである。科目名は子どもの発達支援Ⅱ(児童福祉施設の目的と役割)である。</p> <p>子どもの発達を支援する立場にある専門職[教師、福祉職、心理職、医師、保健師、看護師、保育士等]は子どもをより深く理解するため、そのおかれている生活環境を含めた子どもを取り巻く状況について知識を得ておくことが求められる。児童福祉施設は児童福祉法上定められたいくつかの施設をさすが、その設置の目的や役割を学ぶことは、子どもたちに保障されるべき基本的な権利について認識を深めることと、現代の子どもを取り巻く課題のさまざまを学ぶことにつながっている。このような観点から、家族、子育て・子育て[発達]、虐待などの問題についても、そこに生きる子どもという視点から講義のなかで触れていく。</p>	
開講の意図	佐賀大学の学生及び一般市民の受講者で「子どもの発達と支援プログラム」履修認定証の交付を希望する学生は、予め本プログラムへの履修登録を行うこと	
到達目標	講義の内容は知識の伝達にとどまらず、今まさにどこかで起こっている問題として、受講者自身にも主体的に考えることを要求する。受講者自身が専門職として或は社会人として、こうした環境に生きる子どもたちに向き合った時、必ず活かされる貴重な経験となることを目標とする。本授業は、佐賀大学学士力3の(1)に対応している。	
履修上の注意	2名の講師によるオムニバス方式により開講する。なお、第1回～8回は松山、第9回～15回は山口が担当する。	
授業計画	<p>内容</p> <p>○総論的内容の講義</p> <p>1.本講義のオリエンテーション 2.児童に対する捉え方</p> <p>3.児童福祉(児童家庭福祉)に対する捉え方</p> <p>4.児童福祉・児童福祉施設の歴史その1</p> <p>5.児童福祉・児童福祉施設の歴史その2</p> <p>6.児童福祉法における児童福祉施設の概要その1</p> <p>7.児童福祉法における児童福祉施設の概要その2</p> <p>8.児童福祉・児童福祉施設の今後の展開</p> <p>○各論的内容の講義</p> <p>9.子どもの生活と発達</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>児童に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童に対する捉え方に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童福祉に対する捉え方に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童福祉・児童福祉施設の歴史に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童福祉・児童福祉施設の発展過程に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童福祉施設のあり方に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童福祉施設の概要に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童福祉施設の今後のあり方に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>保育所とそこで生活する子どもたちに関連する内容を整理して</p>

	<p>保育所とそこで生活する子どもたち</p> <p>10.心身の発達に課題を持つ子どもたちのための施設（実際と課題） 知的障害児施設・知的障害児通所施設・肢体不自由児施設・肢体不自由児通園施設等</p> <p>11.生活の場を保障するための施設（実際と課題） 母子寮、乳児院、養護施設</p> <p>12.治療・指導を目指した施設（実際と課題） 児童自立支援施設、情緒障害児短期治療施設</p> <p>13.児童相談所（実際と課題）</p> <p>14.現代の子育てと児童虐待（まとめ）</p> <p>15.社会的養護と子どもの育ち（まとめ）</p>	<p>おくこと。</p> <p>心身の発達に課題を持つ子どもたちのための施設に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>生活の場を保障するための施設に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>治療・指導を目指した施設に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>児童相談所に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>子育てと児童虐待に関連する内容を整理しておくこと。</p> <p>これまでの授業の重要事項を整理しておくこと。</p>
成績評価の方法と基準	2名の講師による講義が終了してのち、定期試験期間中にテスト(レポートを含む)を行い、その結果で評価する。	
開示する試験問題等	定期試験の問題、解答例及び配点を開示する。	
開示方法	履修登録した者で開示を希望する場合には、事前に講義期間中に直接担当者に申し込むこと。	

授業科目名	子どもの発達支援Ⅲ(発達障害と不登校への心理・教育支援)	
担当教員(所属)	園田 貴章(文化教育学部),網谷 綾香(文化教育学部),中島 範子(文化教育学部)	
講義形式		
講義概要	<p>2年生以上の場合、主題科目 子どもの支援（発達障害と不登校への心理・教育支援）に相当する科目です。</p> <p>この科目は、発達障害と不登校という現在の学校教育課題について、教育・心理の側面から総合的に講義するものである。学習、行動のコントロール、社会性の形成の面で困難のある幼児・児童・生徒の教育ニーズ（本人が教育に対して求めること）を見つけ、それに基づいて、指導や支援を行う能力を養うためには、個人の人権保護の理解がまず必要であり、それを基礎に、発達障害の症状と対応・指導の基本、WISC-Ⅲ等の心理検査による症状の確認、発達障害や不登校のある児童等への心理的ケア、について総合的に学ぶ必要がある。</p> <p>このような知識や技術の習得は、子どもの成長・発達や教育に関わる専門職（医師、教員、保健師、看護師、心理士、福祉士、養護教諭等）に必須であり、子どもや家族のニーズを専門領域の壁で分断せず、まるごとそれを真ん中において、医師、教員等の専門職がそれぞれの立場から関わりながら、専門職間支援ネットワークで包み込むために必要である。</p>	
開講の意図	<p>発達障害と不登校という現在の学校教育課題について、教育・心理の側面から総合的に講義するものである。このような知識や技術の習得は、子どもの成長・発達や教育に関わる専門職（医師、教員、保健師、看護師、心理士、福祉士、養護教諭等）に必須であり、子どもや家族のニーズを専門領域の壁で分断せず、まるごとそれを真ん中において、医師、教員等の専門職がそれぞれの立場から関わりながら、専門職間支援ネットワークで包み込むために必要である。</p>	
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 特別支援教育と人権、インクルーシブ教育、不登校支援と人権について説明することができる。 2. 発達障害の基本症状と関連症状、自閉症^{アスペルger}の症状と対応の基本、ADHD（注意欠陥・多動性障害）の症状と対応の基本、LD（学習障害）の症状と対応の基本について説明することができる。 3. 心理検査の必要性和検査の構成、WISC-Ⅲの検査概要と事例、K-ABCの検査概要と事例、DN-CASの検査概と事例について説明することができる。 4. 子どものこころの問題と支援、不登校を通して見る子どもの心理、発達障害とこころの問題、子どもに対する心理的支援の実際について説明することができる。 	
履修上の注意		
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子どものこころの問題と支援 2. 不登校を通して見る子どもの心理 3. 発達障害とこころの問題 4. 子どもに対する心理的支援の実際 5. インクルーシブ教育システムについて 6. 学習障害（LD）について 7. 注意欠陥・多動性障害（ADHD）について 	

	て 8. 自閉症スペクトラム (ASD) について 9. 対応や支援方法 (LD) 10. 対応や支援方法 (ADHD、ASD) 11. 心理検査の必要性と検査の構成 12. WISC-IIIの検査概要と事例 13. K-ABC等の検査概要と事例 14. DN-CASの検査概要と事例 15. 各種検査を生かした指導事例	
成績評価の方法 と基準		
開示する試験問 題等		
開示方法		

授業科目名	子どもの発達支援Ⅳ（家族支援と子育てスキル）	
担当教員（所属）	藤田 一郎(文化教育学部),中島 範子(文化教育学部),山口 玲子(文化教育学部)	
講義形式	講義形式（対面授業・同期型遠隔授業）	
講義概要	この科目では、発達障害、心身症や不登校など問題を抱える子どもを持つ家族への支援、そのための子育てに関する技術を学ぶ。子育てに必要な知恵の一つは子どもの心の理解である。	
開講の意図	乳幼児期の子どもの心の発達、親子関係の変化、親としての子育ての技術（しつけ）について学習し、様々な子どもの問題への対応、支援方法を習得する。	
到達目標	子どもに関わる諸問題を討論し、支援方法を述べることができる。	
履修上の注意		
授業計画	<p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前向き子育てプログラム① 2. 前向き子育てプログラム② 3. 子育て今昔 4. 仕事と子育て 5. 子育てのコーチング 6. 子どもの心身症と家族支援 7. 不適応を抱えた児童生徒への支援 8. 家族支援は周産期から 9. ダウン症児と家族への支援 10. 前向き子育てプログラム③ 11. 子育てナウ 12. 親になるということ～発達に課題を持つ子どもと家族 13. 子どもと「暴力」 14. 地域と子育て 15. 支援者として必要なこと 	授業時間外の学習
成績評価の方法と基準	受講態度（出席状況）30%、試験成績70%、レポート発表などの積極的な参加を総合して評価する。	
開示する試験問題等	試験問題	
開示方法	希望者は申し出ること	

授業科目名	障がい者就労支援 I (生活就労支援におけるカウンセリングの基礎)	
担当教員 (所属)		
講義形式	対面授業・同期型遠隔授業	
講義概要	この科目では、職業リハビリテーション過程における職業カウンセリングの目的・方法などを理解し、職業カウンセリングに活用できる手法として、カウンセリング技法の基礎を習得する。次に、職業リハビリテーションにおける基本的な相談場面を設定し、演習を行うことにより、職業相談についての認識を深める。さらに、職業評価に必要となる各種検査技法についても具体的に理解する。	
開講の意図	障がいを持たれた方の働く意欲や動機づけを高め、職場での就労支援はもとより、さらなるキャリアアップや QOL (生活の質) の向上を支援する「障がい者就労支援コーディネーター」を養成することを目的としています。	
到達目標	本授業は、「障がい者就労支援コーディネーター養成プログラム」の必修科目である。将来、障がい者の就労を支援するための知識とスキルを身につける。	
履修上の注意	障がい者就労支援 I	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1.職業カウンセリング概論 2.職業カウンセリング演習 (1) 3.職業カウンセリング演習 (2) 4.職業カウンセリング演習 (3) 5.職業カウンセリング演習 (4) 6.職業カウンセリング演習 (5) 7.職業相談演習 (1) 8.職業相談演習 (2) 9.職業相談演習 (3) 10.各種検査法演習 (1) 11.各種検査法演習 (2) 12.各種検査法演習 (3) 13.各種検査法演習 (4) 14.各種検査法演習 (5) 15.まとめ 試験	適宜指示する。
成績評価の方法と基準	講義中に指示するミニレポートや試験などから総合的に評価する。	
開示する試験問題等	なし	
開示方法	なし	

授業科目名	障がい者就労支援Ⅱ（テクニカルエイド，コミュニケーションエイド概論	
担当教員（所属）	井手 将文,福嶋 利浩	
講義形式		
講義概要	講義	
開講の意図	障がい者が社会生活を行うための社会環境について、主に設備・機器・道具の側面から基本的な情報を理解することを目的とする。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・障がいのあるなしにかかわらず、誰もが多様性を持っていることを理解する。 ・その方の生活状況を把握した上で、そのニーズに着目できるようになる。 	
履修上の注意	Live Campus で連絡することあり	
授業計画	<p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス・受講者振分け・リハビリテーション工学概論 2 テクニカルエイド（1）ADL と様々な日常生活道具 3 テクニカルエイド（2）移乗・移動用具 4 テクニカルエイド（3）居宅の改善（外回り・玄関・居間・寝室） 5 テクニカルエイド（4）居宅の改善（台所・洗面所・浴室・トイレ） 6 コミュニケーションエイド（1）コミュニケーションの基本構造 7 コミュニケーションエイド（2）重度障がい者のコミュニケーション（文字盤操作） 8 コミュニケーションエイド（3）重度障がい者のコミュニケーションの実際 9 コミュニケーションエイド（4）知的障がい者のコミュニケーション 10 テレビゲーム操作体験 11 PC の適合（1）Windows OS の障がい対応とその設定法 12 PC の適合（2）障がい者向けの入力端末や補完ソフトウェア 13 障がい者スポーツ（1） 14 障がい者スポーツ（2） 15 振返り 	<p>授業時間外の学習</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 身の回りにどんな道具や便利な機能があるか気づく 2 ノンステップバス乗車を体験 3 車いすを押してみたり、乗車を体験する 4 自宅玄関の問題を知る 5 学内設備を確認 6 高齢者との話題 7 文字盤練習 8 文字盤の練習 9 講義内容を整理 10 障がいがあっても楽しめるゲームについて調べる 11 設定法の復習 12 講義内容を整理 13 自分の好きなスポーツについて調べる 14 自分の好きなスポーツについて調べる 15 過去の講義を振り返り、学習の目標を確認し自分の獲得したものが何かを自覚する
成績評価の方法と基準	出席：40点、講義中に指示するレポート：30点、定期試験：30点で評価する	
開示する試験問題等	各人レポートについては添削し返却、また、各人レポートについては個人情報等を排し受講者に公開する	
開示方法	Live Campus にて閲覧可能とする	

授業科目名	障がい者就労支援Ⅲ（障害特性と就労支援実践）	
担当教員（所属）		
講義形式	講義	
講義概要	各障害別に、その特性や職業問題を理解した上で、職業生活上での課題や対処法および雇用管理の方法と課題について紹介する。また、職業評価業務のケーススタディを通して職業リハビリテーションサービスの一端を理解する。	
開講の意図	障がい者の就労について、障がい特性という視点から就労までの概要を把握し、具体的事例から支援方法の一端を理解することを目的とする。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・各障がい別に、障がいに起因する基本的な問題点を把握する。 ・障がい当事者にとっての就労の意味を理解し、就労したいという心理を理解する。 	
履修上の注意	Live Campus で連絡することあり	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス・障がい者の全体像・就労支援の変遷 井手： 2 障がい特性と職業問題 井手：(肢体不自由(1)) 脊髄損傷の障がい特性、車いすの理解 3 障がい特性と職業問題 井手：(肢体不自由(2)) 脳性まひの障がい特性 4 障がい特性と職業問題 清家先生：(当事者) 障がいを持つ経営者の視点 5 障がい特性と職業問題 井手：(当事者) 脳性まひのコミュニケーション障害の理解 6 障がい特性と職業生活 井手：(聴覚障がい(1)) 雇用上の配慮、手話演習 7 障がい特性と職業問題 倉知先生：(聴覚障がい(2))聴覚障がいをめぐる課題、実践報告 8 障がい特性と職業問題 井手：(視覚障がい(1))全盲者の報告、発症から社会参加まで 9 (土)1 集中講義 障がい特性と職業問題 井手：(視覚障がい(2))全盲と弱視の特徴と対応 10 (土)2 集中講義 障がい特性と職業問題 井手：肢体不自由・視覚障がい・聴覚障がいの障がい特性のとりまとめ 11 (土)3 集中講義 職業評価業務 吉光先生：職業リハビリテーションにおける評価業務の概要 12 (土)4 集中講義 障がい特性と職業問題 吉光先生：(精神障がい(1)) 統合失調症とうつ病 13 障がい特性と職業問題 井手：(内部障がい・難病) 難病の実態と就労支援の特徴（難	適宜指示

	病相談・支援センターとの連携) 14 障がい特性と職業問題 倉知先生:(精神障 がい(2)) 支援のポイント 15 まとめ 井手:	
成績評価の方法 と基準	出席：40点、講義中に指示するミニレポート：30点、試験：30点で評価する。	
開示する試験問 題等	1)試験得点	
開示方法	得点については学生の要請に応じて本人分を開示する。	

授業科目名	障がい者就労支援Ⅳ（医療的ケアを必要とする就労支援と事例紹介）	
担当教員（所属）		
講義形式		
講義概要	高齢者、障がい者（児）の自立した生活を実現するための総合的・学際的な支援の理論と実践法についての理解を目的とし、従来の社会福祉学的なアプローチのみならず、医学的、工学的アプローチを多く取り入れた医文理融合科目である。	
開講の意図	高齢者や障がい者を支援するには、衣食住などの日常生活を支える側面と就労や地域における活動など社会的生活を支える側面の双方が必要となる。それらの支援の理念や実践的活動でのアプローチを理解することは、高齢者や障がい者に直接的に役立つと共に、社会における高齢者や障がい者への認識をより適切な方向へ変化させることができるものである。このような知識や技術の習得は、将来の専門教育において、様々な場面での展開が期待できる。	
到達目標	この科目では、職業リハビリテーションを概説し、雇用管理論をはじめ、職業指導の基となる学習・行動についての基本的な理論や、職業評価を行うための基礎的な知識を習得する。また、労働関連法規や障害者福祉・教育制度について概説し、障害者の職能開発や職業安定行政の各種業務について理解する。	
履修上の注意		
授業計画	<p>内容</p> <p>職業カウンセリングの基礎編を2/5、難病患者の支援に関する内容を1/5、応用的な就労支援に関する内容を2/5で構成した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.職業カウンセリング概論 2.職業相談演習 3.職業カウンセリング演習（1） 4.職業カウンセリング演習（2） 5.各種検査法演習（1） 6.各種検査法演習（2） 7.医療的ケアを必要とする障がい者の就労支援 8.就労支援の対象としての難病 9.極めて重度の障害を持つ方々の就業就労事例 10.精神障害を持つ方々の就労支援（1） 11.精神障害を持つ方々の就労支援（2） 12.精神障害を持つ方々の就労支援（3） 13.発達障害を持つ方々の就労支援（1） 14.発達障害を持つ方々の就労支援（2） 15.高次脳機能障害を持つ方々の就労支援試験 	授業時間外の学習
成績評価の方法と基準	講義中に指示するミニレポートや試験などから総合的に評価する。	

開示する試験問題等	なし
開示方法	なし

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	佐賀の歴史文化Ⅰ（佐賀の歴史概説）	
担当教員（所属）	伊藤昭弘（地域学歴史文化研究センター）	
講義形式	講義	
講義概要	「佐賀」という地域性を考えるために、歴史的な背景を学ぶ。具体的には、「佐賀」の形成過程や歴史的特質、特に江戸時代以降の歴史について検討する。	
開講の意図	佐賀地域の歴史を概観し、プログラムⅡ以降の理解をより深めるための基礎授業とする。	
到達目標	「佐賀」という地域の成り立ちを理解する。	
履修上の注意	日本史の基礎知識があるほうが望ましい。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>1 ガイダンス 2～5 「佐賀」前史 6～11 「佐賀藩」の成立と展開 11～14 「佐賀県」の成立・廃止・再置 15 まとめ</p>	<p>必要があれば授業で指示する。</p>
成績評価の方法と基準	テスト（60%）、受講態度や提出物（40%）	
開示する試験問題等	希望者には解答を開示します。	
開示方法	教員へ希望を通知のこと。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	佐賀の歴史文化Ⅱ（古文書からみる佐賀の歴史）	
担当教員（所属）	伊藤 昭弘（地域学歴史文化研究センター）	
講義形式	講義・講読	
講義概要	佐賀地域に関する古文書（中世～近世）を読み、佐賀の歴史に関して具体的な事例を学ぶ。	
開講の意図	江戸時代の佐賀について古文書を通して学ぶことにより、歴史理解のための方法論を身につける。	
到達目標	古文書読解の基礎能力を習得し、佐賀の歴史をより深く理解する。	
履修上の注意	日本史の基礎知識があれば望ましい。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	1 ガイダンス 2～8 古文書の読み方 9～14 古文書からみる佐賀の歴史 15 まとめ	古文書に関するテキスト（授業で指示）を読む。
成績評価の方法と基準	テスト（60%）、受講態度や提出物（40%）	
開示する試験問題等	希望者には解答を開示します。	
開示方法	教員へ希望を通知のこと。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	佐賀の歴史文化Ⅲ（佐賀の歴史性と現代）	
担当教員（所属）	重藤輝行（文化教育学部）	
講義形式	演習・講義	
講義概要	佐賀に関する考古学的遺跡などの歴史的記念物、近現代の歴史について学び、その現代的な意義を考える。授業はグループ討議、発表を中心に展開する予定である。平成26年度は考古学的遺跡などの歴史的記念物を対象とする。	
開講の意図	地域の将来を考え、創造する社会人には、現代の文化・社会に組み込まれた歴史性に関する実践を伴う認識が必要と考えられる。本講義では佐賀を対象として、そのような思考、実践の在り方を考えることを目的としている。	
到達目標	地域の歴史やそれに関する物質資料・歴史資料を知り、現代との差異と連続性を捉えた上で、将来の地域を担う人材としての思考、行動ができるようになる。	
履修上の注意	授業に出席するとともに、グループ討議、発表などで発言し、自発的に資料・文献等を調査するなどの積極性をもって受講してほしい。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス・グループ分け 2 佐賀県内の古代遺跡概要1（講義） 3 佐賀県内の古代遺跡概要2（講義） 4 見学の事前学習（グループ討議） 5～8 吉野ヶ里遺跡等の文化遺産見学 （土日のうち1日を当てる。可能ならばバスを利用する予定である） 9～10 見学のまとめと発表準備（グループ討議） 11～14 グループごとの発表 （各回2～3グループ） 15 まとめ 	<p>講義に関する予習・復習 講義に関する予習・復習 討議のための予習・復習 復習としての見学时メモ等整理</p> <p>討議のための予習・復習</p> <p>グループ発表の準備、他のグループの発表に関する復習</p>
成績評価の方法と基準	レポート（50%）、受講態度・出席状況（50%）	
開示する試験問題等	希望者にはレポート採点基準等を開示します。	
開示方法	教員へ希望を通知のこと。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	佐賀の歴史文化Ⅳ（佐賀の文化）	
担当教員（所属）	諸泉 俊介（全学教育機構）	
講義形式	講義・調査	
講義概要	佐賀地域に関する地理的・歴史的事情から佐賀の文化を知り、佐賀の地域的特徴について考える。	
開講の意図	東に筑後川が流れ、西は玄海灘・アジア大陸に臨み、南には有明海を抱え、そして北に脊振・天山山地を背負った佐賀地域は、古来より独自の歴史・文化を育んできた。こうした歴史・文化が、今日の佐賀の地域には脈々と息づいている。本講義では、インターフェースプログラムの最終授業として、佐賀の地域の文化の特色を理解し、そこに生きる人々の課題を探る。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ① 佐賀の歴史と文化についての知識の修得 ② 佐賀の地域が抱える課題の発見と解決方向の理解 ③ 多様な文化と価値観の理解 ④ 持続的な学習力と社会への参画力の修得 ⑤ 高い倫理観や社会的責任感の修得 	
履修上の注意	講義だけでなく、歴史的な遺跡などについての調査を行います。	
授業計画	<p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 2～8 佐賀の文化史についての講義 9～14 佐賀の文化についての調査 15 まとめ 	<p>授業時間外の学習</p> <p>講義ごとに、講義の内容について整理し、まとめる。</p>
成績評価の方法と基準	到達目標の①知識の修得、②課題の発見、③多様な価値観は主に最終レポート（60％）で評価します。到達目標の④持続的な学習力と⑤倫理観・責任感は、主に受講態度や提出物（40％）で評価します。	
開示する試験問題等	希望者にはレポート課題の意図等を開示します。	
開示方法	教員へ希望を通知のこと。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域経済と社会Ⅰ（地域と産業）	
担当教員（所属）	宮崎卓朗（経済学部）	
講義形式	講義	
講義概要	様々な産業が日本には立地しているが、それは日本中に均等には立地していない。そのことは地域間分業の現れであるが、地域格差の原因にもなる。どのような産業が立地しているかは地域に大きな影響を与えるものであり、このメカニズムを理解しておく必要がある。	
開講の意図	さまざまな産業が地域経済に果たす役割を産業別に考えていく。	
到達目標	さまざまな産業の立地と各地域の経済格差や地域分業の形を理解する。	
履修上の注意	数回の課題・レポートを課す	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	最初に日本全体での産業構成の特徴を他国と比較して解説する。そののちに産業別に立地の特徴を説明していく。	課題やレポートのために、調べ物をする。
成績評価の方法と基準	定期試験と平素の成績	
開示する試験問題等		
開示方法		

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域経済と社会Ⅱ（地域と農業）	
担当教員（所属）	白武義治（農学部）	
講義形式	講義	
講義概要	地域経済に果たす農業の役割を具体的に示す。	
開講の意図	農業を通じて地域という単位の重要性を解説する。	
到達目標	農業と地域経済のつながりを理解できるようになる。	
履修上の注意	数回の課題・レポートを課す	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	最初に日本がかかえる農業問題について解説する。そののちに様々な地域を事例に農業と地域とのつながりについて概説する。	課題やレポートのために、調べ物をする。
成績評価の方法と基準	定期試験と平素の成績	
開示する試験問題等		
開示方法		

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域経済と社会Ⅲ（地域と労働）	
担当教員（所属）	富田義典（経済学部）	
講義形式	講義	
講義概要	雇用問題が重要であることは論を待たない。雇用に関して地域という観点から考えてみたい。	
開講の意図	賃金の地域格差など、地域を単位とする雇用問題が重要視されている。これらの問題を理解することは地域で生活するために不可欠である。	
到達目標	雇用問題の基本的な部分を理解する。	
履修上の注意	数回の課題・レポートを課す	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	様々な国や地域を事例に雇用問題を解説し、とくに日本における雇用の実態と問題を地域とのつながりという点で概説する。	課題やレポートのために、調べ物をする。
成績評価の方法と基準	定期試験と平素の成績	
開示する試験問題等		
開示方法		

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域経済と社会Ⅳ（現代の地方自治）	
担当教員（所属）	井上亜紀（経済学部）	
講義形式	講義	
講義概要	都道府県や市町村の活動について、法律学の観点から考察する。	
開講の意図	地方自治の在り方を考えることは、地域を考える際に不可欠な要素である。どのような地方自治が望ましいのかを考えるための基本的な知識を提供する。	
到達目標	現在の日本の各自治体が抱える問題の基本を理解する。	
履修上の注意	数回の課題・レポートを課す	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	日本を中心に様々な国の地方自治に関する制度を解説し、それぞれの特徴と問題点を説明する。	課題やレポートのために、調べ物をする。
成績評価の方法と基準	定期試験と平素の成績	
開示する試験問題等		
開示方法		

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域創成学Ⅰ（地域学入門）	
担当教員（所属）	五十嵐 勉（全学教育機構）・稲岡 司（農）・辻 一成（農）	
講義形式	講義、およびグループ研究（プレゼンテーション）	
講義概要	アジア・太平洋諸地域における地域研究の実践事例を踏まえた「地域学」の考え方、およびその手法の基礎を学ぶ。	
開講の意図	地域課題をグローバルな視点から考え、その解決に必要な基礎を学ぶ。	
到達目標	事例地域の地域課題を通して、地域研究の考え方と研究手法の基礎を理解することを目標とする。	
履修上の注意	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのフィールドワーク型授業の基礎科目で、受講人数を40名以内に制限する。講義とグループ学習（プレゼンテーションを含む）形式で行う。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 ガイダンス（五十嵐）</p> <p>第2～4回（五十嵐）</p> <p>ミャンマー地域研究のフィールドから</p> <p>Ⅰ：ミャンマーという国</p> <p>Ⅱ：農業、貧困、環境問題</p> <p>Ⅲ：開発援助問題</p> <p>第5～8回（稲岡）</p> <p>トンガ地域研究のフィールドから</p> <p>Ⅰ：トンガ王国とは</p> <p>Ⅱ：ネットワーク（移住・貿易）依存症？</p> <p>Ⅲ：生活習慣病の宝庫</p> <p>Ⅳ：国家消滅？！</p> <p>第9～12回（辻）</p> <p>ベトナム地域研究のフィールドから</p> <p>Ⅰ：ベトナムという国</p> <p>Ⅱ：農業問題</p> <p>Ⅲ：環境問題</p> <p>Ⅳ：開発援助問題</p> <p>第13～15回（五十嵐）</p> <p>グループ研究（地域選択別）報告と討論</p>	<p>第1回 地域研究に関する基礎的資料を読む</p> <p>第2～4回 ミャンマーに関する基礎文献を読む</p> <p>第5～8回 バングラデシュに関する基礎文献を読む</p> <p>第9～12回 ミャンマーに関する基礎文献を読む</p> <p>第13～15回 グループ毎に自主研究を行い、発表資料をまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	出席を重視（20点）、各担当教員による課題レポート（30点）、グループ研究（報告・討議）50点。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域創成学Ⅱ（地域コミュニティ論）	
担当教員（所属）	五十嵐 勉（全学教育機構）・山内一祥（全学教育機構）	
講義形式	講義、およびフィールド・ワーク（調査・報告・討議）	
講義概要	身近な地域における多様なコミュニティの意味・現状と課題、及びその活性化について考える。	
開講の意図	地域アイデンティティを醸成し、地域社会の持続的な発展について考える。	
到達目標	身近な地域のコミュニティ活動に参画しながら、その課題の発見と活性化に向けた提案を行うことを目的とする。	
履修上の注意	講義に加えて、エクスカッション（巡検）と野外調査のフィールド・ワーク型の授業を行うため、受講人数を40名以内に制限する。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 ガイダンス（五十嵐） 第2～5回（五十嵐） 地域コミュニティ論概説 I：農山漁村におけるコミュニティ II：都市におけるコミュニティ III：地域コミュニティの衰退と再生 IV：新しいコミュニティ 第6～7回（山内） コミュニティ活動とファシリテーション I：ファシリテーション論 II：ファシリテーション入門 第8～13回（五十嵐・山内） 地域コミュニティ活動への参画（グループ研究） I：自治会活動 II：NPO活動 III：コミュニティ・デザイン 第14～15回（五十嵐・山内） グループ研究の報告と討論</p>	<p>第1～5回 地域コミュニティに関する文献を読む 第6～7回 ファシリテーションに関する文献を読む 第8～13回 身近なコミュニティ活動を調べ、活動に参加する。ファシリテーター、ないしはサポーターとして、コミュニティ活動を支援してみる。 第14～15回 グループ毎に自主研究を行い、発表資料をまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	出席・調査実習への参加を重視（50点）、グループ研究（報告・討議）50点。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域創成学Ⅲ（都市の魅力とその再生を考える）	
担当教員（所属）	三島伸雄（工学系研究科）・後藤隆太郎（工学系研究科）・瀧上貴由樹（工学系研究科）	
講義形式	講義、およびフィールド・ワーク（調査・報告・討議）	
講義概要	実地調査を中心に、地域の空間的課題の発見・問題解決に関する授業を行う。	
開講の意図	地域の建物やまち並みに関する空間的魅力や課題を調査し、地域社会と物的環境の持続的な発展について考える。	
到達目標	対象地域の課題調査・分析を通して、地域社会における問題解決型研究法の基礎力を習得することを目標とする。	
履修上の注意	講義に加えて、エクスカーション（巡検）と野外調査のフィールド・ワーク型の授業を行うため、受講人数を40名以内に制限する。	
授業計画	<p>内容</p> <p>第1回 ガイダンス（三島）</p> <p>第2～3回（三島・後藤） 地方都市の空間的課題 Ⅰ：まちの抱える空間的課題1 Ⅱ：まちの抱える空間的課題2</p> <p>第4～5回（三島・後藤） 空間調査の手法 Ⅰ：調査方法1（実測調査） Ⅱ：調査方法2（分析方法）</p> <p>第6～12回（三島・後藤・瀧上） 地域調査演習（グループ研究：以下の中から1テーマを選択） Ⅰ：まちなかの実測・地域調査 Ⅱ：集住地の実測・地域調査 Ⅲ：歴史的建物の実測調査</p> <p>第14～15回（三島・後藤・瀧上） グループ研究の報告と討論</p>	<p>授業時間外の学習</p> <p>第1～3回 地域の空間的課題に関する文献を読む。</p> <p>第4～5回 空間調査の手法に関する文献を読む。</p> <p>第6～12回 実測図を作成する、フィールドノートを整理する、課題の整理・分析を行う、空間改善提案を作成する。</p> <p>第14～15回 グループ毎に自主研究を行い、発表資料をまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	出席・調査実習への参加を重視（50点）、グループ研究（報告・討議）50点。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	

インターフェース授業科目シラバス

授業科目名	地域創成学Ⅳ（地域を観る・歩く・調べる）	
担当教員（所属）	五十嵐 勉（全学教育機構）・山下宗利（文教）・藤永 豪（文教）	
講義形式	講義、およびフィールド・ワーク（調査・報告・討議）	
講義概要	身近な地域の野外調査を通して、地域課題の発見・問題解決型の授業を行う。	
開講の意図	地域アイデンティティを醸成し、地域社会の持続的な発展について考える。	
到達目標	事例地域の地域課題の調査・分析を通して、問題解決型研究法の基礎力を習得することを目標とする。	
履修上の注意	講義に加えて、エクスカージョン（巡検）と野外調査のフィールド・ワーク型の授業を行うため、受講人数を40名以内に制限する。	
授業計画	内容	授業時間外の学習
	<p>第1回 ガイダンス（五十嵐） 第2～3回（五十嵐・藤永） 農山漁村の地域課題と調査法 I：農山漁村の抱える課題 II：地域調査法 第4～5回（山下・五十嵐） 都市の地域課題と調査法 I：地方都市の抱える課題 II：地域調査法 第6～12回（五十嵐・山下・藤永） 地域調査演習（グループ研究） I：背振山間地域の事例調査演習 II：離島地域の事例調査演習 III：佐賀市の事例調査演習 第14～15回（五十嵐・山下・藤永） グループ研究の報告と討論</p>	<p>第1回 地域調査法に関する文献を読む 第2～3回 農山漁村問題に関する文献を読む 第4～5回 都市問題に関する文献を読む 第6～12回 調査表を作成する・統計／資料分析を行う、フィールドノートを整理する 第14～15回 グループ毎に自主研究を行い、発表資料をまとめる。</p>
成績評価の方法と基準	出席・調査実習への参加を重視（50点）、グループ研究（報告・討議）50点。	
開示する試験問題等	講義課題・レポートの出題意図と評価基準、プレゼンテーションの評価基準、定期試験の解答例を希望者に開示する。	
開示方法	開示を希望する場合は、定期試験終了後2週間以内に担当教員に申し出ること。	